特30
277

勸學 島地嘿雷師題辭

求念院 藤枝令道師陳述

正信偈講話

全二冊

京都 興教書院出版

佛說

正信偈講話上

造由　求念院　藤枝　令道　陳述

今此正信偈を撰するに。初めに造由と申して。高祖大師今偈御製作の思召を伺ふに。先づ御本書行卷の偈前に「皈二大聖眞言一閲二大祖解釋一。信二知佛恩深遠一。作二正信念佛偈一」と仰せられ。此偈を作るは別儀でなひ。唯だ知恩報德の爲めなりと云ふ御意なるなり。仍て大聖の眞言とは。正しく淨土の三部經。大祖の解釋とは三國七高祖の論釋。次に佛恩の深きを信知して此偈を作るとあるは。即はち高祖の相行化他。依て善導の「自信敎人信。難中轉更難。大悲傳普化。眞成報佛恩」とある釋文の意ろにして。是が眞實の報恩となる。御和談に「他力の信をゑんひとは。佛恩報せんためにとて。如來二種の回向を。十方にひとしくひろむべし」本願他力の御法を聽聞し奉る上は。口に稱ふる稱名は勿論。三業發動の行

作報謝の經營に非ずと云ふ事なし。依て古德も今偈の造由に付ひて。三義を講述せらる。一に知恩報德の爲めの故。二に眞宗の傳承を顯はさん爲の故。三に自行化他の爲めの故。此三由が矢張り唯た一の知恩報德なり。眞宗の傳承を明すも大悲傳普化眞成報佛恩なり。自行も化他も自信敎人信眞成報佛恩なれば。一報恩の外なし。喩へば國利民福と云ふが如し。殖産も興業も世間万般國民の事業。其方法種類は澤山なれども。其皈する所ろ一の國利民福の爲の外なし。今も其如く。此正信偈に初め皈命无量壽如來等の二句。彌陀の果號を擧げて。是れは一朝一夕の御苦勞ではなひ。法藏菩薩因位の時。五劫の御思惟永劫の御修行。其次に十二光德を奬し夫より信の行者は此土に於ては正定聚不退の位に住し。順次は目出度淨土へ往生を遂げ。大般涅槃佛果圓滿の証を開く。是れ卽はち釋迦出世の本懐なりとて。唯說彌陀本願海との玉ひ。若し釋尊說き捨てになりたらば。末代迄弘通し玉ふまじきに。印度西天之論家中夏日域之高僧とて。天竺の二菩薩大唐の三祖。吾朝の二師傳道相承をし

す。故に唯可信斯高僧說と結び玉ふ。親鸞めづらしき法を弘むるに非ず。恩禿すゝむるとても其にわたくしなし。唯高僧の說なる故に之れを信せよと勸信し玉ふ。三國傳承の祖師各々此一宗を興行し玉ふと。譬へば覺の水を傳ふる如く。丁度遠方から水を取り求むるに。掛樋が續ひてあれば。水が傳ふ。若し中途にして欠げては水の來る道理はなひ。今も又其如く。三千年の昔より今日に至るまで。彌陀の本願念佛の法水を汲み奉るは。掛樋の水を傳ふ如く。七祖傳承の御苦勞なり。依て高祖は『慶哉西蕃月支の聖典東夏日域の師釋に遇ひ難くして今遇ふことを得聞がたくして已に聞くことをえたり』と仰せられ御自身の喜びが自行の德。然るに末世に生るゝ我れ人は。御染筆の聖敎に依りて法味を愛樂したてまつる。是れが敎人信の化他の德。之れを卷て收めて知恩報德と知らせ玉ふ。時に聖道門では經卷を讀誦し香花を捧るにいたるまでも。皆後生菩提の爲にとて回向する然るに今は佛恩の深遠なるを信知してとおりて。此功德を以て當來成佛の結緣とし玉ふにも非ず。唯た佛恩

報謝の外なし。御本書の終りに『念二佛恩深一不レ耻二人倫嘲一。若見二聞斯書一者信順爲レ因疑謗爲レ緣。信樂彰二願力一。砂果顯二於安養一』是れ佛恩の深きを思ひまはせば人倫の嘲りを耻ぢず。世間の人は如何樣に云ふとも。吾身は如何やうになりても苦しからず。身の上を思ふて人我に墮するは世間の人の習ひなれども法義に就ては少しも耻ぢず。剩へ此法を信じなば。順次は目出度佛果の位ひ此上なしの果報もへ。謗らばそしれ倒て大地を押へる如くこれを安養淨土へ生ずべき緣にやせんと。御懇切なる思召なり。扨恩と云ふことは。佛法斗でなひ儒道の上にも『身体髮膚受二之父母一。不二敢毀傷一者孝之始也』とありて。此体だは云ふに及ばず。髮一筋なりといへど父母より受ざるはなし。今の御信心も其如く。皆彌陀如來の下されもの。令諸衆生功德成就とあれば。恒沙无量の大功德殘らず如來の御回向なり。御和讃に『五濁惡世の有情の。選擇本願信ずれば。不可稱不可說不可思議の功德は行者の身にみてり』。然れば恩德とも恩惠とも申して。我身々々に受得したる。佛惠功德を喜ぶべきこと肝要なり。之れ

が當流の本意なり。

題號

次に題號と申して。正信念佛の四字の御意を伺ふに。先づ題は一部の總標と申して喩へば物の看板の如し。美人の看板を揭げて紅白粉の類を賣り。杉葉を揭げて酒を賣る。今正信念佛と云ふ看板を揭げては。一偈六十行百二十句に押し渡りて。本爲凡夫の誓約を信し。阿彌陀如來に皈命して。目出度淨土へ往生遂ぐると云ふ理はりを顯し玉ふの外なし。仍て一切の書籍論判みなての題號の一を見て始終の趣きが分る。譬ひ寺は門からと云ふ如く至極大切なるものなり。今も初め皈命无量壽如來と云ふより。終り唯可信斯高僧說にいたるまで。百廿句の偈は何を仰せられたものぞと云ふに。唯題號に標してある正信念佛の理り。言を換へていへば信と行との二つより外はなひ是れが法藏因位の誓願釋迦出世の本懷。七祖傳承の正意と知らせ玉ふなり

扨この正信念佛の二を敎行信証の四法に合して申せば。先づ敎と云ふは能詮と申して。此行信の二を詮はす爲の敎。此敎に依て詮はるゝが正信念佛。爾れば此敎を受けざれば止む。受くれば六趣四生の因亡び果滅す。六道輪回の業因は一念皈命の立處に消滅し。五尺の体だは如何やふに成ろうとも。臨終捨命の夕べには至二安養界一証二妙果一。目出度淨土に往生を遂げ。彌陀同体の御証りを開くに間違のなひうへは。敎と云ふも証と云ふも。此正信念佛の四字行信の二法にてもるなり。扨その証と云ふは。禪家に立つる悟道にも非ず。心佛及衆生是三无差別などゝ云ふ。悟道開覺のことにも非らず。往生卽成佛の理はりにして。御文章に「極樂に參りうつくしき佛けとはなるべきなり」と仰せられて。安養淨土の莊嚴は。唯佛與佛の智見なり。等覺の菩薩たりとも佛の内証は御存知なひ。清淨莊嚴の極樂へ往生を遂げ。非天非人虛無之身無極体の御証りを開かせて下さるのが。御當流の証の御謂れなれば。唯正信念佛の外はなひ。

次に此四字を別々に伺ふ時は。正と云ふは雜に對し傍に對し邪に對するの言にして。正直正當なること。法華經の中には正直捨方便と說かせられて方便權化を捨てゝ眞實一乘の法門を直に御說なさるゝを正直と云ふ。御當流に於ては善導大師の二河譬の御釋に。一心正念とも。又は正直に進むとも御示しなされて少しもまじりものゝなひよこしまならざることを正と云ふ少しでも水が雜りて居ては正眞正銘の酒とは云はれぬ。極樂は无爲涅槃界隨緣の雜善は恐くは生じがたし。雜行雜修自力の計ひでは叶はぬことをわらはさんがために正との玉ふたもの傍と云ふは本願の眞實に契當せざることと。邪と云ふは明らかに佛智の信せられぬもの。后の句に「邪見憍慢惡衆生信樂受持甚以難」と御示しなされて。弘願他力の御敎へを信じぬものは。皆邪見人の仲間入りと云はねばならぬ。姿た形ちは如何程殊勝らしく見へても。本願に疑ひの晴れぬ人は邪見の人なり。迦葉尊者の御言に「我從二今日一始得二正見一。自是之前我等悉名二邪見之人一」。すでにこれ禪家の大祖羅漢果を開く程の

大德の比丘おれば何の邪見の人であろう。然れども佛智に相應せぬ時は我身ながら邪見の人と仰せられた。今も其如く形振り斗り眞宗でも。姿た形は門徒でも。御開山の敎へに順せず本願をあやぶむ人は。皆邪見人にして三惡道へ行かねばならぬ。然るに正直正當に本願の由來を聞ひらき。无疑无慮乘彼願力と脇目もふらず。正直に彌陀の本願を信じたれば。易く淨土へ往生するなり。次に信とは疑に對するの言にして。疑とは猶豫不決の義。うたがひ深くして物に決定の着かぬのが疑といふもの。依て御當流に於ては聞信无疑とも。又は无疑无慮とも。又は疑蓋无雜とも敎へ玉ふ。御開山の御言に。信とは人の言を信のみて疑はざるなりとも知せ玉ふ。此信に付て二あり。一に自他各別の信。二に他力回向の信なり。自他各別の信とは聖道門自力建立の信のこと。智慧才覺に依りて信心が異る。近くは御傳文に信心諍論の一段あり。御開山御在世の砌り。或時御師匠法然上人の御前にて。聖信房勢觀房念佛房などと云へる。歴々の御弟子達御集りなされ大諍論をあそばされた。爰に心得ね

ばならぬのは。徒らに喧嘩口論をなすは誠に惡ひことにて。僧分などでは尙更のことながら。爭ふべきときにはどこまでも爭はねばならぬ。道理の立つた公正なる爭ひなれば。其爭ひや君子なりで至極結構な事ぢや。兎角人情を以て善惡を爭ふと大なる間違が生じる。道理の爲めには人情を離れてどこまでも爭ふべきこと。先づ遠く天竺にては知光淸辨の空有の爭ひと云ふが有りて大諍論であつた。これらが道の爲めの爭ひぢや。爾るに今御開山樣が信心の爭ひを成されたは何の爲めぢやと申すに。是れが正しく道理の爲め公正なる爭ひで。末世に生る〻御門徒の人々に。若し誤りがあつたらば大事ゆへ。大諍論をなされたも皆な今日の我れ人の爲ぢや。誠に恐れ多き事と存せねばならぬ。其故は御開山樣の仰せには。御師匠樣の御信心と此善信が信心とは。いさ〻かもかはることなく唯一なりと仰せられたれば。外の御弟子達谷めて申さる〻には。これはけしからぬ事を聞ものかな。善信房は御師匠の御信心と自身の信心と一なりとは。さあ其謂れがきゝたひと。左右から難

じかけられたれば御開山の仰せには是れは各々方の御言とも存せぬ。何故なれば御師匠様の深智博覧にましますに。此善信一つなりと申したら誠に恐れ多くもあろうけれど。往生の信心にいたりては。ひとたび他力信心の御ことはりを。聽聞したてまつりてよりこのかた。露いさゝかも私しなし。然れば聖人の御信心も他力より給はらせ玉ふ。其善信が信心も他力なれば。ひとしくして更にかはるところなしと。立板に水を流すが如くに答辨し玉ふ。其時御師匠様の御判決に。正しく仰せられてのたまはく。信心のかはると申すは自力の信に取りてのこと。即はち智慧名別なるが故に信亦各別なり。今他力の信心は善惡の凡夫共に機の方の分け隔てはなく。等しく佛のかたよりたまはる信心なれば。源空の信心も美信房の信心もさらに異ることなし。我かしこくて信ずるに非らず。若し信心が異りてある人々は。我が參らん淨土へはよも參りたまはじ。よく〳〵こゝろゐらるべきことなりと。判然仰せられたれば。愛に面々舌を卷き口閉じて止みにけりと。御傳抄拜讀の時には必

らず聽聞する通り。依りて自力建立の信心は。十人寄れば十色と皆な違ふ。他力御回向の御信心は。一切の男子も女人も智愚善惡一味に喜ばるゝのが他力御回向の信心。之れが正信の謂れなり。

信心と云ふ事に付ひて。自他各別の信心と。他力御回向の信心との二通りの御謂れのあることを辨じかけたが。自力建立の信心では自他各別と申して區々になる。今正信とある他力御回向の信心は。善惡の凡夫共に阿彌陀如來の御手元から。ひとしく御回向下さるゝのぢやで。時と處は違ふても。領受の信に違ひ目の无ひのが他力の御信心。扨此信と云ふ文字はまことゝ云ふ文字で。これを御文章には「信心の二字をばまことのこゝろとよむうへは。凡夫の自力のわろきこゝろにてはたすからず。如來の他力のよきれんこゝろにて助かるが故にまことのこゝろとよめるなり」と仰せられ。凡夫の手元は虛假不實まことのこゝろはなけれども。如來の清淨眞實がいたゞけてみりや今度の往生は間違はぬ。御和讃に「信は願より生ずれば。念佛成佛自然なり。自

然はすなはち報土なり。証大涅槃うたがはず」明日の夜明けは間違ふても。今度の往生に間違のなひは。他力真實の徳と云ふもの。凡夫の心の中をぞれだけ尋ねても探しても。御信心のまことが有ふ筈はなひ。依て百喩經の中に一の御喩へがある。或處に愚かな者がありて。此者が或とき河端へ往きたれば金が水底に沈みてある。やれうれしやと思ふて川の中へ飛び込み。偖か此邊であつたがと。右往左往と探して見ても更に見當らぬ。扨合点のゆかぬことよと。思案にくれて居る處へ。一人の智者が通りかゝり此有樣を見て。何を致してゐらるゝと問ひたれば。彼の男答へて事の始末を告げたれば。夫れは愚かなことよ。そなたが水中をぞれだけ探しても金はない。其金がはしくばあれを見られよと。川端にさし出て居る松の木を指し。あの枝に掛かりて居るのぢやと教へたれば。彼の男木に上りて金を得たと申す。今も其如く行者の胸の中をぞれだけ探しても。真實信のある筈はなひ。唯はしやれしやの涙立つ斗り。然るを善知識の御化導に依りて仰ひで大悲の御手元をみりや回

向を主とし玉ひて御成就なされし南无阿彌陀佛。たのむ一念の立處に衆生の方へ賜はるのが他力真實の御信心なり。依て御文章に『彌陀如來他力の大信心と云ふことは。今こそ明らかに知られたり』と仰せられた。

次に此信の字をたのむと訓す。彌陀を信ずる如來に歸命すると云ふは。阿彌陀如來の御手元に疑ひ晴れかゝるいたづらものを御助け下さるゝに間違ひなひと。たのみにし任せ奉るなり。これも自身の方から持掛けてたのむのではなひ。歌に「たのませてたのまれたまふ彌陀なれば。たのむとゝろも我れとれてこらず」彌陀の方から先手をかけて。たのめ助くるの御慈悲故。思慮分別の塲處ぢやなひ。其儘ながらに任せ奉る斗りなり。世間にみなし子と申すのがある。みなしごとは上略の言にして。具さにはたのみなし子と云ふことぢや。両親に死分れ兄弟に離れ。右ながめても左を見ても知らぬ他人斗り。たのみ力らになる身寄の无くなりしものを孤子と云ふ。誠に可愛想な哀れなものぢや。他の子供は盆正月祭禮などには親兄弟が付て居て。着物も着せ小遣

も與へる。夫れや是れやを見るに付て。心細ひ月日を送る。人知れず涙の袖をしぼり。泣々日暮しをする中に。或る親切なる人が尋ねて來て。聞けば其方は両親にも死離れ。兄弟にも分れ。獨り身に成りたさうな。定めし不自由であつたろう。私しは幸ひ子供もなし。依て今日からは私しが萬事世話をするから必ず案ずるには及ばぬ。着物がはしくば着せてやろ。小遣がなけりや與へると。懇ろに言ふてくれたで。小供心にもどうであろたのみの綱た私くしを。御親切なる御慈悲の御言。そんならよろしくたのみますと任せるより外はなひ。今も丁度其如く。捨られて身はなきものと思ひしに。姫しや。彌陀のひろひ子となる。十方の諸佛三世の如來に見捨られ。右をかめても左をかめても。迷ひを逃れる縁の盡た无有出離之縁の孤子が。阿彌陀如來なればこそ案ずるなよ苦にするな今日からは此彌陀が引受けてやる程に願がはしくば願もやろ。行がはしくば行もやる。其方の爲めに成就したのが。南无阿彌陀佛の約束ゆへ。其儘ありで我れに任せよと。御懇ろなる大悲の勅命聞へてみりやか

ゝる機までも御助けは。阿彌陀如來斗りなりと知りて。任せ奉るより外はなひ。是れを助け玉へとたのむとは知らせ玉う。

次に正信念佛の四字を掛け合せて辨述いたせば。先づ三通りの伺ひやふがある。一には正信之念佛之れは正信が主になりて。此正信の主に依りて出る念佛と云ふこと。口に如何程念佛を唱ふるとも。心に正信の主じがいたゞけて居らねば何の所詮もなひ。御文章に「くちにたゞ稱名ばかりをとなへたらば。極樂に往生すべきやうにれへり。それはれはきにれはつかなき次第なり」と仰せられて。百千万遍稱へても。信のなひ稱名念佛なら役に立たぬ。喩へば一本の樹木の如く。根がありてこそ枝葉が生ずる。根なしに枝葉は決して生せぬ。若根なしに枝葉のある木なら夫りや造物ぢや。今も其の如く信のなひ稱名は。如何程殊勝らしくとなへても。皆空鉄炮と同じことぢや。今は夫らの空鉄炮念佛に簡んで。正信の念佛と仰せられた。二には正信即念佛之れは正信と念佛とは別物でなひ。一つて信心のことぞと知らせたまう。道如上人御

一代聞書の中には。當流には彌陀をたのむが念佛なり」と仰せられて。念佛と云ひ正信と云ひ名は異れども。一信心のこと。大日本帝國の首府を。江戸と云ひ又は東京と云ふ如く。名は異れども同じ都。正信と云ひ念佛と云ふ名は別でも。御回向の六字が明らかに貰はれた外はなひ。御文章に「信心獲得すといふは。第十八の願をこゝろうるなり。この願をこゝろうると云ふは。南无阿彌陀佛のすがたを心得るなり」と御知らせ下さる。三には正信と念佛。之れは正信は御信心のこと。念佛は報謝の稱名のこと。世間には信行は唯だ一なり。信心さへありや稱名はとなへずともよひと。心得違ひをする族らがあるゆへ正信と念佛とを並べてみせて。着實信心の得られたものは。必ず報謝の稱名のあるべき道理をお知らせ下さる。喩へば火と烟りの如く火があれば必ず煙りはあるべき道理故御文章に「たゞ一念无疑に至心帰命したてまつれば わづらひもなく其時臨終せば往生治定すべし。もしそのいのちのひなは。一期のあひだは佛恩報謝のために。念佛して畢命を期とすべし」と仰せられた

之れが自然と多念に及ぶ道理故。隨分報謝の稱名はせねばならぬ。此三通りを能々聞き分けて。正信念佛の題號を味ふべきことなり。昔し法然上人の御在世に。高野の明遍僧都といふ大德が。源空聖人へ御尋ねなされた事がある唐土に於て念佛を勸め玉ふ智者達は。南山流とか廬山流とか種々に流義を立て御勸めなされたが。今聖人の御勸めなさる念佛は。何流の念佛で御在ると御尋なされたら。其時法然聖人の御答へに。此源空が勸める念佛には流義は御座らぬ。賤山がつのつくも髪強いて御尋ねあるならば。西方阿彌陀流の念佛なりと御答へなされたとある。この御答へが誠にありがたひ譯ぢや。先婦人方の髪の結ひやふに付て。島田とか呆返しとか。種々の結びやふがあるが。成々によりて流義が違ふ。西京あれば島原流とか。東京なれば吉原流とか人々に結び方が違ふは何故ぞと云へば。櫛の齒を入れ油らを付て。元結を用ゆるからいろ〳〵流義が分れるのぢやが。賤山がつのつくも髪。櫛の齒も入れず油らも付けず。散り亂れたる其儘を。五本の指でなで上て。驀でくゝりて

れくには流義はなひ。唐土に於て智者達の勧め玉ふ念佛は觀念の櫛の齒を入れ。學問の油を付け。定散自力の元結ひを用ゆるから。流義が立つでもあろふけれど。源空が勧める念佛は。定散自力の元結も用ひず。學問の油も付けず觀念の櫛の齒も入れず。久遠劫來散り亂れたる。散亂麁動のみだれ髪かうしてあゝしてとつくろはず。かゝる機までも助け玉ふは彌陀一佛と信じて稱ふるより外はなひ。もろこし我朝にもろ〳〵の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず。又學問をして念の心をさとりて申す念佛にもあらず。唯往生極樂の爲めには。南无阿彌陀佛と申て。定なく往生せるぞと思ひとりて申す外には。別の子細候はず。強して御尋ねあるならば。西方阿彌陀流の念佛なりとあれば。行住坐臥時と處とに簡びなく。唯一向に念佛すべきものなり

先題号の畧辨終る。

皈命无量壽如來　南无不可思議光

扨是より文へ入りて解釋をいたすに付て。先づ大体を申せば。初め皈命无量壽如來より。難中之難无過斯とある迄は。經に依りて釋迦彌陀二尊の悲懷を彰はすの文段中に於て必至滅度願成就迄が。彌陀の因源果海を述べ。如來所以興出世より。難中之難无過斯迄が。釋迦出世の本懷唯說弘願の正意を述ぶ次に印度西天之論家より。三國七祖の論釋に就ひて。眞宗傳承の旨を知らせたまう。爾れば此正信偈百廿句の偈文なれども。三經七祖の論釋に亘りて甚深无窮の謂れを結ばせられ。卷て疊んでの御教化故。御當流の御法門は此外になひ。爾れば三千年の昔し遠く天竺に御出現なされた釋迦如來。王舍城の大會の經說。續ひて三國高祖の論說。師釋居ながら爰に我々は。易く聽聞してまつるは。誠に不可思議の因緣。能々廂緣甚厚身の上にてある。扨初の二句は。正覺成就の壽光の二德を擧げて。所皈の法体を御示しなされた。然るに所皈の法体を示すに。壽命と光明との二つを擧げさせられたは何故ぞと云ふに。之に二つの謂れがある。一に存少攝多の義。阿彌陀如來の御德

は无量无邊なれども。此壽命と光明との二德を擧ぐれば。恒沙の万德皆此中にれさまる。法藏發願の修行より。彌陀の威神功德不可思議なるも。皆此光明壽命の体德より出でゝ。復此光壽海に皈せざるはなし。喩へば東京と云ふ處は如何なる處ぢやと云へば。弘くて賑やかな處ぢやと申せば。其中に種々澤山なる家屋のあることも。處々方々公園名所其他の景況まで。皆この言の中に攝する如く。今も阿彌陀如來の宏大无量の德も。光明と壽命の二つで皆な攝するゆへに。初めに此二つを御擧げなされたもの。次に攝化の大本なるが故にとゝまりて。阿彌陀如來が衆生を濟度なさるゝ。根本の道具となるのがこの壽命と光明との二德ぢや。御和讃に『超世无上に攝取し。選擇五劫思惟して光明壽命の誓願を。大悲の本としたまへり』と仰せられて。六八願中救濟の能は此二德ぢや。何となれば光明は智慧の相とありて。智慧の相たなるゆへ。一切の人の希望する處は此智慧と壽命ぢや。故に其欲する所を擧げて之れに就かしむ。誰でも馬鹿になりたひと云ふ人もなく。又長いきしたひと望むのは人

間の情ぢや。人間斗りでなく畜生でも皆死ぬることは嫌がる。之れを涅槃經には『一切衆生无不愛壽命』と御說きなされてある。左りながら人間は不定のさかひなり。老少不定の定めなき世の有樣ぢやで。死にとうなくても死なねばならぬ。依て不定の人間にあらんよりも。常住の極樂をねがふべきものなり。此上なしの智者此上なしの長命は。此彌陀同体の御証りより外はなひ。或處に鶴と龜とが相寄りて壽命の爭ひをなす。鶴は千年の齡ひをたもち。龜は万年の壽をさかうとて。互ひにまけずにとらず爭ふ處へ。直垂烏帽子の相たで。我れは五万歲なりと申したれば。鶴も龜も閉口する。此處へ一人の婆々背に風呂敷包みを負ひ來りて申すやう。我れは是れ七億(質置)婆々なりと申した話しあり。千万億長命には相違なけれども。數に限りがあれば一度は滅する道理ぢやで。死ぬる段になれば同じ事ぢや。今彌陀如來の御壽命は。无量壽とあれば。數かぎりのなひこと。釋迦如來でさへ晝夜一刹尙未能虛と仰せられて。彌陀の壽命は說き盡されぬとある。無量无數不可計なり。此彌陀の光

壽二无量が。其德。衆生の御証りとなる。彌陀が光明无量壽命无量ならや。參る衆生も光明无量壽命无量之れが彌陀同体の御証りといふもの。是れ程目出度ひ事は外に无き程に。目出度き事の最第一と申したら。彌陀を信ずるより外はなひ。

扨壽命光明の二德に就て其用を辨せば。光明は智慧の相にして愚痴无明の因を破り。壽命は生死流轉の果を滅し玉う。无明と云ふは智慧の明りの少しもなきこと。愚痴が体になりて疑ひを起す。疑ふ故に迷ふ御和讃に流轉輪回のきはなきは。疑情のさはりにしくぞなき」と仰せられ苦より苦。冥より冥とさまようのが。无明の闇みが晴れぬ故ぢや。爾るに此光壽の二德を信ずれば迷ひの因果共になくなる。此晴れを六趣四生の因亡び果滅すと知らせ玉ふ。故に无明疑惑を照破して。眞因を決了させて下さるは是れ光明の德用生死を解脱して。妙果を証得させていたゞくは是れ壽命の德用ぢや。左りながら此光明壽命に限りがありては殘るところ漏るゝ者がある譯ぢゆへに二德

に无量を御誓ひなされたのが。十二十三の願の謂れぢや。爾れば別願刪報と成就したまへる光明壽命は。横に十方竪に三世。盡未來際を貫き通りて徹到する依て彌陀の光明は周遍法界と申して。光りの至らぬ處は少しもなひ。扨爰にありがたひは。若し阿彌陀如來の壽命に限りがあらば。昔しは阿彌陀と云ふ佛けが御存命で。數多の衆生を御濟度なされたが。今はた隱れになりて助かること叶はぬといふやふなことにもなり。又光明も限りがあらば。我等が處へは屆くやら屆かぬやら氣遣ひなれど。阿彌陀如來は光明无量壽命无量を御成就なされて。有りとあらゆる衆生を一人も殘さず御濟度なさるゝのが此二德ぢや。依りて阿彌陀經には。釋迦如來が舍利弗に告げて汝ぢが意ろに於ていかん。彼の佛を何故に阿彌陀と号くるぞと仰せられて。彼の佛の光明は无量にして。十方の國を照し玉ふに障礙するところなし。是の故に阿彌陀と号す。又舍利弗彼の佛の壽命及び其人民も无量无邊阿僧祇劫なり。故に阿彌陀と名くと說かせられて。此光明无量壽命无量の二德から。阿彌陀と

名け奉つるとあるのぢや。能仁の彌陀の御命ちが短かくては。无量の衆生を濟度が出來ぬ。心地觀經の中に「衆の寶の中で命寶を第一とす」と御說なされて。命はど大切な寶らはなひ先づ。人間世界で申しても。金銀財寶は。如何程澤山積んでも衣服米穀はどれだけありても。壽命が无くては何の役にも立たぬ。左りながら不定界の有樣は。上代人壽八万才と云ふ。と云へども。數に限りがあれば一度は死ぬ。松樹千年終ひに是れ朽ちぬとある如く。誠に果敢なひものぢや。其中には生死病死と移りかはる。片時一時も常住なることは一つもなひ。依て御文章に「夫れ倩ら人間のわだなる躰を案ずるに。生あるものは必ず死に帰し。盛んなるものは終ひに衰ふるならひなり。されば たゞいたづらにかしいた。づらに暮して。年月をれくるばかりなり。これ誠におげきてもなをかなしむべし。この故に上は大聖世尊より。下は惡逆の提婆にいたるまでのがれがたきは無常なり」と仰せられた。然れば今時の我れ人は。速やかに無量壽佛に帰命して。長生不死の神方を得べきものなり。今度淨土へ生るれ

ば。極長生を獲るとありて。永劫不滅の涅槃の眞果を得たてまつる故に蓮如上人は。後生は永生の樂果なりと仰せられた。永く身心の惱みを離れて樂を受くること常に間斷なしと是れが無量壽の御証りなり

扨帰命とは善導の御釋に「言二南无一者即是帰命」と仰せられて。南无と云ふも帰命と云ふも。言は違へども同じこと。天竺で南无と云ひ唐土に帰命と釋し。之れを蓮如上人は「南无と云ふ三字のこゝろは。ものゝ〳〵の雜行をすてゝ阿彌陀佛後生たすけたまへと申す意なり」と御知らせ下さる爾るに此帰命に付て。自力の帰命と他力の帰命とがある。先づ自力の帰命と云ふは。身命を三寶になげうちて度我救我と。我れをたすけ玉へ我れをすくひたまへと願求するを自力の帰命と云ふ。今は左樣な六ケ敷ひ帰命ぢやなひ。唯だ大悲の勅命に信順し奉るのが他力の帰命なり。帰すると云ふも信ずると云ふも。皆な彌陀如來の御方便より起さしむるので。少しも自力の計ひの入ちぬ。丸々他力の帰命を御勸めなさるゝのぢや。依て御開山樣の御字釋に帰の字は至なり

如來の御慈悲がいたり屆いて下されたこと。御和讃に「若不生者の誓ひゆへ信樂まことに時いたり」と仰せられ。宿善開發して御慈悲のいたり屆いたのが。飯と云ふこと。又悅なりとはよろこびのこと。一念慶喜する人はと仰せられて。初起の一念に悅びの相たは見へねども。御慈悲が得られてみりや。いつとなく喜びが顯はるゝ。是れを身心悅豫の貞せなりと御意あらせられた。喩へば冬の寒氣に閉ぢられて黃鳥も。春の陽氣に催ふされては人は知ちねど。何時となく。幽谷を飛び出で。梅の小枝に囀づるも。又四方山の艸木が青葉となり色そへるも。是れ陽氣の力ぢや。今も丁度其如く今迄は煩惱の塞氣に閉られて居りしれ互ひがいかなる宿善の御手回しやら。五欲の我家を立ち出でゝ。如來聖人の御前にひざまづき。御慈悲の杖に取りすがり。南无阿彌陀佛と唱ふるは。黃鳥が谷間を出でゝ。梅の小枝に囀づる如く。動かぬ口をも働らき。佛になるべき緣の枝葉も枯けるが。今日此頃に至りては御恩嬉しやの芽を出し追付け目出度く御淨土で。佛果の菓みを結ばしていたゞくのは。御

慈悲の陽氣に催され。宿善開發の時節到來といふもの。次に命の字は業なり使なり計なり召なりとありて。彌陀如來願力の業緣にひかれ。大慈大悲の御膝元へひきよせていたゞくを業なりと云ふ。使なりとは喩へは人形芝居を見る如く。使ひ手がありて淨瑠璃三味線に合せて働らかせる。三四才の子供は人形が自分で動くやふに思へども。是れは使ひ手の働きぢや。今も又如來の御前に足手を運び。報謝の稱名よろこぶ相たは。我はたちきのやふに思へども。阿彌陀如來の御働らきでたのめよ參れよの御催促ぢや。其上六百年前には愚禿親鸞と名乘らせられ。我れが使ひに我れが來にけりと。此身を目的に使の働らきを顯はし玉ふ間れ。計なりとは如來の御はからひを申すなり。召なりとは如來の呼聲御召に(あづかりたてまつること。本願招換の勅命なり。昔し延喜帝が或時高臺に登らせられ。四方の景色をながめ玉ふ折柄。一羽の鷺が泉水の傍らに來れば。帝王之れを見て勅しての玉ふにはあれを捕へよと仰せられたそこで近侍の人々之れを捕へんと立ちたれば。鷺は翼さ

を開ひて飛び去らんとするゆへ人々之れを見て去ることなかれ勅命なりと呼びたれば今の驚が動かなんだそもある其時帝王聊或おらせられ五位のくらひを許し玉ふ世に五位驚と申すはこの謂れこれ當人の言では去るべきに天子の詔りが重ひゆへ畜生なれども止まりしなり今時の我れ人法界諸佛の詔りにも順はざりし者が本師法王の彌陀の勅命には雑行雑修の翼さをれさめ善知識の手に入りて如來の召しに契ふとは呼びかけ玉ふ大悲の勅命が重ひ故ぢや之れが他力の皈命と云ふもの依て無量壽如來に皈命すると云ふも不可思議光に南無したまつると云ふも唯だ大悲の勅命に信順するの外はなひ次に如來と云ふは大經に「從如來生」と御說きなされて久遠實成の覺体法性眞如の理海より大慈大悲の心を起し法藏比丘とあらはれて五劫兆載永劫に修行成就したまひて報身如來となり玉ひしを方便法身の尊体とするなり不可思議光とは光明無量の智慧に照して正覺成就し玉ひしを不可思議光如來と申す之の光明に色光と心光との二つあり

能く衆生を照し玉ふ依りて光明に付て三德を示さば一には破闇の德二には消滅の德三には攝取の德なり破闇の德とは暗室に火を點ずる如くやみを破ぶるが德用なり无明の闇を破するゆへ明來暗去の身とはなる二に消滅の德とは朝日に霜のきゆる如くつくりとつくる惡業煩惱一時に消滅するが光明の德三に攝取とは光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨れさめとりて捨てざればこそ阿彌陀と名けたてまつる喩へば日輪の光明に付ても先づ日出づれば夜が明けて暗がなくなる夜中につもりし霜露が消ゆる一日此光りの中に居りて家業商ひをする如く光明には必ず此三德の備はるべきものなり

法藏菩薩因位時　在世自在王佛所

此二句は法藏菩薩發願の時處を御明しなされた上に光明壽命の二德を舉げ玉ひたは正覺成就の果德利他圓滿の果號なり之れは大聖釋迦牟尼佛さ

へも。晝夜一刹說くとも盡さずと仰せられ。又十方恒沙の諸佛如來も皆とも
に。彌陀如來の威神功德の不可思議なるを讃嘆し玉ふとありて。阿彌陀如來
の功德利益の廣大なることは。迚も諸佛方でさへも。不可稱不可說とある大
功德を御成就なされたのぢやされば其正覺を御成就なされたは。一朝一夕
のことでなひ。法藏菩薩因位の時五刹の間の御思惟。永刹が間の御修行で忍
力成就し玉ひたのぢや。喩へば親が至極苦勞して。我一度は長者とならずば
れくまひと思ひ立ち。思案工夫を凝らし。それより一切萬事大切に心掛け節
儉を本とし勤勉して身を謹しみ。心を慎しみ骨折り金銀財寶を貯蓄し終ひ
に比びなき大福長者と成る。其處へ一人の子が出來て其子の心には。此家は
昔しより如是金銀も澤山で。安樂に暮すと思ふて道樂を初め亂暴に成つた
なら。親の恩を知らぬと云ふもの。時に人ありて汝ぢが親は昔しは如是々々く
した苦勞によりて。此家を起し金銀財產を作られたと云ふを聞ひて。成程と
合點して親の苦勞をもしり道樂もやめる。今も丁度其如く阿彌陀佛と云ふ

正覺を御成就なされ。一切方法を滿足して不可思議光といはれ玉ふ。處は大
福長者なれども各や我等は其處へ生れた子の如く。然るに其御辛勞の程を
何とも思はず。うか〳〵暮して邪見放逸の道樂に目をくれて。三毒五欲の酒
色にふける有樣を御覽なさるゝ大悲の御心は。いかばかり血の涙だの御歎
きより外はなひ。爾るに善知識の御仁導により。夫五刹思惟の本願といふも。
兆載永劫の修行といふもたゞわれら一切衆生をあながちに助け玉はんが
爲の方便に阿彌陀如來御身勞ありて」と骨身を擂かせられた御苦勞を聞か
せていたゞいたら。大樣解怠はならぬ。善拜む大悲の親樣は。十劫曉天の其昔
し我等が參る極樂を御成就なさるゝに付ては。七寶の樹一本も凡夫が植た
ものでなひ。瑠璃の砂一つかみも凡夫が運んだものでなひ。皆な彼方の御働
らきと云ふことは。善知識の御化導で朝夕耳に觸れながら。何とも思はず暮
すとは。如何なるあさましき心中ぞや。此の謂はれを御知らせ下されたのが
今此偈文ぢや。先づ大經には五十三佛の出世を說て。其後に世自在王佛と云

ふが。御出世なされたれ時國王ありて。彼の佛の說法を聽聞なされ國を棄て王位を捨て沙門の相たとならせられ。法藏と名乘り玉ひ一切衆生を助け救はんと云ふ大願を起し。此願成就するに付ては。たとへ此身を苦の中毒の中に置くとも。我行精進にして忍で終に悔ひずと。衆生の爲めに大御辛勞まします間ばれを御想ろに御說きなされてある並み大低な御苦勞ではなひ是れが皆な我れ人の爲めゆゑやとある。惡人の爲めに摧きし骨に須彌山の如く女人の爲めに絞りし血潮は大海の如しとあれば。御成就なされし名号六字は。大悲の親の骨肉血しはのかたまりと申すもの。世間でも親が骨折て苦勞するのは。可愛子供の爲より外はなひ。阿彌陀如來の御辛勞は惡人女人の爲より外はなひ。一々誓願爲二衆生一故私し一人の爲め御苦勞と大切に存せねばならぬ。

扨法藏と云ふ御名前に付て。二通りの解釋がある。一に法卽藏と申して。法と云ふ其體が卽はち藏と解せば。法とは心法とて菩薩の御心ろのこと。菩薩の

御胸の內が其體。一切万法の藏と云ふことぢや。二に法の藏と解せば。法とは一切万法のこと。それを藏に收めてある。即はち阿彌陀如來が因位の昔し一切諸法を寄せ集めて。功德善根の寶ら物を攝取なされた處が藏の字の意ろ喩へば世間の藏の中へ。金銀財寶米穀を含藏しておく如くぢや。之れを大經には集佛法藏と說かせられた。爾るに其寶ら物を集めて藏へ入れて置いても取り出して遣はねば何の役にもたゝぬ。世間にもいくらもあるが。金錢をためて夫れを遣ふことをせず。人の爲の金が金の爲の人かと疑はれる程に一生唯だ金の番をして。寶らの持ちぐされをする者があるが。夫れでは財寶を持て所詮がなひ。或甲乙の友人がありて。甲は非常に貪慾心の增長して居る人でありしが。或日乙に向ひて何と一時に千萬兩の金をためたひものぢやと云ひたれば。乙答へて夫れは造作もなきことなりと申せば。甲はしきりに其故を問ふ。そこで乙の申すには汝ぢ夫れ程金をためたくば。新聞紙の古いのか又は雜書の古るを澤山に買ひ求め夫れを紙幣い形に切りて表包み

に千圓包萬圓包みと書きて置けと申したれば甲は餘りの馬鹿らしさに立腹して申すには夫では何の役にも立たぬ世間通用せぬと申したりしに乙答へて汝ぢの如く吝嗇なる人は決して使はぬに依りて本ものでなくも好しと申した話しがある實に爾り金銀の番人をする位ひなら拵つた甲斐がなひ故こんな者ぢや今法藏菩薩は一切萬法の功德の寶を集めさせられ一切衆生に廣ろく施し玉ふとあるのが彼方の御慈悲ぢや和讃に『如來の作願をたづぬれば苦惱の有情をすてずして回向を首としたまひて大悲心をば成就せり』とありて之れを大經には『爲衆開法藏廣施功德寶』と御說きなされて惡人女人の爲めに法藏を開ひて今諸衆生功德成就と與へ玉ふ故に又御和讃に『五濁惡世の有情の選擇本願信ずれば不可稱不可說不可思議の功德は行者の身にみてり』と仰せられた丁度親が苦勞してためた財產を惜し氣もなく子供に讓り與へる如く信ずる一念に大善大功德恒沙无量の寶ら物を丸々御回向下さるゝのぢや其大善大功德と云ふは唯だ一句の南无阿彌

陀佛其故は阿字十方三世佛彌字一切諸菩薩陀字八万諸聖教とありて一切の諸法さるゝものは一つもなひ依て御文章に『それ南无阿彌陀佛とまうす文字はそのかずわづかに六字なれば多のみ功能のあるべきともおもはれざるに此の六字の名号のうちには无上甚深の功德利益の實大なること、さらに其きはまりなきものなり』と仰せられた依りて我等の方は唯だ六字を信ずるより外はなひ喩へば子供に菓子を與へるに蒸菓子や金米糖羊羹と品々見せたら欲ひは山々でも紅葉のやふな小さい手では仲々悉皆受取ることは出來ねども一枚の紙に包んで出せば子供にも受取られる今阿彌陀如來は衆生の爲めに難作能作の御苦勞より御成就なされし六字の中には六度萬行諸波羅密十力四无畏八解脫功德善根のあらんかぎり皆この六字に封じ込め至心回向と與へ玉うが法藏菩薩の御成就なされた御慈悲なり次に菩薩と云ふは菩提薩埵と云ふ菩提とは佛道の名なり佛道を求むるに其心勇猛精進して道心堅固なる衆生を菩薩と云ふ之に付て二通りありて

一に從因向果の菩薩。之れは通例初地已上の位に上ちせられた聖者方の事にして。是から段々修行を積んで。佛果に至らんとする菩薩なり。二に從果降因の菩薩。これが正しく今の法藏菩薩のこと久遠の眞証を降り爲物大悲を起して衆生の爲めに御苦勞下され。數々因に降り數々果に上るとありて。通例の菩薩とは大ひに違ふ喩へば道中筋に於て東海道なら。靜岡とか名古屋とか申す處の宿屋へ。二人の客が宿り合す。泊りの場處は同じ靜岡なら靜岡ぢやが。一人の客は是から東京へ見物に行く往きがけの泊り。一人の客は既に東京を見物し終りて。還りがけの泊りとあれば泊つた宿は同じでも。一人は都の樣子を知りて居り。一人は未だ都をしらぬと云ふものぢや。今丁度其如く從因向果の菩薩と云ふは彌勒樣のやふな方々で未だ法性の証りの都を御存じなひ往きがけの菩薩同じ菩薩と云ふ地位の名前は一つでも。法藏菩薩は其本証を尋ねてみりや。久遠實成の古佛として三世諸佛の本師法王衆生の爲めに降因し玉ふ菩薩ゆへ。法性无爲の都から御出ましなされたので大ひに違ひ目がある。因位時とは果上に對するの言にして彌陀は果上法藏は因位にして今時と云ふは。初發心の時をさして因位時と云ふ。即はち世自在王佛の所にて。轉輪聖王の位を棄て御出家なされた時のこと。喩へば帝王と王子の如く。帝王は果上の位ひ皇太子は因位の如し

扨世自在王佛とは。師佛の御名前にして。即はち過去久遠の昔し五十三佛世に出で玉ひ。其次に御出世なされた佛けが世自在王佛なり。先づ世とは世間の事。次に自在とは能く自由自在なりと申して。例へば衆生を濟度なさるゝに菩薩で都合がよければ菩薩となり。其外隨類應同して心ろの儘に濟度の出來るのが自在と云ふもの。此佛け世間に於ける利益に自在なるが故に。世自在王佛と名け奉つる。又は世饒王佛とも申すなり。功德利益が豐饒ゆたかにして自在に化益濟度なさるゝ事。猶は世間の帝王の如くぢやとある。扨爰に不審なは阿彌陀如來は。三世諸佛の本師本佛なるに。今何故世自在王佛を師匠となされしぞと申すに。是れが難有ひ謂れがある。喩へば芝居に於て忠

臣藏を演ずる時分に。弟子役者を主人の判官に扮し。師匠自身が由良の助を勤むる如く。之れは大切なる役目骨の折れる場處。故に重い役を師匠が勤めるる如く。今本師師匠の彌陀如來が法藏菩薩となり玉ひたは。一切衆生を殘らず殊に諸佛にも捨られ菩薩にも見放されし。極重惡人五逆十惡の我等を目出度。佛けに仕上げようと云ふ大役目ぢやに依て。折くは師弟を名乘り玉ふたものの是れが善巧方便なり

觀見諸佛淨土因　國土人天之善惡

此二句は法藏比丘が師佛の所で。選擇なさるゝ淨土を觀見したまふことを示す。大經には「世自在王佛卽爲弘說。二百一十億諸佛刹土天人之善惡國土之麤妙應其心願悉現與之時彼比丘。聞佛所說嚴淨國土皆悉覩見。說斯玉偈法藏菩薩發心のとき。世自在王佛に御願ひなさるには。諸佛の淨土に超へ勝れた淨土を建立して。惡人女人の徒ゝらものを。何へ取りてやり度ふ御座る程に。其淨土の建立いたし樣を說いて聞せて下されと御願ひなされたれば師佛の御答へに汝自當知とありて。汝ぢ自から知るべしと仰せられし程に重ねて斯義弘深非彼境界と。迎ても我境界には及ばぬことである故。何卒くはしく御說法下されと御願ひなされたれば。師佛の仰せには實に此願は宏大にして。容易には成就も出來まひが。併し大海の水を一人にてかへはしても。勇猛精進に勤めたら。願として成就せぬと云ふことはなひものぢやとの玉ひて。法藏比丘の爲めに二百一十億とある數多の淨土を現じ玉ふて御見せなされた處に。閻佛處說と。比丘師佛の說法の如く如實に之れを開き玉ひ皆悉覩見と師佛の現し玉ふ如く見玉ひて。選擇攝取し玉ふことを。此二句に御明しなされたもの。扨觀見と云ふは。二字共にみるといふ字ぢやが。之れを分けて云へば眼見を觀と云ひ心察を見と云ふ。卽はち地上の菩薩が天眼を以て見。智慧を以て了々に明察し玉ふを觀見と云ふ。今法藏菩薩が二百一十億の諸佛の淨土。國土人天の善惡を觀見し玉ふに。二義あり一には爲建立自

之淨土故に。二には爲レ究二衆生往生一故に。初に爲レ建二立自之淨土一故とは。喩へば世間でも吾家を普請せんと思へば。所々の建物を見歩ひて。彼の家は座敷がよひが玄關がわるひとか間取りはよけれど床が似合はぬとか。或は材木は何處で出し。大工は何と云ふ者にさせんとか。種々に配慮を回らし考案を立てる如く。今も法藏菩薩が極樂淨土と云ふ。大普請を思ひ立ちあらゆる國土。人天の善惡を御覽なされて。惡惡とわるい處を選び捨て。善妙のよい處ろ斗りを擇り取りて。御建立なさるが故に先づ願文では无三惡趣の願を初めとして御成就なされた。これは佛元と何が故に此願を發し玉ふぞと云ふに或る國土を見たまふに。雜業の所感を以て生るゝに。因の優劣に順て一方をみれば。清涼の池には八功德の水をたゝへ。又一方には地獄の炎列なつてまことに苦しみの場處があるやふに苦樂相交る。依りて阿彌陀如來は深く大悲心を起して。若し我れ成佛せば。國中に永くかくの如く苦難のなき。淨土を建立せんとの御願ひなり。依て阿彌陀經には『彼佛國土无三惡趣』と說かせら

れ。次には『尙死三惡道之名』とありて。三惡道のなきは勿論のこと三惡道の名もないぞと御說きなされてある。次には不更惡趣の願これは或る國土を見玉ふに。漸く善果を得くると雖ども。その業盡きぬれば。直ちに本の三途へ沈む有樣を御覽なされて。若我れ國土を成就せば。一度び生ずるものを再び元へは戻さんとある。無變の國土を御成就なさるゝ御願ひぢや。已了の願准して可レ知。如レ是少しも不自由不足のなひやふに。御建立なされたのが極樂淨土ぢや。存覺上人の御言にも『彌陀の淨土は柳の枝に櫻を咲かせ。二見の浦に清見が關をならべたらんがごとし』と仰せらる。古人の歌に『梅が香を櫻の花に匂はせて。柳の枝に咲せてや見ん』と詠める如く。成程梅の花は香ひはよいが花がさびしいとか。櫻は花王と云はれて花はまことに美事ぢやが。香ひがなひとか。柳は枝振はまことにすなはでよいが。花もさびしく香ひもなひと云ふ如く。片々よければ片々わるい。若し思ふまゝになるならば。梅の匂を櫻の花に持たせ柳の枝に咲せたらよい處斗りになるがと詠んだ歌の意ろ。是れ

は言ふた斗りで迚も左樣にはならぬ。今法藏菩薩は自の淨土を建立し玉ふに付て。あらゆる諸佛の國土を親見し。よい處斗りを取り揃へて。御成就なされた有樣は。今の歌を實地にみるごとく。善盡し美盡すと云ふもの偖世間でも普請をなさんと思ふときは。主人一人の意ろから出る。其主人の頭の中を他人は知ることが出來ぬ。今も御和賛に「安養淨土の莊嚴は唯佛與佛の知見なり」と仰せられて。等覺の菩薩でも佛の內証は御存知なひ。況んや凡夫の意ろで如何程に思ふとも九牛が一毛大海の一滴にも及ばぬことぢや。依て法然上人は往て知らるべしと仰せられた眞實結構なるあじわひは。安養に至りてさとるべし。御和讃に「安樂佛土の依正は。法藏願力のなせるなり天上天下にたぐひなし。大心力を皈命せよ」と。御淨土の依正主判廿九種の御莊嚴は。天上にも天下にも比び並びはなひと仰せられた。時に忉利天の天人の爪一枚がこの南閻浮提の惣しての果報に勝さると云ふことぢやが。是れ同じ三界の內でさへ如是に違ふ。先づ平生拜む處の日輪の光明は。甚だ明らかにして廣大なものぢやが。忉利天の天人の光明と比ぶると。丸で日中に燈を出した如く。日輪の光りはあるやらなひ。やら天人の光明に奪はれて。任舞ふ夫れより段々果報が勝れて。色界などは壽命は八万大劫とある。然るに極樂は其段ではなひ。三界中に比すべきものはなひ。不思議の妙境界なれば大心力成就の淨土へ一日も早く參りたきものにてある。其淨土は誰れが爲めとりもなをさず。今時の我れ人の爲めに自の淨土を建立し玉ふなり

二に爲レ究二無生一生行故にとは淨土へ參る行因を彌陀の御手元に於て。御成就なさろゝ事。喩へば世間に於て珍らしき開帳とか。面白ひ芝居なぞがあるときに財産を持つて居る金滿家の人達は。この芝居あの開帳と自分の錢金を出して見れども。貧困の身の上では之を見ることも叶はぬ如く。今も十方に淨土は多けれども。智惠才覺の金銀のある菩薩方こそ自由の働らきをなして。其淨土へも往き玉ふに。我等がやうなる貧乏なる。善根功德の手元のなひ。無智な愚かな徒ら者は。雲に掛橋霞に千鳥。思ひも願ひも絶へはてゝ迚て

も往かれる筈はなひ。爾るに拜み奉る阿彌陀如來法藏因位の其昔し。我等がなすべき願行を丸々彼方の御手元に御成就なさるゝのが此間れぢや。先此の因と云ふは澤山なことで或は布施持戒を以て建立なされた淨土もあれば。恐厭精進を以て御建立なされた淨土もありて。此等の淨土へ參るには往生人も亦六度の行因でなければ參られぬ。然るに法藏因位の時に。我々の有樣を御覽なされて。六度處ろが布施の行一つでさへ。勸まる者でなひと御見拔きなされたのぢや。今時の人達は少々の金錢を惠むと。直に慈善家らしい顏付をする。中には名聞欲の爲めに。心ならずも惠む人もあつて。誠にあさはかなものぢやが。眞實布施の行をなす時分には。人の望みに任せては。自身の体を切りきざんでも施こさにやならぬ。佛弟子の中に智惠第一と云はれた舍利弗尊者と云ふがある。此人は元とは大乘菩薩の修行。六度の行を勸めて御座りしが。或時路に乞眼波羅門と云ふに。れ出遇ひなされて。望まるゝ儘に自身の眼玉を與へて御やりなされた處。彼の外道之を受取りて。汝ぢの面相

にあるときは。うつくしい者でありしが切り拔ひてみりや。誠に血だらけできたなひ物よと。今の眼玉を大地へ拋ちたれば。爰に舍利弗心に思ふやふ是れは何としたなさけなひ事をして呉れる拋つ位ひなら初めから望まねばよひにと。一念の瞋恚が起りたれば。永々勸めた戒行が破れたとある。そこで舍利弗も是れは私しのやふなものでは迚も。大乘菩薩の修行はつとまらぬとて。小乘の聲聞僧になられたが墮大の聲聞と云ふて。舍利弗尊者のこと。然れば迚も並み大体な者には勤まる行でなひ。況んや今日れ互の心は。貪慾瞋恚愚痴の三毒强盛にして。人の物はほしい我物はれしい。こんな淺間しい心中では迚も諸佛の淨土へは往くぞろかのぞくことも叶はぬ。必墮无間とまつさかさまに。无間の釜へ落るより外になひのが我等凡夫の身上ぢや。法藏菩薩はこれを見拔ひて。何も彼も皆彼方の御手元に御成就なされ。我等が方には智惠も入らず才覺も入らず。願行は俳体にはげみ。感化は衆生に御與へなされ。此身此儘たのむ皈命の一念に。法体成就の六字をば。丸々衆生に御回

向下されつとめざるに功德の主となり行せざるに功德滿足して此世にあり、ながら正定不退いき切れ眼のとぢ次第目出度淨土の都入り蓮花化生の往生を遂げさせていたゞく此身ぞと存せられたがまことなら法藏因位の御苦勞をいたゞき上げては御恩の稱名喜び〳〵相續が肝要。

建立无上殊勝願　超發希有大弘誓　五劫思惟之攝受

扨此句は大經の『超發无上殊勝之願』と『發斯弘誓建此願已』の文を據として御述べなされた句ぢや。即はち法藏菩薩が因位の時无上殊勝希有難思の誓願を設け玉ふことを讃嘆する文段なり。前席に於て敷衍するが如く。法藏菩薩が有りとあらゆる諸佛の淨土及び人天の善惡までを能々御覽なされて非難无二の淨土を御建立なされ。又衆生往生の行因を惡く。佛体に滿足成就したまひたるを无上殊勝の願希有の大弘誓と仰せられた。扨建立とは二字共にたてると云ふ文字で。法藏菩薩超世不共の大願をたてたまへることを建立

と云ふ。无上とは有上に對するの言にして。易く申せば此上なしと云ふことと。先づ世間でも此上なしの高ひは泰山。此上なしと深きは大海。此上なしの輕きは風。此上なしの重いは大地と云ふ如く。今も此上なしの御証りは。阿彌陀佛。此上なしの惡人は今時の我れ人。爾れに此上なしの大惡人が唯だ御信心の一つで。此上なしの御証りを得たてまつると云ふは。此上なしの御法ぢやで。是れを龍樹菩薩は大乘无上の法と仰せられた。此廣大なる御教へに値遇したてまつりし我れ人は。如何なる宿緣の御手廻はしやら。此上なしの仕合者と喜こばねばならぬ。殊勝とは三千大千世界に並び比びのなひ勝れた彌陀の本願ゆへ殊勝の願と仰せられた。世間では少しの善根をなし。わづかな功德を積みでもすると。彼の人は殊勝な人ぢやなどと申すが今はそんな輕ひことではなひ。三世の諸佛に見捨てられたる十惡五逆の大罪人五障三從の女人をば。一人も殘さず能令瓦礫變成金と。惡人女人を佛ケになさずばれくまひとある大誓願なるゆへに殊勝の願と仰せられた。次に希有とあるは

至りてまれなることゝ。必墮无間とあるからは。地獄より外に行き方のなひ我れ人が。目出度淨土に往生を遂げ。彌陀同体の御証りを得たてまつる。是れ程希有なることはなひ。扨此希有と申すに時希有。處希有。德希有。事希有とて。四通りの謂れがある。時希有とは之れは佛の出世に遇ふて。じたしく正法を聞くこと「无量億劫難値難見猶靈瑞花」と仰せられて。之れが和讃に「如來の興世にあひがたく。諸佛の敎道きゝがたし。菩薩の正法きくことも无量劫にも希れらなり」と仰せられた。然るに爰にわりがたひは。道綽禪師の御文章に「しかるに今の世も末法濁亂とはいひながら。こゝに阿彌陀如來の他力本願は。いまの時節はいよ〳〵不可思議にさかりなり。されば此の廣大の悲願にすがりて。在家止住のともがらにていては一念の信心をとりて法性常樂の淨刹に往生せば。實にたからの山にいりて。手をひむしくしてかへらんに。にたるものか」と仰せられて末法万年の今日に生れたくれた我れ人が。劫て時希有のあじはひを喜こばねばならぬ。「卿も本もかれたる野邊にたゞひとり松の

みのこる彌陀の本願」正像末の三時に押し亙りて。ひろまる彌陀の本願なれば。像末五濁の今日では。釋迦の遺敎は。龍宮にかくれ。彌陀の悲願ひろまりて念佛往生さかりなり。此時にあひ此法を聞くこと喜びの中の喜び。万劫の初事に生死流轉の暇乞ひ。轉迷開悟の大益を得たてまつるは末法濁亂とはいひながら。彌陀本願の盛んなる時にかなふた身の仕合せと。大切に喜ばねばならぬ。歌に「いそげ人彌陀の御舟の通ふ世に乘りれくれなば誰れか渡さん」次に處希有とは。三千世界に國處ろは多けれども。釋迦如來は中天竺摩迦陀國へ御出現まします。是れが處希有と申すもの。然るに今日の我れ人は道の里遙か隔たりし此日域に生を受け。年月遥く過ぎ去りし末世末代に生れながら。三朝淨土の七高僧。れの〳〵此一宗を興行すと。眞宗傳承の御蔭げ高祖開宗の御苦勞により。他力本願の御敎へを大聖の眞言其まゝに。聽聞させていたゞくは。誠にありがたき仕合せである。古歌に「何事も時と處を思ひやれ。貴らの山をむだにすぎなよ」次に德希有とは。佛は万德圓滿にして。不可思議

なるゆへに德希有と云ふ。御和讃に『不可稱不可說不可思議の功德は行者の身に滿てり』曾无一善の身たりながら。信ずる一つで恒沙无量の大功德を圓滿具足し功德のうしほに一味となりて。威德廣大の信を得る。他力本願の不思議が。希有の仕合せとは此事なり。次に事希有とは。佛の出世し玉ふことは凡夫の人界に生ずるやうなることには非ず。兜率天より神ひを降し迦毘羅城に出で玉ふには。八相成道と申して。下天託胎出胎出家降魔成道轉法輪入涅槃の事相をあらはして出世し玉ふこと。三千大千世界に尤も希なる義なるがゆへに事希有と云。今他力獲信の行者報土往生の身の上は。今日此世にありながら。十方恒沙の諸佛護念神明冥衆證持したまひ。萬の惡鬼を近付けず。百重千重の御守りを受け。今にも婆娑の因緣つき次第。大般涅槃の妙果を得たてまつること。誠に不可思議の事にそなる。大弘誓とは彌陀如來の御誓ひを申すなり。願文には「若不生者不取正覺」と仰せられて。若しも衆生の往生に不の字が付かば。彌陀の正覺も不の字となる。自身の正覺を掛けもの

にして。衆生往生を誓ひ玉ふ。此の誓願力があればこそ。底下凡地の凡夫の身が。光明放つ佛けに成られる。之れが弘誓の願はれぢや。法藏菩薩因位の時。衆生の往生を受取る誓約を御立てなされ。若しも此願滿足せずば。たとへ此身は苦や毒の中に沈むとも。少しも悔やぬ屈せぬと勇猛精進の心から。肉皮骨髓は粉になるとも。身体髮膚は微塵になりても。一度は滿足せにやれかぬとある大弘誓願ぢや。昔し本朝應神天皇の御宇に。武内宿禰と云ふ忠臣が有りて。天下の政事をたさめて居りしが。其頃ろ九州地方に反逆が起り。鎮定の爲めに彼地へ向はせられた其留主に弟の甘美内と云ふもの。兄を讒して天子に奏聞するには。今度私の兄の武内宿禰は非望の反逆を企て。密かに謀りて三韓の者共を招き寄せ。九州を根據として中國を呑まんと致して居ます私くしにも應せよと申し參りましたれども。此議ばかりは兄弟でも應ずる譯には參らねば。此段奏聞に及ぶと申し上たところ。何しろ實の弟の訴へなれば虛でもあるまひ。早速誅伐の師を出すべしと。評議一決して王軍向ひたる

に武内の宿禰は彼地にありて少しも知らぬ事なれば驚くこと一方ならねども最早軍勢取巻きて攻め立つる故此場に及んで言ひ譯も屆かず天命なれば致方なしとて自殺を計られし時武内の臣下に壹岐の直眞根子と云ふもの顏形ち能く武内に似た處から其前に進み出で申すやう今彼方には無實の罪を以て御自殺なされたれば今迄の勳功も水泡に皈するのみならず永く逆臣の汚名を蒙ること祖先へ對して誠に申し譯けの無き始末ゆへ幸ひ臣の容貌彼方に似たるを幸ひとし恐れながら御身代りを致せば彼方には何卒逃げのび玉ひ都へ御皈りなされて黑白を判けられよと覺悟をきはめて申し出しかば武内宿禰も大に喜び夫より直ぐに都へ上り元寶の故を訴へたれば弟も容易には屈せず何日論判の果つべきとも見へざれば爰に初めて神祇を磯城の川上に祭り湯起請をなさしむ然るに兄宿禰は更らに傷むことなく弟は皮肉爛れて即死すとある是れは本朝湯起請の初めぢや誓ひと云ふものは明白なるものぢや今各々方も同行仲間でまことらしく

形振をよそへても如來聖人の御心にそひき自力雜行の逆反をはたらき彼方の御前をいつはりしなら追付地獄の炎の中で大苦惱を受ねばならぬ然るに大悲の敕命に信順し他力回向の信心一つがもらはれて居りや恐ろしい炎が清涼風火車が轉じて紫金の蓮臺目出度往生の仕合せは大悲の彌陀の誓ひの念力之れが希有の大弘誓と云ふもの

扨五劫惟思之攝受の句は法藏菩薩が惡人女人を佛けにする願を御思惟あそばされた時日の長ひことを御知らせならるゝ世間に於ても造作のなひ容易なる事柄なら思案分別も左程に手間はかゝらぬけれども事柄が大きくなり六ケ敷なると思案も充分にせねばならず分別も仲々付くものではなひ知者や善人斗りを助ける願なら思案分別も入るまひが十方の諸佛にも三世の如來に見放された極重惡人无他方便永不成佛の我れ人を一番掛けの正客として佛けになさずばれくまひとある大誓願なるゆへに御思案の間だばかりが五劫とある御修行なさるゝ間だは兆載永却數かぎりがな

ひと御示しなされた。唯かく申した斗りでは愚痴な御五には分らねど此刼と云ふは時と云ふことで。是れには大刼小刼なぞと申すこともあるが先づ大論の中に一人の比丘ありて。刼を佛に問ひ奉つるに。佛譬喩を説て知らしめ玉ふとある。其御喩へに方百由旬の城に芥子を充満し。百年に一粒づゝ取り出して。其芥子の盡きたところが一刼と御覽なされ。又次に方四十由旬の石を天人の羽衣を以て。百年に一度づゝ撫でゝ。其石を撫で盡したところが一刼と仰せられた。口に五刼と申せば。心易ひやうなれども一々御謂れを聞ひて見ると。扨々永ひ間だのことぢやと云ふ事がしれる。只一口に富士の山は高ひと申せば左程にもなひが。白山か。立山を二つ三つ重ねた位ひぢやと云へば。大きに驚ろく爾るを一刼ならず二刼ならず。五刼が間の御思惟で諸佛にも捨られたる悪人女人を其儘に信ずる一つで佛ければ成せるとある。起世不具の大願を成し玉ふなり。爾るに只五刼の御思惟ばかりでは。願の出來たまでゝ益には立たぬ。此大願に付た修行がなければ。願力成就とはならぬ。

喩へば京大阪へ參りたひと云ふ願は起しても。又こうすれば往かれる。おゝすれば參れると思案工夫は出來たところで。肝心なる力ちの路金が成就せねば叶はぬことと今も五刼の間だの御思惟で起させられた願を御修行なさるゝのは。五刼や十刼の事ぢやなひ。兆載永刼とは數限りのなひことと。或る田舍の農家に。御法義を喜ぶ老婆が一人ありしが石臼を引く度毎に手を止めて泣て居る。夫れを嫁が見て彼方は何故に其樣に泣なさる。臼を引くのが御いやになつたら。私しが交かて引きましよう。御手でも痛みは致さぬかと。いろ〳〵になぐさむると老婆は涙だを拭ひ。これは何を申さるゝぞ若ひ時から手なれの仕事。決して苦にもならず重くもなひが此間だ御寺へ參詣して御説教を聽聞したとき。彌陀如來樣の御苦勞の御話し。此婆々一人を助けよふとて御思案斗りが五刼の間だ。御修行の年月は算盤たゝぬと御示しなされ。其一刼とあるのが四十由旬四方の大盤石を天人の羽衣で百年に一度づゝ撫でゝ。其石の撫盡きたのが一刼ぢやと。佛けの譬へを御聞かせであつた

が此婆々が此家へ嫁入して來てより。今に四十年毎日〳〵此石臼を引かぬことゝてはなひやうぢやが。石と石とをすり合せてさへまだ二十年や三十年は大丈夫。夫れを思ふに付ても此婆々一人が可愛さに。五劫の間だの御思惟兆載永劫の御修行とあなたの御慈悲を思もふに付け。是れが泣かずに居らるゝかといと殊勝な物語り。心も言もたへはて〻筆紙の及ぶ事ぢやない廣大无邊の御苦勞をあそばしたは。皆んな今日の我等があるゆへ。此やつ一人の御苦勞ど。大切に喜ぶべきことである

重誓名聲聞十方

此一句は先づ大經の上に於て。四十八願を說きはりて。更らに重ねて三つの誓ひを述べ玉ふ。故に重誓と云ふ。其第三に「我至成佛道名聲超十方」と仰せられて。南无阿彌陀佛の名号を十方に聞かせねば。誓ふて正覺を取らずとある。扨此名聲とあるは。十七願に諸佛方が口を揃へて。彌陀の名号をはめ玉ふ

之を成就文に十方恒沙の諸佛如來皆共に。无量壽佛の威神功德の不可思議なるを。讚嘆なさるゝと說き玉ふ。さりながら其名聲十方に聞へ屆かねば衆生利益はなひ。依て重ねて名聲十方に聞へんと御誓ひなされた。爾れば我が名を十方の諸佛にはめられん。又は衆生に我名を聞かさんとあるは名聞のやふに思はるゝが。決して左樣な譯ではなひ。彌陀の御手元に萬善萬行の總体。八萬法藏の骨目たる。南无阿彌陀佛の名号を成し玉へばとて。十方の諸佛でこの名号をはめ玉はずんば。いかでか十方の衆生にきこゑん。十方の衆生に聞ゑずんば。衆生何によりてか之れを聞信せん。しかれば名聲聞十方の御誓ひは。名聞の爲めぢやなひ。偏へに衆生の爲めぢや。爾るに今日の我人は疑ひ深ひが。性得の持前ゆへ。是でも信じゑぬに依りて。重ねて名聲超十方の御誓願を立てさせられた。喩へて云へば。爰に一人の大病人あり。て。九死一生の難病なれども。此人元來藥りを大嫌ひぢやたとひ死すとも藥りを呑ひはいやぢやと申して更らに藥りを呑まぬ故。病氣は元より次第に重くなる。醫者も

立替り入り替り診察はすれども薬りを一滴も呑ひことを欲せず仕様仕方のなひ病人でありしが一人の名醫ありて篤と病氣を診察し扨薬り嫌ひとあれば澤山は上げぬ丸薬にして唯の一粒だのみなされ必ず病氣をなはして上ると請合ひ扨結構なる薬品をとゝのへ是れを一粒の丸薬にとしちへて先づ看病人の人々に是れを示し何卒此薬りの功能をはめて下さひ必ず全快するに間違なひ本腹は受合ふと申されたれば看病の人々口々に此薬りは唯の一粒呑むには造作もかゝらぬに此難病本腹に疑ひなし扨でも結構なる名薬よと病人の前に於て此薬りをはめたてたれば薬り嫌ひの病人も病氣の苦しみに堪へかね重い頭を少し上げて左程結構なる名薬とあれば一粒呑んでみましようといふ故に今の丸薬を與へたら一杯の白湯と共にいつのまにのんでを通りしや知らず〳〵に呑んだ處ろ果して立處ろ病氣が本腹したと云ふ如く丁度今日の我れ人も久遠劫より无明の大病惡業煩惱の難病人諸佛の御手にも力らにも及ばず其上佛法嫌の邪見人廻心も

深信も療治の叶はぬ我れ人を一度は助けすばやくまひの御念力から五劫兆載永劫の永の間だの御辛勞にて御成就なされし六字の妙薬唯一法句の南无阿彌陀佛を佛法嫌ひで逃げまはる我れ人に難行をつとめよとは申さぬど苦行を修せよとは云はぬ程に无疑无慮乘彼願力とたのむ一念の立處に无明業障の難病は必ず本腹請合ふと御懇ろなる御慈悲から先づ十方諸佛の看病人に藥りの功能六字の功德を讃嘆させ重誓名聲聞十方と屆けたひのが腹一杯善知識の御教化に依り彼方のまことが知られてみりや重ひ頭を少しは上げてかゝる機までも御助けと信ずる一念一刹那年月日時の覺不覺を論せず南无阿彌陀佛の妙薬がいたゞかしてみりや長の大病本腹むで信の行者の今日此頃乃は「ぼそ〳〵」ながら御恩の稱名唱へる身に成つたが六字の妙薬の功能と云ふもの疑ひ深ひ腹底へ屆けてやりたひ御慈悲から諸佛の讃嘆を御暫ひなされた扨名聲とあるは法体成就の彼方の御名前「ナモアミダブツ」が名体不二の謂れと申して名も体も別物ではなひこと世間に於て

も先づ分り易いことを申せば梅と云ふ名を聞くと即座に口中にすい壺が出る譬し東照神君家康公が戦さ敗れて逃げ道にのんどをかはかして水が呑みたいと云はれたるにあたり近處に家はなし水を上ること叶はぬ故近侍の士ひも困り果たるをさすがは頓智に長じた大久保左衛門ゆへ御傍に寄て申すには是より今五丁斗り参れば梅林がありまする程に梅實を取りてさし上げます此處には人家もなし暫く御辛抱なされませと申し上げたれば何となく口中に酸い水がたまりてかわきが止りたとある名を聞た斗りで酸いつばを生ずる如く六字の名号聞いた一念御助け治定に間違ひはなひさりながら聞くと云ふもれはようなる无名无實の開きやふでは所詮がなひ御當流で御勧め下さる聞やふは聞即信のいはれ聞信无疑の聞やふでなければ聞いたと云ふものではなひ又論註の中にはこひらがへりのときにばけ〳〵と名を呼べばおはると云ふ喩へがある是れみな名体不離の謂れで名に其德を具へてある今南无阿彌陀佛の六字の名号に御助下さる阿彌陀の尊体別々の物ではあひ唯一つぢや名号の外に御相たなし御相たの外に名号なし依りてさく一念其儘に御助け下さるに間違はなひ聞れば此名号は生きて働らく謂れとならねば所詮がなひ唯聲や口先斗りに唱へたのでは功能はなひ信ずる一念の聞信无疑に叶はねば往生はならぬこれが如實の聞と云ふもの衆生佛願の生起本末聞信の處が重誓の願意に叶ふなり。

普放无量无邊光　無碍無對光炎王　清淨喜歡智慧光
不斷難思無照光　超日月光照塵刹　一切群生蒙光照

上來法藏菩薩因位の御苦勞を述べ畢りて今は正しく正覺成就の果上の光明の德を讃嘆したてまつる彌陀如來攝化の相无邊なりといへども光号の二德を擧くれば餘は悉く攝すること先に辨ずる如し依て最初に皈命无量壽如來南无不可思議光の二句を上げて光号の二德を以て南无皈命の法体

としらせ玉ふ。故に今光明不可思議の讃れを十二光と開き名号无量壽の德を。本願名号の四句に御讃嘆いたす。扨ての十二光は。源と大經に阿彌陀如來の威神功德不可思議なることを讃嘆して。次に「是故无量壽佛号無量光佛」等と說かせられた。爾るに觀經には「八万四千の光明」と御說きなされ。阿彌陀經には「光明无量」と御說きなされてある。是れは彌陀の光明に增減のあるわけでもなく。多ひ少いの差別があるのでもなひ。廣略无碍開合自在とありて。廣く開ひて御說きあさるゝも。略して合せて御知らせなさるのも光明に違ひはなひ。矢張り不可思議光ぢや。扨普放とは。普は周遍の義と云ふてゞもかしても行き亘らぬ處のなひと云ふ事。是れに二義ありて。一には放光一ならざる放に普放と云ひ。二に照境廣多の放に普放と云ふ。此二義を能處に約して辨せば。初の放光一ならざる放とは能放の彌陀の方に一光ならず。二光三光乃至无量の光明を放ち玉ふ故に普放と云ふ。又照境廣多の故にとは彌陀の光明の照し玉ふ境界の廣大衆多なるを普放と云ふ。觀經には「光明遍照十方世界」と說かせられ。御和讃には「十方微塵世界」とのたまふ扨又此十二光は花火線香のやふに。初に枊次に紅葉と云ふやふに次第を立て順次に照し玉ふのではなひ。同時に十二光の德用を顯はして普く衆生を照破照育したまふ。卽ち衆生の八万四千の煩惱惡業を亡ぼしたまふは照破の方。辨慶が背に負ひたる七つ道具は。目的の敵を伐ち滅ぼさん爲め。彌陀の御成就なされし不可思議の光明は。衆生の煩惱を滅亡させて。たさる爲めの御道具ぢや。又照育と申すは。照らしそだてると。喩へば日輪の光明に依りて草木が成長する如く。今も信ずる一念皈命の立處にての阿彌陀如來はふかくよろこびまし〳〵て其御身より八万四千のれはきなる光明を放ちて其光明の中に其人をれさめいれてれきたまふなりとあり。念佛の衆生を光明の懷ろに攝め取り常に照護したまふ。是れを心光常護の御利益と云ふ。照護といひ常護と云ふこの護の字が護持發育とて照らしそだてゝ下さるゝと扨てまた此光明について。色光と心光と常光と現超光との譯がある。其常光と

云ふは一切の佛けに常住不斷に顯はるゝ光明を常光と云ふ現起光と云ふは其し其總に依りて放ち玉ふの光明を現起の光明と云ふ丁度釋迦如來さまが法華の御座で眉見の白毫から光明を顯はして東方一万八千の世界を御照らしなされ又大經の會座に五德端現の相を現はしたまふ時の御光明の如く其時其緣によりて現ずる光明のこと今阿彌陀如來の光明は十二光も八方四千も皆こと〳〵く常光で横に十方竪に三世暫らくも絶へ間のなひが諸佛光明處不能及の御手柄ぢや次に心光と色光とは色相ばかり御照らしなさるゝを色光と云ひ心を御照らしなさるゝを心光と云ふ是れを近く喩へていへば彼の夏の頃ろ夜店の水瓜棚を見れば行燈を赤紙で張りて置く其赤い紙のうつりで水瓜が格別に赤く見へるが何がさて買て戻りて見ると色も白ふて味ひも惡ひ道理こそ赤紙の力らで暫らく色を赤くは見せても味ひを出すことは叶はぬ丁度其如くで外手り照すを色光と云ふ心光と云ふは心の光りと云ふて阿彌陀如來の御心ろから吾等が惡しき胸の

中を照らし惠んで下さるゝゆへ今日は御慈悲の中で寐起きして行往生臥に御恩の稱名喜ぶ甘味の出つるは是れが心光の御力らぢや今阿彌陀如來の光明は色心不二と申して丁度水瓜の外から内まで照らし抜ひて味ふ如く心光常護の御利益を蒙るなり扨て是から十二光の御名を一々辨述せんに此正信偈では其名目斗りを挙げさせられたが是れを御和讃には一首々々に和らげて御示しなされてある故に此十二光の御讃れは御和讃にうつして辨述すべし

無量光とは御和讃に『智惠の光明はかりなし有量の諸相ことゝく光曉かひらぬものはなし眞實明に皈命せよ』とある四句の御讃はれ先つての无量光と无邊光の二つは竪に長いと横に廣ひとの光明ぢや竪に長ひとは三世に亘りて先づ正覺成就の曉から盡未來際のすゑまでも絶へ間のなひやうに御照らし下さるを無量光と云ふ此光明は智相と云ふて阿彌陀如來の御智惠から顯はるゝ故に智惠の光明と仰せらるゝ智惠の二字は己下の十二

光年ち昔な智恵の光明ちゃ。はかりなしとは无量の字の和讃にして。分り易く知ちせん爲めに。やはらげて御示しなされた。有量の諸相と云ふと。はかりある諸の相と云ふことで。光明にはかりがなひ故にばかりある程の相たのあるものは。皆此光明の御利益を蒙ひる。其相と云ふは數多ひことで。衆生多少不思議なれば。仲々我れ人に數へ盡さるゝものではなひが。正法念經の中に。畜生道の種類が四十億あると說かせられた。樓炭經の中には。空を飛ぶ鳥の類が二千四百種。水に住む魚の類が四千五百種。又獸の類が二千四百種あると說いてあり。又五行大義と云ふ書物の中には。羽蓄と云ふて羽根のあるものが三百六十種。甲虫と云ふて龜のやふなる類ひのものが三百六十種。鱗虫と云ふてうろこのあるものが六千六十種。裸虫と云ふてはだか虫が三百六十種とある。人間の如きは此裸か虫の頭ちゃや。生れた時も裸体又死ぬるときも裸体。妻子珍寶及王位臨命終時不隨者と。丸の裸体で往かねばならぬ。誠に哀れなものちゃ。扨其諸相の中に大小長短の差別があり。佛說の上で

は一番大なるものは。大海の底に住む難陀龍王。又は金翅鳥と云ふ鳥は。左右の翼さの相ひ離るゝこと。五百由旬ぢやとある。外典の上では莊子と云ふ書物の中に。大鵬と云ふ鳥は形ちの大なること。翼を垂れて雲の如く。一息きに九万里を飛び。六月に一度休むとある。扨又少きものは蟭螟と云ふ虫は。蚊のまつげに巣を作りて住むと云ふ。又此頃顯微鏡と云ふ眼鏡を以て見るときは。一合の水の中には數の知れぬ虫が居る如く。其種類は數多ひ事なれども。大小長短の分け隔てなく如來の光明を蒙らぬはなひ。故に有量の諸相ごとく〳〵と仰せられた。若しも彌陀の光明に大な物は照すが。少さな物は照らさぬとか。男は照しても女は照さぬとか。分け隔てがあつたなら。今日の我れ人も若しや漏れはせぬかと案じらるゝが。有量の諸相ごとく〳〵。一度び御助け候へと。たのむ皈命の一念發起すれば。此光明の中に掴め取られ光曉かふらぬものはなしと。御照しを蒙ひるを攝取の光明とも。不捨の誓約とも仰せられ。長の无明の闇はれて迷の夢のさめた處が光曉かふらぬもの

はなしとある御聞れなり。

无邊光とは。十二光の第二番目で先きにも云ふ如く。此无邊光は横に廣ひ光明で。阿彌陀經には「照十方國」と說かせられ。又觀經には「光明遍照十方世界」とあれば阿彌陀如來の光明は自餘の諸佛の光明に勝れて。是れから是までと云ふやうに限りがなく。十方法界微塵刹土へ遍照するところが。御名に顯はれて无邊光と云ふ。是れを和らげて。御和讃に「解脫の光輪きはもなく。光觸かふるものはみな。有无をはなるとのべたまふ。平等覺を皈命せよ」との玉ふ。扨て。この解脫とあるは。佛の三德の中の一つぢや。其三德とは法身と智慧と解脫の三德。中に於て今の解脫と云ふは。煩惱の繫縛をはなれ大自在を得るを解脫の德と云ふ。是れは彌陀如來の方ばかりぢやなひ。機法一体の御約束ゆへ阿彌陀如來御自身の德が直ぐ其儘。我れらが煩惱のきづなを切りて。安養淨土へ參らせて下さる故に業垢を除き解脫をうと仰せられた。是れを天經に「迅二斯光明一皆得二休息一「无二復苦惱一壽終之後皆蒙二解脫一」と說かせられた。解はとける

と云ふ文字。脫はまぬかるゝと云ふ文字で。煩惱の繩をといて。生死の牢獄を免かれさせて下さるゝを解脫と仰せられた。丁度監獄に繫がれて居る罪人出つることのかなはぬ者が。大赦の恩命を蒙むる如く。迚も出離之緣の無き者が。罪障一時に消滅して。大自在を得たてまつるは解脫の德ぢや。光輪とは轉輪聖王の七寶の中に輪寶と云ふがありて。聖王御幸の時は先き拂ひにてろ〳〵ところがりて大きな石があろうと大地に高下があろうと。皆打ちたひらげて平等にする寶ぢや。今は彌陀如來の御光明を此輪寶に御喩へなされて光輪と云ふ。きはもなしとは。无邊の文字のこゝろ。此光明に邊際がなく。御照しなさることを无邊と云ふ。此光明にさはりふるゝものは。皆な有无の二見をはなるゝと仰せられた。扨この有无の二見と云ふを具さに云へば。外道の處立では仰々六ケ敷いが。今一口に分り易く云へば。今日世間でも人間は何迄も人間で。瓜のつるには茄子はならぬ。地獄も餓鬼も有るものか。牛や馬にもなりはせぬ。生れ替りても死替りても人間は矢張人間で。其中に

善いことをすれば高位貴人や、金持に生れ。悪いことをすれば貧窮下賤に生るゝばかり。人間が畜生になり畜生が。又人間になるなどと云ふことは无ひと心得て居る人は。常見と云ひ是れを有の見と云ふ。次に无の見と云ふは。人間は死ねば四大五蘊皆な本へ戻りて。滅して仕舞ふにより跡かたはなひ一切空になりて因もなければ果もない。地獄へ落つる魂もなければ。極楽へ往く魂もない。燈火が消へたと同じ事。因果業報共に无しと心得たは。断无の見と云ふもの。其有の見へでも无の見へでも。片寄りたが遍見と云ふもの。今は其一方片々へ偏執せぬやふに。御照し下さるゝが无邊光と云ふもの。然るに有无の二見と云へば。外見の事で我らには更になひことのやうに思ふて居る人もあろうが。隠分片絹かけて殊勝な同行中間に。往々此有无の二見を以て居る人がある。夫れは如何と云ふに念佛の數を積み。稱へた遍數に力らを入れ。稱功をたのみにして助かろうと云ふ。猴ちは。有の見の仲間。又信心さへ得れば稱名は入らぬもの往生の正因は信心一つなれば。報謝の稱名も唱ふ

るに及ばぬと偏執するは。无の見の仲間といはねばならぬ。此等は本願の御法りが正直に貰はれぬ故眞實の道理に契はぬ。他力の信心は必具名号の理はりなれば。信心の智慧に入りてこそ。佛恩報ずる身とはなれ。身を粉にしても骨を破きても。廣大難思の御恩德寤寐に忘るゝことなかれ。行住坐臥にへたてなく。南无阿彌陀佛を唱ふべし。是れが如實の正信念佛と云ふもの。有无二見に片よらず。如實に法義相續を營ひは光觸かふるものはみなとありて无邊光の御照しに恩まるゝ身の仕合せぢや。依て此光明にふれたらば。有无の二見を離るゝ筈。有无の二見をはなれたは。此光明にふれた德なり。喩へば鍋に觸れた覺へはなけれど。補にべつたり墨が付て。あれば鍋底へさはつたことが知らるゝ。今れ互ひの心の上に。信心領解の墨が付き。有无の二見に片寄らず。如實に法味を喜ぶは。此光明に觸れた德ぢや。次に平等覺を的命せよとは。阿彌陀如來をたのめとの御勸めぢや。上みに眞實明と云ひ。今平等覺と云ひ。是れから後ちに畢竟依大應供抔と仰せらるゝも。皆阿彌陀如來の御名

なり。何と御名前が澤山なことぢやと思はるゝであろふが。其德に依りて名が付くのぢやに依りて。德が無量なれば御名も无量ぢや。喩へば一つの寶劍を叢雲の劍ぎと云ふ。艸薙の劍とも云ふ如く。其德用に依りて名が種々に付く。今は平等の大悲が御名に顯はれて平等覺と云ふ

無碍光とは。十二光の第三の光明なり。是れは阿彌陀如來の光明にさはり邪魔のなひ德が。御名に顯はれて無碍光と云ふ。阿彌陀經に『照十方國无所障礙』と說かせられて。彌陀の光明にはさはり妨げとなるものは一つもない。之れを御和讃に『光雲无碍如虛空。一切の有碍にさはりなし。光澤かぶらぬものぞなき。難思議を皈命せよ』と仰せられて。光雲无碍如虛空の一句は。御喩へが二重になりてゐる。光り雲の如く无碍なること虛空の如しと云ふ意で。阿彌陀如來の光明の光界に偏滿することは雲の如く。其光明に邪魔になる物のなひのは虛空の如しと云ふ御言ぢや。卽ち彌陀の光明は雲の法界に覆ふが如く虛空の无碍なるが如く。十方世界を御照らし下され。貪瞋煩惱の吾々が胸

の中を照し拔いて下さるを无碍光と云ふ。一切の有碍にさはりなしとは障りある者に障りなしと云ふことで。御互ひは有碍と云ふて障りの多ひもの諸佛の手前へは邪魔にもなりさまたげにもなる。爾るに彌陀の光明には邪魔することもかなはず。障礙することもならぬ。罪障功德の体となる。氷と水の如くにて。氷り多きに水多し。さはり多きに德多しと仰せられた。物して无碍と云ふは。力らの强いものが多勢の人の中を通るに。人がよけて通す故に邪魔にならぬを无碍と云ふやふに心得へては詮なきことなり。今无碍と云ふは。圓融の義でとろけ合ふ事を无碍と云ふ。力者が多人數の中を通るに邪魔にならぬは圓融ではなひ。衆生の煩惱罪障と菩提功德とが離ればなれになりて居るのでは處詮がなひ。衆生の煩惱と如來の光明とがとろけ合ふて下され。煩惱卽菩提生死卽涅槃と十惡五逆の惡人も。五障三從の女人も光明の中へ攝め。正定不退の聚に入り。極樂へ往生させて彌陀同体の証りを開かして下さるが。无碍圓融の光明の御手柄ぢや。邪魔になるものが邪魔にならぬ

ばかりぢやなひ。障りとなる罪となる煩惱の邪魔物が。其儘功德の体となり障り多きに德多しと。圓融无碍の德用を一切の有碍にさはりなしと仰せられた。御開山の御言に「善もはしからず。彌陀の本願を信受するに勝るゝ善きが故に。亦惡もれそれず本願を妨ぐるほどの惡なきがゆへに」とありて。性得の罪障は多けれど。迚も本願の邪魔をすることは叶はぬ程に。吾が生れ付きに目を掛けず。斯かる者をと見かぎりつめて。惡業煩惱の其儘で御助け候へと。第十八願へ飛び込むばかりで。煩惱菩提一味なりと。知せて下さるが无碍の光德なり。光澤かふらぬものゝなきとは。澤とは濁澤の義と申して。光明のうるはひと云ふこと。即ち十方衆生をうるはして下さるを光澤と云ふ。是れが上みの光雲とある雲の用ちきとなる。依て此光明におひぬれば法義のうるはひが出る處を。光澤かむらぬものゝなきと仰せられた。六月の炎天に照り付けられた草木が。雨にあへば青々と生き返る。無始已來今日まで。生死迷ひの煩惱に照り付けられた今日の我人が。阿彌陀如來の无碍の光明のうるはひで。青々と生き返り。往生治定の花が咲き。何日何時でも此世の因緣つき。次第。佛果圓滿の証りの菓みを取入れる。仕合者は。一念皈命の領解の身上なり。次に難思議とは。彌陀の御智慧のはかりかたきことたとひ上は等覺補處の彌勒でも。因人の思ひはからるゝことでなひ。超世の本願不共の妙法余處に捨てられ嫌はれた我れ人を。一番掛けの正客として呼び掛け。九方淨土の邪魔物が。阿彌陀如來の正機ぞと。知らせ玉ふが。無碍光の御利益と云ふもの。

無對光とは。阿彌陀如來の光明の德用が勝れて居るゆへ。外に並び比ひのなひを無碍光と云ふ。此無對に付て二義ありて。一に然對光二に無敵對初めに無對光とは。无對と云ふときは。一對二對と對するものゝなひこと。阿彌陀如來の光明に對する光明が无ひゆへに无對光と云ふ。是れが絶對不二の光明と云ふもの。依て大經には「諸佛光明所不能及」と說かせられた。二に無敵對の義と云ふは。光明に敵對ひ向ふもの「ゝなひこと。八萬四千の煩惱も此光明に

は敵對するとかなはぬを无對光と云ふ如何に厚き氷りでも日輪の光りに照されては消ゆる如くなり。是れを御和讃に「清淨光明ならひなし遇斯光のゆへなれば。一切の業繫ものぞこりぬ。畢竟依を皈命せよ」と仰せられて。遍なしとあるが無對の義。次の御言に遇斯光のゆへなれば。と仰せられたは。大經に『遇二斯光一者三垢消滅身意柔軟』と說かせられて。此光明に遇ひたてまつれば。三毒煩惱の垢拔けがして。身も心も柔軟になるとある御意ぢや。遇斯光の遇の字は此光明にあひたてまつること。惣じてあうと云ふ字に色々ありて。合の字は兩方から持合ひをして符合すること。相の字は相互なりと云ふて。あちらこちらもと云ときに相の字を書く。逢の字は互ひに約束をして出合ふ事。今の遇斯光者とある遇の字は。思ひ掛けなく遇ふことに用ゆる文字で。今日の我れ人が此光明にあひたてたつる約束したこともなく。阿彌陀如來の御慈悲から。思はず知らずあはせて下されたを。遇斯光のゆへなれば。と仰せられた。觀佛本願力遇无空過者なれば。遇ふて空しくすぐるものなしと

ありて。空しくすぐると云ふは。寶らの山に入りながら手振りでかへることぢや。此光明にあひ此本願にあひたてまつるものは空手でかへるものは一人もなしとある御催促ぢや。此方には苦勞思案も入らぬ。唯如來の光明の不思議で遇ひさへすれば。廣大の利益を得させて下さるに間違はあひ。一切の業繫とは。惡業煩惱にしばられて。迷ひを離るゝことの出來ぬ有りさまは。丁度牢獄の中に繩を以て縛られし如くぢやとある。其煩惱の業のきづなを。自然に光明の用ちきを以て。除きはるとあるが今の御教化ぢや。

光炎王とは。炎王光とも申して。十二光の第五番の御謂れなり。御和讃に「佛光照曜最第一光炎王佛となつけたり。三塗の黑闇ひらくなり。大應供を皈命せよ」と仰せられて。佛光照曜とは。如來樣の御光明の照りかゞやくと云ふこと。最第一とは最は此上なしと云ふ文字で。阿彌陀如來衆生濟度の御手拇が。一番勝れて御座るゆへ最第一と仰せられた。第一と云ふ言に。待對の一と絕對の一との二義がある。待對の一とは。一二三四と云ふ時の一の字のこゝろ。此

ときはくらべものゝある一ぢや。絶對の一と云ふときは。一と云ふたら二のなひことゝ唯有二一乘法一無亦無三と云ふ一の字で。外に並べてみる物のなひことを一と云ふ。今炎王光に最第一と仰せられたは。佛の中でも二とつゞくものゝなひ。絶對不二の光明を。佛光照曜最第一とは仰せられたるなり。光炎王佛とあるは。炎はほのうと云ふ字で。光明の盛んなるかたちを炎と云ふ。不動明王の後光を世俗に火炎のやうに思へども。彼れも奄摩羅炎と云ふて。光明の盛んなる相たぢや。彌陀の光明の盛んなる姿たを。御名に顯はして光炎王と云ふ。王とは自在の義最勝の義と云ふて。光明の自在无碍に御照らしなさるゝ。諸佛不及の光明を御しらせなされたが。王の字の意ろぢや。三途の黑闇ひらくなりとは。三途と云ふは。地獄と餓鬼と畜生との三つぢや。地獄を火途と云ひ。餓鬼を刀途と云ひ。畜生を血途と云ふ。途の字に艱苦の義もあり。道路の義もある。艱苦の義と云ふ。時は。民の塗炭にくるしむと云ふときの塗の字をかく。塗炭とは。水火の中に苦しむことゝ。次に道路の義とは。はしやにくや腹立

や可愛や不便やの。三毒煩惱が種因となりて趣く道ぢや。ゆへに三途と仰せられた。黑闇とはくらやみと書た文字で。惣じて此の三惡道は。智惠の明りは少しもなひゆへ皆黑闇ぢや。爾るに今は此光明を以てひらひて下さるとある。時に此御言が。平生聽聞の御教化とは違ふて。常の御教化には「横截五惡趣惡趣自然閉」とも。又は「閉塞諸惡道」とも仰せられて。六趣四生の因亡び果滅すとも。又は五道六道といへる惡趣にすでに趣くべきみちを彌陀如來願力の不思義を以て。これをふさぎ玉ふともありて。光明で塞ぎ閉ぢて下さるゆへに井戸へ蓋を致した如く。落とうても落られぬとあるに。今爰の御教化では開くと仰せられたは如何と云ふに先づ近く喩へて申せば。戸棚へ鼠がはいりて。でと〳〵いはすときは惡ひ鼠ぢやと戸をゞて置たら。夜中あばれまはりて中の物をかじりまはす故。そこで一旦戸をあけて追ひ出し。今度から再び入らぬやふに戸をしめる如く。地獄や餓鬼の三惡道に居るものを。其儘とぢられては永々劫浮む世はなひ依て其三惡道に居るもの〳〵爲めに。三途の

黒闇ひらくなりと。此光明で蓋たを開き。人間界へ出して下され善知識にあひたてまつり。本願の御謂れを聽聞し奉つりて。一念皈命の信心了解のとき。再び三惡道へおちぬやう塞いで下さるゝのが。惡趣自然閉とある經文の意ろ。是れが開閉自在の御手柄と云ふもの。開くも御慈悲閉づるも御慈悲なれば。衆生可愛の御心に少しも違ひはなし。

清淨光とは。阿彌陀如來の無貪の善根より。顯はるゝ御光明なり。是より下清淨歡喜。智惠の三光は。次第の如く我れ人の。貪欲瞋恚愚痴の三毒を對治して下さるゝ御光明ぢや。先づ只今の清淨光と云ふは。貪欲の煩惱を滅ぼして下さるゝ御慈悲の顯れぢや。大經に「不生欲覺瞋覺害覺。不起欲想瞋想害想」と說かせられて。法藏因位の昔し我らの身替りに。三毒煩惱を對治して。清淨眞實更らに欲氣のなひ。御慈悲から顯はるゝ光明ゆへに。清淨光と仰せられた。曾子の家兒は罵ることを知らず。梅檀の林に入れば。香氣が其身にうつる道理で。此光明に遇ひ奉れば。貪欲の煩惱が其儘。欲生我國の信心と轉し。御助けありつることの嬉しや。難有やと喜ぶ心となる。此光明を御和讃に「道光明朗超絶せり。清淨光佛とまうすなり。ひとたび光照かふるもの。業垢をのぞき解脫をう」と御催促なされて。先づ道光とあるは。一道清淨无上涅槃の御証りから顯はるゝ光明を道光と云ふ。明朗超絶とあるは。明はあきらかと云ふ文字。朗はほがらかとよび字。俗にはつきりすると云ふと。分明なるを明朗と云ふ。諸佛の光明でも明朗には相違なけれども。彌陀の光明の明朗なるにくらぶれば。行燈と電氣燈の如くぢや。故に超絶せりと仰せられた。清淨光佛と申すなりとは。清淨と云ふが即はち无貪欲の事で。世間でも欲の深ひしはい人を彼の人はきたなひ人ぢやと云ふ。欲の深ひ人は着るものも着得ず。喰ふものも喰ひ得ず。有るが上にも欲しいくと思ふのが。根性のきたなひ貪欲の姿たぢや。今阿彌陀如來は。光載永劫の御修行に其欲心を御離れなされた故。此清淨光明を御成就なされた。其光明の御照しを蒙ぶる故に。我れらが貪欲の煩惱を亡ぼして下さる。此貪欲の煩惱と云ふものは。未來では餓鬼道の因に

なる恐ろしいもので。此貪欲が未來で果の根たを顯はしては。眼の大きなること大山の如く。咽の穴の細いことわうか針の穴の如く。手足は糸の如くにして。たとひ須彌山を丸で飲んでも飽き足らぬと云ふが。餓鬼の苦しみぢや是れは此世に居る間だ。如何程ありても足ることをしらず。十両あれば百両にしたし。百両あれば千両にしたしと。一生に盡きても欲心は盡きぬ棺桶へ入るまで是れでよいと思はなんだ報ひが未來で餓鬼道へ落るとある。其餓鬼にも有財餓鬼。无財餓鬼。小財餓鬼と云ふ三種がある。此三種に各々三を具して。三々が九色に分れ。其上正法念經の中には。三十六品と說てある。今日の我々は。一日も此貪欲の起らぬ日はなければ。餓鬼直付けの御客さまぢや。一度此餓鬼道へ落ちたれば。其苦しみは口や言に盡されぬことぢや。或ひは大海の水は七度までかれたを見たが。水一滴も呑むことかなはぬと泣ひた餓鬼もあり。生れてから五百歲になりまするが。米一粒たべませぬと悲しんだ餓鬼もあり。一通りのことではなひ。太苦惱を受けねばならぬ故へ。早く信心

決定の身となりて。淨土の往生を遂げたてまつるべきことなり。

歡喜光とは。阿彌陀如來の無瞋の善根より顯はれて。衆生の瞋恚の煩惱を對治して下さるゝこれを御和讚に「慈光はるかにかふらしめ。光りのいたるところには。法喜をうとぞのべたまふ。大安慰を皈命せよ」と仰せられた惣じて瞋恚の煩惱と云ふは。恐ろしいもので一念の瞋恚に俱胝刼の善根を亡ぼすとありて。たつた一念腹を立てると。俱胝刼と云ふ長の間だ積み重ねた善根功德を燒き亡ぼして仕舞ふとある。之に付て昔し叡山の道乘法師と云ふは。正算の學徒で常々法花經を讀んで阪本に御坐りしところ。此人如何なる過去の業報にや。瞋恚の煩惱はなはだつよく物事に腹を立てられたが。或夜夢に叡山に上りたるに。浩搏なる堂がありて。金銀瑠璃を以て莊嚴し。極めて立派なる上に。其中には數も知れぬ程澤山なる經卷を納め。積み重ねてあるゆへ道乘てゝろに思ふやう。扨ては如何なる人の建立せしものや。何人の集めたる經卷にや。此堂を立て此經卷を納むるは。廣大なる善根であろうと。隨喜

感歎してながめて居る内に。片隅から火が燃へ出て。見る間に今の莊嚴美麗なる堂も。无數の經卷も煙と消へ。唯だ殘るは灰ばかりとなりたれば。大ひに驚ろきなげきて。扨も〳〵惜しきことなるかな。是程の火事を消し止むる人もなく。むざ〳〵燒き捨てしは。如何にも殘念なりと思ふて御座ると。爰に一人の老僧出來りたるゆへ。道ず問て云く先に莊嚴美麗なる此堂及び經卷を寄進せられたるはそも何人ぞや。又かゝる廣大なる堂宇をむなしく燒き捨てたるは。如何にも殘念なりと云ひたるに。老僧答へて云ふやう。左れば此山の麓とに道乘と申さるゝ人あり。常々法花經を讀誦して。其功德は丁度今の堂の中に。經卷を集めた程廣大なれども。此人瞋恚の煩惱つよくして腹を立てらるゝ度毎に今の火事の如く。其功德を燒き亡ぼすは誠に殘念なり。瞋恚の炎ふは實に恐ろしきものぞと。答へると覺へて夢さめたれば。大ひに後悔して。夫より瞋恚を起さず。腹を立てられなんだと云ふ話しがある。自力修行の上では。年來積み重ねたる功德善根も。一念の腹立ちで燒き亡ぼすなれば

迎も今日の我らの如く。行日〳〵腹を立てるものには。勤まるわけにはゆかぬ。爾るに他力信心の行者は此光明に照されたれば。恐ろしい瞋恚の煩惱を消滅して。法喜をうとぞのべたまうとあれば。腹の立つ替りにうれしやありがたやの。喜びが顯はるゝと仰せられた。慈光とあるは。御慈悲の光明と云ふことと。即はち阿彌陀如來の无瞋の善根より。顯はるゝを慈悲の光明と云ふ。慈悲があれば腹は立たぬ。此御慈悲の光明がいたるところには。法喜をうるといふて。法りの喜びが顯はるゝ。此喜びが取りもなはさず。瞋恚の煩惱を亡ぼして下された利益の顯れぢや。大經に『三垢消滅身意柔軟』と說かせられて。丁度ずゝ拂ひしたくたびれを。風呂へ入りたやうに。三毒の垢けがれはさつぱり落ちて。身も心も和らぎ打くつろいで喜ぶのが。此光明に遇ひたてまつりし仕合とある。古歌に『燃へ出づる瞋恚の炎う消しかねて。我れと乘り往く火の車かな』地獄非二地獄一汝心是汝の道理で。火の車が先きに拵らへてあるのぢやなひ。皆各々の胸の中に。にくや腹立やと思ふ瞋恚の炎うが。未來で火の車

と現はれて地獄へ連れてゆくとある。爾れば前の貪欲は餓鬼道の因、瞋恚は地獄道の因となる。其地獄と云ふは正法念經及び心地觀經抔に其苦しみの有樣を御說きあされてある。近くは横川の源信僧都の往生要集の中厭離穢土の最初に知らせてあり。又觀經では一生造惡具諸不善の惡人が臨終に牛頭馬頭の鬼が來りて目前に火の車を指しつけ乘れよ〳〵と責むるときは、惣身から玉のやふなる汗が流れ虛空をつかんで苦しむも自業自得因果の道理天をもうらみず人をもとがめず。大苦惱を受けねばならぬ。爾るに今日の我れ人は一年三百六十五日朝から晩まで地獄往きの元手をこしらへるにかゝり果てゝゐる。徒ら者なら地獄より外に往き場處はなし必墮无間の身でありながら一念彌陀に皈命せば瞋恚の煩惱根絶やしして下され法喜の思ひに住し婆婆の因緣誰さ次第恐ろしい炎うが清涼風火の車が轉じて紫金の蓮臺となり目出度往生の大果報を得たてまつるは信心領解の身の上に極はまる。生々世々に造りたきだる火の車には乘らずして思ひ掛なび

紫金の蓮臺に登るとは身の置き處ろもなき喜びと存せねばならぬ智慧光とは阿彌陀如來の無痴の善根より顯はれて衆生の愚痴の闇を晴らして下さるゝが此光明の御利益ぢや大論の中に智度菩提母と云ふ御言がありて六度の行の中の第六の智度は菩提の母であると仰せられた彌れば一切の佛けに智惠のなひ佛けと云ふは一佛もなけれども阿彌陀如來の御智惠は諸佛に勝れて御座るゆへ其御智惠から顯はるゝ光明も諸佛に勝れてある此智惠の光明の御照らしにあひたてまつれば衆生の愚痴无明の闇みが晴れ信心領解するゆへに往生治定と決得するを大經には明信佛智と說かせられた爾れば此度は无上智惠の主じ阿彌陀如來の御回向のはたらきに依りて信心の大智惠を領得するなり。これを御和讃に「智惠の念佛うることは法藏願力のなせるなり信心の智惠なかりせばいかでか涅槃のさとりまじ」と仰せられて今各々や我々が御恩尊とや南无阿彌陀佛と唱ふる稱名も皆阿彌陀如來の御智惠から顯はるゝのぢや又の御和讃に「信心の智惠

に入りてこそ。佛恩報ずる身とはなれ」と仰せられて。如來御回向の信心は阿彌陀如來の御智恵のかたまりとしるべし。此信心を得たれば。御恩が思ひ知らるゝ信心の智恵の无ひ間だは。御慈悲も冥加も辨へぬ。丁度二つ三つ位ひの小供は。智恵がなひゆへ大小二便の不淨でも。親の膝や懐ろを汚しても。分体なひとも氣の毒とも思はず。又は親の頭を叩いても。罰の當ることを知らぬ。夫れが段々智恵付きて。十四五才にもなりたれば。恩も冥加も辨へる如く我等も信心の智恵のなひ間だは。雜行雜修で如來の御恩を汚し。自力疑心で大悲の御胸を痛めても。勿体なしとも恐れ多しとも思はずに居りたるが。信心の智恵に入りてこそ。如來大悲の恩德は。身を粉にしても報ずべし。師主知識の恩德も。骨を碎きても謝すべしと。御催促の通り。思へば〳〵報じあきのなひは大〻の佛恩と知らるゝなり。時に智恵の名の付くものは。結構なものなれど。今度の後生の一大事に付ては。凡夫自力の智恵は御淨土參りの邪魔になる。聖道門の意ろでは智恵を研ひて生死を離る。淨土門の意ろでは愚痴

にかへりて往生を喜ぶたとひ一代の法をよく〳〵學すとも一文不知の尼入道の無智の輩らに同ふして。智恵の振舞ひをせず。唯一向に念佛すべしと御意あらせられて。自力の智恵は聖道門では間に合へども。淨土門では役に立たぬ。爾ればこそ龍樹天親の三菩薩も。自力のかぶとを拔きすて〻往生淨土を願はせられ。善導大師は我等愚痴身と仰せられ。源信僧都は余が如き頑魯のものと仰せられ。法然上人は愚痴の法然房と示され。我祖見眞大師は愚禿親鸞と名乘らせ玉う。之れについて昔し。唐の漢楚の時分に陳平と云ふ賢ひ勇者がありしが。此人項羽の手を離れ高祖の元へ往かるゝ時。道中に於ひて渡し場に往き。かゝりたるゆへ。舟をたのんで乘りければ。船頭共が是れを見て。其相たの立派なる有樣と云ひ。何んでも一方の大將分なれば。定めて軍用金も大分に所持して居るであろ。如何程武勇の人にもせよ。舟の中では此方の者ぢや。河の中程へ行きたれば。何とかして奪ひ取らんと惡る工夫を起したるを。陳平之れを察しそ。船頭共に向ひて云ふやう。戰國の時分晝夜の渡

し守りさぞ大儀である我れは少し舟の道を心得居るゆへ手傳ふてやろと具足を拔き捨て丸裸かになりて櫂を取りたれば船頭共是れを見て彼の櫂子では一向軍用金も有りさうもなしと思ひ扨も〳〵危うき事を企てたりとて止んで仕舞ふた故陳平は無事に首尾よく越へたとあるが何と敵を防ぐには鎧甲にまさるものは無けれども此時陳平が鎧甲を拔て丸裸だかにならなんだら危うかりしに丸の裸だかと成つた爲め恙なく渡しを越へたるなり今も無得難思の光明は生死の大海を渡して下さる渡し舟ぢや煩惱の敵を防せぐ智惠の鎧甲でも弘誓の御舟に打乘りて御助け候へと彌陀にまかせて參る人なら智惠才覺の鎧甲をさらりと拔ひて我身は增无一善の徒ら者と雜行雜修もぬぎすて〻丸裸かに成りて生死の海を越へ涅槃常樂の彼の岸へ到れよの御催促ぢや扨この智惠の光明の難有ひ用らきを御和讃に『無明の闇を破するゆへ智惠光佛となつけたり一切諸佛三乘衆ともに嘆譽したまへり』と仰せられて此

智惠の光明で无明の闇みを除ひて下さる〻とある即はち愚痴无明が体となりて愚痴ゆへに疑ひを起す疑ふが故に迷ふ扨この愚痴は未來畜生道の因となる其畜生道の苦しみは各々目の前で見る如く重い荷物を負ては人に使はれ互に喰ひ合ひかみ合ふて强者伏レ弱殘害殺戮の苦しみを受くるは愚痴の因が顯はるゝなり爾るに今は其畜生道の因とある愚痴无明の闇みを破りて下さるゝゆへ智惠光と名づく扨此无明と云ふに就て疑惑を无明と立つることもある即はち彌陀の御慈悲を疑ふて信せぬ故に心の无明が晴れやらぬ晴れたらば疑ふ筈はなひ此疑ひを除ひて下された處が其他他力の信心となる故に御當流では一番疑ひが邪魔になる生死の家には疑ひを以て所止とすとも又は流轉輪廻のきはなきは疑情のさはりにしくぞなきともありて此疑ひに引き回はされて參り易い淨土へ參り得ず今日まで迷ふたとある史記と云ふ書物の中には三軍の亂れは疑ひより起るとある世間に於ても主從の間に疑ひがあればれさまらず親子の間だに疑ひがあ

れば不幸の元夫婦の即だに疑ひがあれば不貞の元ぢや何事に付けても疑ひは甚だ悪るい依て疑ひは事の賊なりと云ふてある況んや後生の一大事天は地となり地は天となり日月は地に落るためしはありても偽はり間違いのなひ大聖の具言如來の勅勅其上阿彌陀經の上では六方恒沙の諸佛如來が遍覆三千大千世界の舌は腐れたゞれても間違はぬぞとある証誠の請合ひに立たせらるゝ手丈夫なる彌陀の本願を愚かな凡夫の心から疑ふた故へに生死の海に流轉して往生を遂げそこなうた徒ら者が今度と云ふ今度は无明の闇を破するゆへ智惠光佛と名つけたり此光明の御縁にあひ其疑ひを破りて下された故に親を疑ひ子を疑ひ夫婦姉背の間だでも疑ひ根性の強いものが彌陀の本願に疑ひ晴れ往生治定の身の上となりしは偏へに此の智惠光の御手柄と存ずべきなり

不斷光とは三世常恒にたへまなく御照らし下さるゝを不斷光と云ふ即ち十二光の九番目の光明なり爾るに此光明ばかりが不斷で外の光明には絶

間があるかと云ふに決して左樣なる譯ではなひ先きにも擧する如く此十二光は同時の放光にして元より互具互融して居るゆへ无量光が即无邊で无邊光が即超日月光と云ふ如く互ひに相攝するゆへに十二光は十二ながら皆不斷なれども取分け德の勝れた邊に約して不斷光と云ふ御名が顯はれたのぢや此光明の御照らしに絶へ間がなきゆへ今信心傾解の同行がいたゞひた御信心にも絶へ間がなく御恩報謝の喜びにもたへまがなひのぢや各々方や我々の生れ付きは下根下劣が持ち前ゆへ忘れがちの性根なれども此光明のたかけで御恩の尊とさは晝夜不斷に喜こばれ何日何時取り出しても往生一定にくるいの出なひは皆此光明の御照しぢや此光德を御和讃に「光明てらしてたへざれば不斷光佛と名づけたり間光力の故なれば心不斷にて往生す」と仰せられた初の二句は御文面の通りに間斷のなひ御照しから不斷光と名が付ひたことと扨間光力と仰せられたは御經の上で聽間すれば阿彌陀如來の光明の威神功德力を御聞かせにあづかるを光明の

御力らをきくと云ふ。卽はち今の如くに十二光の御謂はれを聽聞し大樣懈怠の徒ら者が佛祖の御前にひざまづき信心領解の上から報謝相續の稱名を喜こぶのが。取りも直さず閃光力心不斷の御理はりぢや。又家業渡世のなりはひにいそがはしき時分。御法座へも疎緣になり。大樣懈怠をしたときは閃光力が遠くなるゆへ。心不斷と云はれまひがと云ふに。大悲ものうきことなりて。常にわが身を照らすなりで御慈悲の光明に絕へ間はなひゆへ。一度他力信心の貫はれた身の上なら。絕へ間のある筈はなひ。扨閃光力と明其名號とあるは。逆ひ目があるかと云ふに。元より阿彌陀如來の尊体に。光壽二無量を御成就なされて。畢竟一六字の外はなひ。仍て光明は無聲の名號。名號は有聲の光明と云ふ譯けが備はる。光明も名號も更らに別々の物ではなひ。依て閃光力と云ふが卽はち閃其名號のこと。我が日本國の主じを。天皇陛下とも申し上げれば。大元帥陛下とも申し上る。此時は天皇の詔勅が。卽はち大元帥陛下の詔勅で。別々の物ではなひ。何れを聞いても帝王の詔勅に相違はな

ひが。但し大元帥陛下と申し上げる御名は。武を司どり玉ふ時の御名ゆへ。三軍を統御して敵を亡ぼす御用らきを備へ玉ふなり。今も光明と云ふ方は阿彌陀如來の智惠の方にて。無明煩惱の敵を滅ぼして下さる方の御德ぢや。昔へより王師に抗して反逆をなすもの。築へしためしは非らざるぞ。今阿彌陀如來の光明の御力らには。敵する煩惱も。なければ抗する障りもなひが。成神功德不可思議力と申すもの。

次に心不斷と云ふことは大切なることで。我等が心に絕へ間なく。御慈悲を喜ぶことぢや。爾るに我らの胸の中は。兎角散亂放逸に亂れて居るゆへ。取り止めもなく忘れ勝ちが持ち前ゆへ。こんな事では不斷とは云はれぬかと。不審の起ることもあろふが。是れに付ひて行相の不斷と。信体の不斷と二義がある。先づ行相の不斷とは。三業發動の行作に顯はれた喜びに絕へ間の無ひこと。卽はち行住坐臥時處諸緣ねてもさめてもへだてなく。南無阿彌陀佛を唱ふべしとの御催促ぢや。爾るに今時の我れ人は。隨分懈惰の日暮しをする

時もあるが、失れは本の一時のことで。又思ひ出してはやれ〳〵大切な御恩を忘れました勿体なやと慚愧の心ろを起して。あやまりはて〳〵喜こぶ故に是れが矢張り心不斷の德ぢや喩へば親孝行なる息子が親を大切の思ひが忘れる筈はなひが。朝から晩まで親の傍ばに居坐はりておりては。家業も商業も立ち行かぬ。店のいそがしい時は帳場に坐り。算盤持つて賓客に客と取引し。餘念もなく働くときは親孝行の念が消へたかと云ふに決して左樣でなひ。其餘念もなく實着に働らく其儘が親孝行の行相と云はねばならぬ今も其如く朝から晩まで佛前に坐り。禮拜恭敬の營みばかりが御報謝ではなひ。餘念なく家業を勵み。正直に渡世をする其儘が。御恩報謝の營みとなるゆへ。行相に於て少しも絶へ間のある譯けではなひ。爲すことすること皆な御慈悲の中の仕事から。之れが行相不斷と云ふもの。次に信体不斷とは。一度び金剛の信心を獲得したらん身の上は。如來の御慈悲が胸の中へ徹到して下されたゆへ。心口意の三業に發動はせずとも。御回向の信心に絶へ間なく。此

一念臨終までとはり。往生するなりと仰せられた。依りて後の句に貪愛瞋恚の雲霧常に眞實信心の天を覆ふ。譬へば日光の雲霧に覆はるれども雲霧の下明らかにして闇みなきが如しと御意あらせらるゝ通り。憶念の心に絶間はなひ。是れが信体不斷と云ふもの。又は念々不捨々是名正定之業とも仰せられた。是れ皆な不斷光の御引き廻はしと。大切に喜ばねばならぬ。

難思光とは。彌陀の御光明は思ひ計られぬとある事ぢや。惣して言語に言はれぬことは澤山あれども思ふて思ひはかられぬものは无い。喩へば目でみたこともなく。耳に聞いたこともなくとも。心の内で思ひやるときは計られぬと云ふことはなひ。彌陀の御光明は見こそせぬ聞こそせぬが。此容なものであるかと。心に思ひやることさへかなはぬとあるが。今の難思光の御謂れ故に。御和讃に「佛光測量なきゆへに難思光佛となづけたり。諸佛は往生嘆じつゝ彌陀の功德を稱せしむ」と仰せられた。扨測量とは。測度計量なぞと云ふて。はかりはかると云ふこと。今はかりなきと仰せられたは。天も量る

べく。地も量るべく。濱の眞砂は計り盡しても。彌陀の光明は計り知られぬとあるが此難思光とある御名なり。諸佛は往生嘆じつゝとは。全体今日の我れらは。无有出離之縁とありて。右から見ても左からながめても。逃ひをのがれる手掛りのなひ徒ら者が。彌陀の願力に助けられ。往生淨土の仕合せを得たてまつるゆへ。諸佛方が御讃嘆なされて。能こそ往生したと御ほめなさるゝことぢや。一寸喩へて申さば世間でも。放蕩者よ道樂者よと云はれ。迚ても一人前の暮しは出來まひと。近處近邊に云はれた者が。首尾よく改心して。生活の道を立て身代を持ち直したら。能こそ斯くはなられしぞと讃嘆する如く散亂放逸の徒らもの。罪業深重の借財をこしらへ。曾无一善の返濟する手段もなく。倍々三毒五欲に耽り。地獄より外に往き方のなき我れ入が。如何なる如來の御慈悲やら。願力の不思議にがらめとられ。今度こそは。目出度淨土へ參る身に。仕立てゝもろうた仕合者。十方諸佛の手に餘り。三世の如來に見放された惡人女人が。安養无漏の御淨土さまへ。往生を遂げさせて

いたゞく故へに。諸佛方が能こそ〳〵と御讃嘆なさるゝのぢや。爾るに放逸无頼の道樂息子を改心させて。生活の道を立てさせたは。或る慈悲深ひ金滿家が後ろ立て。今の衆生を極樂に往生させて下さるは。拜む大悲の阿彌陀佛なり往生しては。今日の私くし。往生させては御待兼ねの親さま。依て彌陀の功德を稱せしむと仰せられた。是れが即はち眞實報土の難思議往生を御讃嘆なさるゝのぢや。惣じて往生と云ふに種々ありて。先三願三機三往生といふて。十九願諸行往生は雙樹林下の往生。廿願の自力念佛では難思往生十八願の念佛往生は雜思議往生。又安心決定抄には。正念往生狂亂往生。意念往生。記往生の四種を示され。又御開山の御在世に。小坂の善惡坊との諍ひは。不躰失往生。不躰失往生なり。其外來迎往生。不來迎往生。平生往生。臨終往生なぞと申して種々なる往々が有る。其中には報土の往生と。化土の往生とがある。今御當流に知らせて下さる往生は。本願成就の御文に即得往生と說かせられて臨終またず來迎たのまず。死際の正念狂亂を頓着せず。平生業成聞く一

念に佛の方より往生治定と。間違はさぬ取りはずしのなひ。往生の大益を得たてまつるをば。難思議の往生とは知らせ玉へり。たのむ一念に早や願力の不思議として。彼方の御手元に御定め下さるゝ。往生を得たてまつるうへは何處で何時とり出しても。今一定の喜びに住し。一期の因縁つき次第。安養の御淨土樣へ。生卽无生の往生を遂げ。うつくしき佛ばけにさせて下さるを。諸佛は往生嘆じつゝ。彌陀の功德を稱せしむとある。

無稱光とは。阿彌陀如來の光明の功德利益の廣大なること。稱讃稱說しつくされぬ經には「晝夜一刹尙未能盡」とある。これを御和讃に「神光の離相をとかされば。无稱光佛となづけたり。因光成佛のひかりをば。諸佛の嘆するところなり」と仰せられて先つ神光の神の字は。和訓にはかみと讀む字ぢやが。凡そ此神と云ふに種〻の立て方がありて。天竺では佛けが華嚴經などに說かせられた。山神樹神などと云ふ。皆往古の佛菩薩が假りに神みの形ちを顯はして。佛法へ引導したまうの方便と云ふて。處謂和光同塵は結緣の初めと云ふ。

又唐土に於ては。先祖の靈を神として祭るが習ひぢや。我日本では天神七代地神五代。其外國中三千七百餘社の神明を神と崇むる。扨この神の代と云ふ以靈妙不測なるを神と名くるとありて。相たや形ちに付く名ではなひ。仍て先づ我日本では。神社には御幣を尊体と崇むるもあり。又は鏡を神体と崇むるもありて。正直を体とし少しも邪曲のなひのが神体なり。然るを愚かな物共は。たすきをかけて鰐を以て居るを蛭子の神と思ひ。又は狐を見て稻荷大明神と心得て其本意に違ふことが澤山ある。是れに付て實社と權社の區別を知らぬと大なるあやまりがある。方今は官幣大社中社縣社國社鄕社と。夫れ〻明らかに區別を設けて知らしてあるが。先づ佛法の上では。諸神本懷集に其理はりを示し。選師又御文章に懇ろに示し玉ふ。能々心得べし。今は略す。扨神光の離相と云ふは。其光明の靈妙不測なるを神光と云ふ。依て威神功德とも神力自在ともありて。其体德は言說に盡されぬを无稱光佛と云ふ。因光成佛とは。是れに二義ありて。今日の我等が此の光明の御慈悲に仍て。佛け

になるを因光成佛と云ふ謂はれと、又た阿彌陀如來の此光明の願に依りて正覺御成就なされた。其報身の光明を因光成佛のひかりと云ふ。其ひかりでは十惡五逆煩惱賊害の吾々。重障非器の女人まで。極樂淨土へ往生させて下さるを。扨ても不思議や難有やと。十方諸佛が贊め立てゝ力ら一杯贊めても贊めつくされぬ光明を。无稱光と云ふ

超日月光とは。超は超勝の義超過の義で。彌陀の御光明は日月の光明に超へ勝れたと云ふこと。先づ日月の光明には晝夜の分れが立つ。又四天下を照せども其他へ及ばず。障子一枚へ影と。日向たとが出來る。阿彌陀如來の光明は。上來聽聞の如く。无量无邊の光明なるゆへに。日月に超勝するとある是を御和讃に『光明月日に勝過して。超日月光となづけたり。釋迦嘆じてなほつきず。无等々を皈命せよ』と仰せられて。先づ今日此世に於て。光明の一番勝るゝは日月なるゆへ。今時の我れ人に易く知らせんために。超日月光の名を立て玉うなり。是れは近く此界の我れ人が。現在見てれる處に約して。彌陀の光德を

嘆じ玉ふのぢや。欲界忉利天の天人が放つ光明でも。日月の光明よりは勝る。又諸佛の光明と云へども。日月の光明に超勝せぬは一つもなひ。是れは喩へて云ふと。越中の人が富士山の高さを聞くゆへに。此國第一の立山より尙は高しと答ふる如く。唯だ立山より高ひと云ふた迄では。加賀の白山でさへ立山よりは高ひが。越中の人に知りやすからしめん爲めに。越中の第一高山たる立山より高いと云ふたら分り易ひ如く。超日月光と云ふたばかりでは。天人の光明や諸佛の光明でさへ超日月光なれば。別段の手柄もなきやうぢやが。能々其德を伺へば。諸佛光明處不能及とある。寶積經の中には。百千の日月の光りを合しても。佛の一毛孔の光明に及ばずと說いてある。不可思議无量无邊の光明なり。依て无等々を皈命せよとは。彌陀の信せよたのめよの御催促ぢや。

照塵刹。一切群生蒙光照とは。塵刹と云ふは具さに微塵刹土と申して。御和讃に『十方微塵世界』と仰せられた。數かぎりもなひ澤山なる世界のこと。此無量

无邊の國土を殘さず照らし玉ふ。丁度月は一体にして影を萬水に宿すが如く。如何なる艸葉の露にまで。月影の至らぬ處は无ひ。微塵の國土に周遍して殘す處ろも无き故に照塵刹と仰せられた。一切の群生と云ふは卽はち本願の十方衆生。成就の御文の諸有衆生のことにして。一人として殘るところなきをば。一切の群生と云ふ。爾れば一切の言は普及の義と云ふて。先つ一寸物の數て申しても。百あるものを一つ殘しては。一切とは云へぬ如く。見苦くい婆が一人でも此光明に漏れたらば。一切の群生とは云へぬ。群生とは衆生多少不思議にして。丁度武藏野に桔梗かるかや女郎花萩やすゝきの生へしげれる如く。少しも餘地のなひ程に。後からく生ずる有樣を群生と云ふ。其數多ひ衆生が皆光明の御照らしに預る。故に光照を蒙むると仰せられた其蒙むる用らきは。上來十二光の謂れぢや。爾れば此光明にあひたてまつれば。必ず生死を離れて。淨土へ往生を遂ぐるに疑ひはなひ。夫れなら誰れもかも照さるゝ故に。皆信心を得て喜こびさうな者なれど。それが悲しい譯で土龍の

如く日光に逃げ回はり。隱れ歩く故へ日輪を拜まぬと同じこと。今日の我れらは今が今迄逃まはり隱れ歩るいた故へに。永々迷ひを離るゝことも叶はなんだが。此度こそは此光明にあひたてまつりし仕合せに。目出度往生を遂げ奉るなり。次に蒙るとは蒙は覆なり被なりと云ふて。俗にかむると云ふことで。衆生に是光明をきせて覆ふて下さることを。喩へば子供に頭巾をきせるに。どうしてみてもかむられぬと云へば。母親が夫れはそんな筈はなひ。其方の頭に合せて寸法を取り。別に仕立た頭巾ゆへ。かむれぬ道理はなひとて。能く見ればかむれぬも道理。手拭で鉢卷きをして居るゆへにかむれぬ。又鉢卷を取りのけたら。都合よくかむれたと云ふ話しがある。今も衆生に蒙らせる爲めに御成就なされた彌陀の光明ゆへ。かむれる筈に出來上りてあるを被り兼ねたは。自力雜行の手拭で鉢卷をして居りし故ぢや。其自力の鉢卷取りて見りや。都合よく蒙むることの出來るのが。如來樣別仕立の光明ぢや。破命の一念發得の立處ろに。光明の中に收めとり。此世の因緣盡次第安養の御淨

土様へ送りとゞけて下さるのが攝取不捨の誓益と存ずべきなり

本願名号正定業　至心信業願為因

扨此二句は名号の御利益を御示しなさるに就て。先づ往相の因を明し玉ふが。此二句の御意ろ。上に光明の德義を明し。今は名号の利益を示す。即ち光明名号の因緣を以て。行信の因を與へ滅度の果を得せしむる。別願不共の因緣を知らせ玉ふ。口傳鈔に『しかれば往生の信心のさだまることは。われらが知分にあらず光明の緣にもよはし。そだてられて名號信知の報土の因をうゞしるべしとなり。これを他力といふなり』と仰せられた。此二句の中初の一句は所聞所信の大行。即はち十七願の名號なり。即はち彌陀が御成就なされし名号を十七願に於ひて十方諸佛にほめられんと誓ひ玉ひ。其願成就して十方恒沙の諸佛如來が皆共に。无量壽佛の威神功德の不可思議なるを讃嘆し玉ふ。これが本願名號の体なり。依て聞其名號とある其名號とは即はち今の

本願の名號。諸佛能讃の南无阿彌陀佛なり。扨本願と申す本の字に因本と根本との二義がありて。因本の願とみるときは。阿彌陀如來の四十八願初め无三惡趣の願より。終り得三法忍の願まで。一々の願が皆彌陀の本願と云ふこゝろ。又根本の願で解すときは。四十八の願の中に於ひて。第十八の願を根本の願と云ふ。此第十八願を開ひて。吾祖は五願を建立し玉ふ。然れば第十八願の一願も。夫より開ひた五願も更らに異ることはなひ。依て吾祖の御建立では。五願を根本願とする。故に十七願の名號を本願の名號と云ふ。喩へば一本の扇子を開ひて見せると。つぼめて見せるとの違ひで。一本の扇子にかはりはなひ。次に正定業と云ふは。是れに付て三義あり。一に正選定之業といたゞけば。法藏菩薩が因位に於ひて。正しく選び定め玉ふ業因と云ふこと。即はち諸善万行の其中から正しく選び取りて。衆生往生の因法を定め玉ふを。正定業とは知らせ玉ふ。二に正決定業といたゞけば。今日の我れら本願の名號を聞き疑ひなくば。必ず往生に間違ひのなひことを正決定の業と云ふ。三に入

正定業といたゞけば。今日此世に有りながら。一念帰命の立處に正定聚の位ひ不退轉の聚に入るは。この本願名號の御力ならぢや。斯の如く手丈夫なる名號ゆへに。餘事を差し措き聞信せよとある御催促ぢや。爾るに此名號を信じゑぬものは。本願を疑ふからぢや。喩へば世間に貰ひ乳して小兒に呑ませるは。其母親に乳が无いとか。不足ぢやとか云へば。止むをえぬ譯けぢやが。母親に充分不足なく乳の有るのに。あちらこちらと氣兼ねやら追従やらで。貰ひ乳する人が有つたら。定めて愚かな人と笑はるゝに相違はなひ。今我れ人が阿彌陀如來の親樣から。御回向と賜はる本願の名號は。五劫思惟の御苦勞より。御成就なされた南無阿彌陀佛。衆生往生の業因と定めさせられ。往生に付ひて入る品は。何から何まで封じ込め。露ちりはども不足のなひ。名號を御きかせにあつかりながら。此尊き六字を不足に思ひ。やれ觀音の靈驗よ。それ藥師の御利益よと。氣兼ねやら追従やらで。うろたへまはる人々は。何んと愚かな事ではなひか。我等が爲めに御成就なされし南無阿彌陀佛の名號は。十方

恒沙の諸佛如來が御讃嘆なさるゝ本願の名號なれば。餘處を探さうろたへず。其名號を聞信するより外はなひ。

至心信樂願爲因とは。正しく十七願の諸佛能讃の南無阿彌陀佛が聞き得られた。第十八願の信心のこと。扨第十八願には種々の願名がありて。信卷に五通りの名がある。一に念佛往生之願。二に選擇本願。三に本願三心の願。四に至心信樂の願。五に往相信心之願なり。此中に於ひて初めの二名は。善導大師及び元祖の御付けなされた名目。後の三名は吾祖の立てさせられた願名ぢや。先づ念佛往生の願とは。十念往生と誤まるものに對して御付けなされた名目。選擇本願とは。正しく第十八願を根本の願とするの名目。扨吾祖の御付けなされた三名は。本願三心の願と云ふは。三信を總稱して付けた願名。至心信樂の願とは。后の欲生を前の二に攝した願名。往相信心の願と云ふは。合三爲一の意ろにして。三信即一の邊より付けさせ玉ふ願名なり。御文章に「信心獲得すといふは第十八の願をこゝろうるなり。この願をこゝろうるといふは

南无阿彌陀佛のすがたをこゝろうるなり」と仰せられて。至心信樂欲生の三信は。十七願の名号を聞信したるすがたなり。卽はち成就の御文に「聞其名号信心歡喜乃至一念」とあるが。卽はち今の三信なり。爾れば本願の三信は成就の聞信一念より外はなひ。依て又御文章に「當流に立つるところの他力の三信と云ふは。第十八願に至心信樂欲生我國と云へり。これすなはち三信とはいへども。たゞ彌陀をたのむところの行者飯命の一心なり」と仰せられた。此飯命の一心が眞實報土の正因とて。造惡不善の凡夫五障の女人が淨土の往生を遂げさせて下さる因となるのが。本願の三信行者飯命の一心なり。爾るに三信とあれば。御信心が三つあるやうに心得る人もあるが。決して左樣ではなひ。又三信別々にいたゞくのでもなひ。頂受の手前に約すれば。助け玉へとたのむ飯命の一心より外はなひ。喩へば醫者が病ひを診察して。能くきく藥味を三品調合して。一粒にねりかためた丸藥の如く。呑む病人の方では白湯にて只一口に呑むばかり。病人の方には世話も入らねば造作もかゝらぬ

是れに引きかへ醫師の方では。思案も入れば造作もかゝる。今阿彌陀如來が各々方や我々が。无明煩惱の恐ろしき病氣を本腹させ。光明放つ佛ちにするについては。至心信樂欲生の三味を調合して。南无阿彌陀佛の丸藥一粒いたゞく。我れらが方に於ひては手間も入らねば造作もなひ。後生大事と口開き善知識の教導の白湯で。かゝるものを御助けと一口に呑む斗り。此方に世話のなひ替り。阿彌陀如來の御手元では。御思案ばかりが五劫の間だ。夫れより兆載永劫の長の間だの御修行で。御成就なされし本願の名号。これを諸佛讃嘆の御取次で。聞信无疑と得られたが。至心信樂願爲因とある御意ろぢや。扨至心と云ふは。まことのこゝろ信樂とは疑ひはれた決定心。欲生とは作得生想とて。淨土參りに付て二の足ふまぬこと。何時取り出しても參らして下さるに。間違ひなしと喜こび想ふ心なり。依て高祖の御釋には「欲生は信樂を体とし。信樂は至心を体とし。至心は玉德の尊号を体とす」と仰せられて。南无阿彌陀佛の御六字を全領するが。卽はち三信なり。此三信が報土得生の眞因と

なる。依て今日の我らが極樂まいりの因ねは第十八願の他力の三信より外にはなひ如何程沙体の御六字が正選定決定の業なればとて蒔かぬ種ねは生へぬ道理ぢやに依て。前の句は種ね米を選び取りて下された味ひ。今の句は衆生心中へ蒔き付て下された味ひ。兆載永劫の御苦勞で選び取りて下された。去年の秋の果實が南无阿彌陀佛の本願名號正定業夫れを今年の只今衆生貪瞋煩惱の胸の中に蒔付て下さるゝとき。至心信樂願爲因の種となる卽ち阿陀彌如來の方にありては行なり行者の方に顯はれては信なり。然れば其行信二つがと云へば。天上の月が水中に現ずる如く。阿彌陀如來の南无阿彌陀佛の天上の月が衆生貪瞋煩惱の水中に現はれて下されたので其味全く一つである。故に御和讃に『无上寶珠の名號と。眞實信心ひとつにて。无別道故ときたまふ』と仰せられた。因みに高祖北國御巡化の砌り。田舍恩味の者に易く知らせんとて。田植歌を與へたまふ。

五劫思惟の苗代に衆生往生の種ねろし兆載永劫の代をして。一念皈命の苗へを植へ。自力雜行の草を取り。念々相續の水を流がし。往生の秋にありぬれば。このみ取るこそうれしける』と敎へたまふ。先つ種米は南无阿彌陀佛の名号。信心正因の植付け場が。第十八願の三信秋の取入れ収獲は成等覺大涅槃。必至滅度願成就と。大切に喜ぶべきことなり。

成等覺証大涅槃　必至滅度願成就

此二句は名号の利益に依りて。往生淨土の果を明し玉う。卽はち十一願の意ろなり。此中初の句は。我れ人の機に受くるところの得益を顯はし后の句は佛の願力を示し玉ふ。成等覺とは現益にして。証大涅槃は當益なり。一念皈命の立處に。現當二世の御利益を樂ひることを知らせたまふ。御和讃に「至心信樂欲生と。十方諸有をすゝめてぞ不思議の誓願あらはして。眞實報土の因とする」とあるが至心信樂願爲因の意。ろ次に「眞實信心うるひとは。すなはち定聚のかずにいる。不退のくらひにいりぬれば。かならず滅度にいたらしむ」と

あるが今の何の意ろなり。扨等覺とは具さに等正覺と云ふて。佛けの正覺の御証りに等しいとある。卽はち佛けの御証りが十五夜の滿月なれば。等覺の菩薩は十四夜の月の如くぢやとある。此等覺の位ひに至るには。十信一万劫をへて初住不退にいたり。それより三祇百大劫を經て等覺にいたる。是れを補處の菩薩と云ふ。此次は必ず佛けになれる位ひゆへ。喩へば佛けが天子樣の位ひなら。補處の菩薩は皇太子と同じことぢや。爾るに爰にありがたひは。御開山信卷に「眞知彌勒大士究竟等覺金剛心」故龍華三會曉當レ極ニ无上覺位一念佛衆生究竟横超金剛心」故臨終一念夕超ニ証大般涅槃一故曰ニ便同彌勒一也」と仰せられた是れを御和讃には「五十六億七千万彌勒菩薩はとしをへし。まことの信心うるひとは。このたびさとりをひらくべし」と示し玉ひて。念佛の行者は。一念皈命の立處ろに。正定聚不退轉の位ひに住し。此息き一つが切れ次第。彌勒菩薩に先き立て大般涅槃の御証りを開かしていたゞくと云ふは彌陀願力のはたらき他力回向の信心にきはまる。

扨彌勒菩薩と云ふは。卽はち等覺補處の大士にして。今より五十六億七千万年の後ちに出世し玉ふなり。依て菩薩處胎經に『佛彌勒菩薩に告げ玉はく。當さに知べし。汝ぢ復た記を受て。五十六億七千万歲ありて。この樹王の下に於ひて。無上等正覺を成せし。我れは右脇より生ず汝彌勒は頂きより生せし。我れが如きは壽百歲なり。彌勒の壽は八万四千歲ならん我が國土は土なり汝ぢの國土は金ならん。我が國土は苦なく。汝ぢが國土は樂ならん』とのたまへり。爾れば此彌勒大士は。今より五十六億七千万年を經て。人壽八万才の時鷄頭未城の中の。大波羅門に修梵魔と云ふあり妻を梵魔跋提と名く。彌勒既に兜率内院の天壽を沒て。此の梵广跋提の胎内に託生し。自然に誕生し身の丈け三十二丈にして。八万四千の相好光明の具足して出世す。衆生之を見るもの厭ふことなく。深く敬愛の心を生ずべし。其國に輪轉聖王ありて穠佉王と云ふ。十善を以て人民を化す。其地平正にして丘坑なし。人民快樂なること自在天宮の如し。樹なり其形ち金龍の如くにして。其樹上に花を開く。名けて

龍華樹と云ふ彌勒菩薩此樹下に坐して正覺を唱ふ。彌勒初會の說法に九十六億の人阿羅漢を得三十六億の天人八部無上菩提心を起す。第二會の說法に九十四億の人阿羅漢を得。六十四億の人天八部菩提心を起す。第三會の說法に九十二億の人阿羅漢を得。三十四億の天人八部菩提心を起す彌勒世に住し玉ふこと六万才なり。釋迦遺法結緣の衆生此時に得す。是れを龍華三會の說法と云ふなり（佛祖統記三十一可レ見）今念佛の行者は横超の金剛心を究むるゆへに。現生に等覺を成じ。臨終に初生卽極証大涅槃の大果報を得たてまつるは十一願の彌陀の約束。必至滅度の願成就なりと知らせたまふなり。

次に大涅槃とは。具さに般涅槃那と云ひ。此に翻じて寂滅と云ふ。爾るに小乘に於ひては。灰身滅智無餘沈空を涅槃と云ふ。大乘に於ひては。不生不滅を以て涅槃とす。故に今は小乘の涅槃ではなひ大乘无上の法によりて得る涅槃なるが故に。大涅槃と云ふ。其涅槃とは利他圓滿之妙位。无上の極果なり。卽はち阿彌陀如來十一願成就の御約束で。此度と云ふ此度ひは底下薄地の凡夫

の身ながら。此大果極位を得たてまつるなり。次に滅度と云ふは。滅はほろぼすと云ふ文字。度はわたると云ふ文字で。無始已來つくりとつくる。惡業煩惱の根絶やしをして。生死の苦海を度したまふとあるが滅度と云ふこと。是れに間違ひのなひ手丈夫なことを顯はして必ずとの玉ふ。今日我れらの手前には。生死を渡る手段もなく。出離の緣の切れたものが滅度のさとりを得させて下さるは。彌陀願力の働らき。御慈悲の手強いに引かれて。往かれる筈のなひ私しが。安養淨土へ往生を遂ぐるなり。管相蒸の歌に『東風ふかば香ひれこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ』と詠れたる物語りがある。昔し菅原の道眞公。時平の讒言に依りて。筑紫の大宰府へ流罪の身となり。配處に日月を送らるゝ中。春の陽氣になりたれば。寵愛の梅の木を思ひ出だされ。今頃は定めて美しい花が咲いたであろ。私しは流罪の身の上なれば。邊鄙の配處にわび住ひ。心をなぐさむる物もなく。寐ても覺めても西海の波の音。私れが留主でも嘸ぞ花は。奇麗に咲いたで有ろうが。せめて東風の便よりに香ひ

でもれてせよと。梅の花をしたはるゝこゝろの詠み歌。遥るか京都の錦の天神菅原公自邸の梅の木に貫徹して。一夜の内に彼の地へ飛ぶ。今に至るまで筑紫安樂寺の境内に殘るは。人々の見聞する處ろ。何と非情の梅の木には動くこともならねば。飛ぶことも叶はぬ筈なるに菅相蒸のまことが徹り。德力が顯はれて梅の木の西海へ飛ぶ如く。今の我らも無有出離之緣。迷ひを逃るゝ緣も疑き。生死を出つる手立ての無ひ。極重惡人罪人が等覺を成り。大涅槃を証るとあれば。是れに越したる不思議はなひ。彌陀の御慈悲が貫徹し。助けにやれかぬの念力が屆き。宿善開發時節到來して。信心の花を咲き。御恩をしとう春景色。報謝の稱名は喜びの香ひ。目出度く西岸の御淨土へ。越へ往く働らきの顯はれしは。必至滅度の願力の强緣に引き廻はさるゝ身の上と。大切に喜び味ふべし

如來所以興出世　唯說彌陀本願海

扨是より巳下難中之難無過斯といふ句までは。釋迦發遣の意を彰はし玉ふて。我れらが他力の大信心を獲たてまつるは。ひとへに二尊遣喚の御蔭げにして。卽はち。往けよ來れの勅命に引き立てられて。育だてらるゝなりと知らせたまふなり。依て御和讃に『釋迦彌陀は慈悲の父母種々に善巧方便し。われらが無上の信心を。發起せしめたまひけり』と仰せられ。又善導大師は『仰いで惟みれば。釋迦は此方より發遣し。彌陀は卽ち彼國より來迎す。彼には喚び此には遣豈去ざるべけんや』と仰せられた。然れば我れかしこくて信ずるにあらず。二尊の御慈悲に催ふされて。無上の信心を得たてまつる仕合である之れに依りて。銘文の御釋には『歸命はすなはち釋迦彌陀二尊の勅命にしたがひ。めしにかなふと申すことばなり』と御知らせ下さる。其釋迦發遣の御意ろを巳下の文段に彰はし玉ふなり。其中今この二句は釋迦如來さまが此娑婆世界へ御出世なされた御本懷一大事の本望を明し玉ふなり。先づ世間に於ても一世一代なりと申して。人間一生涯の一大事肝要たるところ。今釋迦出

世の本懐と申すは。一世一代ぞところではなひ。五百塵点劫の昔しから。娑婆往來八千邊とて度々御出世なさるゝ。其本懐たる所詮の大事は何事ぞと申すに。諸佛に捨てられ菩薩に見放されたる。十惡五逆の大惡人や。五障三從の女人。永不成佛必墮无間の凡夫が。其儘ながらたやすく助かる超世の本願彌陀の御慈悲を今時の我等に知らせたさ。底下薄地の泥凡夫が無願無行の元手なしで。安養无漏の御淨土へ。一足飛びの大果報を得させたひのが出世の本懐。これを如來所以興出世と禀し玉ふ。先づ如來と云ふは佛十号の一で。汎く諸佛にも通ずれども。今は正しく釋迦如來樣のこと。此釋迦出世の本懐につひては。諸宗の議論やかましひところなれども。我淨土の大無量壽經の上には『如來無蓋の大悲を以て三界を矜哀し。世に出興し玉ふ。所以は。ひろく道教をひらき群雨を拯はんと欲し。惠むに眞實の利を以てす』と說き玉ふ。然れば釋尊三界の群生をあはれんで。此娑婆世界へ出世したもふことは餘の義に非ず。本願一實の大道をひらひて。西方の淨刹に往生させしめんが爲めなり。

依て御和讃に『如來興世の本意には。本願眞實ひらきてぞ』とも『如來出世の本意なる。弘願眞宗にあひぬれば。凡夫念じてさとるなり』とも述べ玉ふ。爾るに法花經に一大事因緣と說て。佛五十年の御說法八万四千の法門ありといへども。四十餘年未顯眞實と申して。法花經八年の御說法こそ。佛出世の本懐なりと談ずれども。元來法は迷ひの衆生をして。開悟せしむる爲めなれば。一切衆生の其中に漏るゝものがありては。佛の大悲は滿足せぬ喩へば如何程結撥なる藥りでも患者に相應せず。病氣が快腹せねば益に立たぬ道理。法花一乘の妙法は結撥なる法門にもせよ。無知人中莫說此經とありて。智者や聖者には相應しても。無知な愚かな我れ等ごときの惡人女人は助かることがならぬ。諸佛の大悲は苦者に於て。心ひとへに常沒の衆生を愍れひとあれば。諸佛の慈悲は通惡無知の凡夫を助けたひのが腹一杯引風や頭痛の輕ひ病はなはりても。重病難症に利目が無くては詮がなひ。丁度病氣で例へたち智者や聖者は輕ひ煩らひ煩惱の邪氣も少く罪業の熱も輕ひ。病人自身で藥りを

煎じることも出來ひとりで立ち居の叶ふ病人ゆへ法華の藥能で全快もするが今日在座の我れ人は久遠劫來无明業障れそろしき重病永不成佛必墮无間の難症に惱み生死の床に寐がへりもならず諸佛菩薩の御手にも除り九死一生の大病人ぢやが自力は叶はず願行はなし迚も助かる御緣の盡た我れ人は彌陀の本願六字の妙藥でなければ本腹することはならぬかゝる大病人でも漏さず助かる法門なれば釋迦出世の本懷も常沒の苦者を憐み玉ふなれば唯說彌陀の一法にぞある實に天台の祖師でさへも此念佛の勝れたることを讃嘆して「阿字十方三世佛彌字一切諸菩薩陀字八万諸聖教皆是阿彌陀佛也」と釋し智者大師も御一生の間だは法花經を修してましたれども臨終には夫れを止めて淨土の觀經を誦し一向に念佛して往生を遂げさせられた亦た永明の智覺禪師も大德の方でありしが後生があきらめられぬとて天台大師の墓所に詣ふて〻祈願を込めさせられた時分に大師の墓印しを見れば淨土の觀無量壽經によりて西方の往生を遂ぐると書ひてあるによりて此觀經を披ひて見たまへば觀相の念佛と稱名念佛との二通り說ひてある。そこで大師の墓前に御願を取りたれば三度まで稱名他力念佛の御願が出た。夫より專ら念佛を信じられた。さあ同行中時は末法機は下根此樣かゝへて聖道門をながめても雲に掛橋霞に千鳥及ばぬ鯉の瀧のぼり如來出世の本意なる弘願眞實に打まかせ永の迷ひの暇乞今度かぎりに轉迷開悟の大果報を得たてまつるが何よりの仕合にぞある。

唯說彌陀本願海

釋迦如來さまが此土へ御出現なされた本懷の御用向は一切善惡の凡夫を隔てず簡ばず一味平等に助かる超世の大願彌陀の本願を今日の我等に屆けたさ知らせたひの外はなひ五百塵點劫の昔から亦しても〳〵も娑婆往來八千邊の御苦勞は餘の儀でなひ惡人女人が其儘助かる他力弘願の謂れを說きひろめ五濁惡時に生れたくれた我れ人を目出度安養の御淨土へ送

り屆けてやりたひの御慈悲なり。仍て唯說とは餘事を飾んでたゞ念佛の一法を說かせられたが出世の本懷說き手は釋迦說かれとは三千世界に比類のなひ超世不共の別願ぢや。扨彌陀の本願念佛の法門は相手の機類にゑらびがなひ智者でも愚者でも富貴でも貧窮でも貴きも賤しきも善人も惡人も男子も女人も分け隔てなく五乘齊入万機普益信ずる一つで佛けに成れる平等无差別の御慈悲ぢや。御和讃に「四十八願成就して正覺の阿彌陀となりたまふたのみをかけしひとはみな往生がならず定りぬ」衆生の爲めに十劫再成爲物の大悲をれてしたまひて。五劫に是れを思惟し兆載永劫に修行して。御成就なされし四十八願。一々誓願爲二衆生一故と。衆生のために御成就なされたのが彌陀の本願。夫に就ひて本と云ふに二通りの開れがあり。一には因本の義。二には根本の義。初めに因本の義とは。因本果成の開れにして此とさは佛の因願。四十八みなとゝく本願といはねばならぬ。次に根本の義とは。四十八願のそのなかに根本枝末が分れて。喩へば一本の樹木に根莖

枝葉のある如く。根は本にして枝葉は末なり。今四十八願の其中にれひて第十八願を根本とし餘の願を枝末とす。此根本十八願を高祖は開ひて十一十二十三十七十八の五願となし。教行信証の四法を建立し。玉ふ。喩へば彼の世間に名高ひ忠臣藏は。忠臣義士の面々一味連判の人數合して四十八人。其中に大將となり柱石となりて立てられたは。皆も承知の大石内藏之助ぢやも。しこの大石が無ければ。敵打の一味連判は調はぬ。彌陀如來四十八の大願も第十八の御誓願がなかつたら。凡夫往生の大仕事は成就せぬ。夫れでは五劫の御思案も水の泡。永劫の御修行も無駄骨折となる。然るに第十八の誓願を御成就なされ。一切の惡人女人をとゝく御助け下さる大働らきを超世の本願とも不共の別願とも名くるなり。扨この本願を海に御喩へなされたは彌陀の本願の深廣なることを顯はし玉ふ。依て經には如來智惠海深廣無涯底とありて丁度大海の際限なくまた底のしれざる如く彌陀の御慈悲にかぎりのなひことを知らせ玉ふなり。因みに佛涅槃經に海の八德を說き玉

ふて。一には漸々轉深の德。之れは淺深次第に順が立ちて淺より深に至るの德。二に深難得底の德と云ふは。深くして底のしれぬこと。三に同一鹹味の德とは衆水の海に入りて一味のうしはとなること。四に潮不過限の德とは滿干の潮に時限の違はざること。五には含藏衆寶の德とて。數限のなひ種々珍妙の寶らを含蓄すること。六には大身所居の德とて。大なる魚類の住居することと。七に不宿死屍の德と云ふて。穢れた屍を止めず皆な岸へ打寄せてしまふこと。八に不增不減の德と云ふは。大海の水には增減がなく。万流大雨の注入するともまさずへらざること。又十地品の中にも海に十相を說きてあり御本書の中に「海といふは久遠より已來凡聖修する所の雜修雜善の川水を轉じ。逆謗闡提恒沙无明の海水を轉じて。本願大悲智恵眞實恒沙萬德の大寶海水となす。之れを喩ふるに海の如しとなり」等。御和讃に「本願海のうちには智愚の波こそなかりけり。弘誓の舟にのりぬれば。大悲の風にまかせたり」彌陀本願の海の德には。智愚善惡の差別もなく。貧富貴賤のへだてはなひたの

ひ一念信ずる一つで弘誓の舟に乘せられぬれば。陸地の難行にひきかへて娑婆滯留の其内は浮世の夢は見ながらも子孫なんぞの事によそへて。可愛煩惱のきづなにつながれ。欲しや惜しやのやまひながらに。愛の息き一つの切れたとき。西岸上の御淨土へ到着して。大般涅槃の大果報を得たてまつるが。彌陀本願の他力の御手柄。これが釋迦出世の本懷と知ちせ玉ふ正信偈の御文。誠に寶の山に入りて此時にあひ。此機に相應する弘願他力に値遇して今度限りに迷ひ逃がるゝ萬劫の和事。生々世々の暇乞ひこれぞ我等が人界へ生を受けたる出世の本懷。身も受けがたく法も得がたし。一世一代のもうけ事取り誤まらぬこと肝要なり。

五濁惡時群生海　應信如來如實信

扨この二句は佛出世の本懷たる。唯說彌陀の一法を五濁惡時の我れ人に勸信し玉ふの文段なり。實に今時は。末法濁亂根機は下根下劣とも

れば。諸佛の悲願をたのみても迎も叶はぬ故に。一心一向に彌陀一佛の悲願にすがるより外はなし『何事も時ぞと思へ夏來ては錦にまさる麻のさゝも』上代正法の時機なれば。諸佛の御力らにも契ひ自力難行の修力をつみ智惠や功德や善根の綾錦はどがかさねでも。末法濁亂の今日此頃。如何程立派な教法はありても。時に契はず機に應せず『釋迦の教法ましませど修すべき有情のなきゆへに。証りうるもの末法に。一人もあらじと說き玉ふ』盲目らの垣のぞき嬰兒の河渡り。かなはぬのが今日の有樣。智惠の眼のとぢふさがり た旨目の我れ人。自力門の垣のぞきは無駄なこと。一文不知の底下凡地の幼子同前の凡夫人難行の大河は渡られぬ故。餘處を探すな尋ぬるな。偏へに彌陀本願を信せよとある御勸めぢや。箇樣にいふと我儘勝手の樣なれど。決して我田へ水を引くのぢやなひ。勝手な教へをするのでもなひ。三千年の其昔し釋迦如來さまの御見通しぢや。卽ち大集月藏經の其中に『我末法時中億々衆生起行修レ道。未レ有二一人得者一』と說かせられ『唯有二淨土一門一可二通入路一』と仰

せられたで。是程たしかなことはなひ。必らず〳〵疑ふな我れらが助かる御數へは。三千世界をたづねても又とあるまじ教へはなひ。扨五濁とは阿彌陀經に『劫濁。見濁。煩惱濁。衆生濁。命濁』の五つを御說きあらせられた。此濁と云ふは濁穢の義と申して。けがれたることを濁と云ふ。御和讃に『劫濁のときうつるには。有情やうやく身少なり。五濁惡邪まさるゆへ。毒蛇惡龍のごとくなり』と御示しなされて。末法今時の有樣は。惡邪增長のゆへに劫濁と云ふ。有情やうやく身少なりとは。劫減の時は段々に人身の長さが減縮して小さくなる。卽はち人壽八万歲の時より。百年に一歲を減じて。亦一寸を減ず。爾れば千年に十才を減ずれば。一尺身小となる。依りて二万才の時は二百丈。それが段々減じて人壽百才に至れば。人の身の丈け一丈となる。箇樣に時のうつるに從がひて。次第に漸々身小となるなり。次に見濁とは一口に申さば。我が身の惡しきを善と思ひ。人の是を非とする如き惡見を起す時なるゆへに見濁と云ふ扨この見濁は五利使が体となる。其五利使と云ふは。身見。邊見。邪見。見取見。戒

禁取見の五なり。扨てこの五利使のことを略して申せば。先づ利使と云ふは。利は鈍に對するの言にして。五利使に對して五鈍使と云ふがある。卽ち貪瞋痴慢疑のことなり。外道凡夫が利根なるまゝに此見を起す故に利と云ふ。この五つが行者の身心を驅役して。三界に流轉せしむるゆへに使と云ふ。言をかへて云へば煩惱のためにかりつかはれて。三界に迷惑し流轉するを使と名つく。扨て身見と云ふは。此身は四大五蘊のかりにあつまりたる。實体なきものなるを我見を募り。我ありと執するゆへに身見と云ふ。古歌に「ひきよせてむすべば柴の庵りなり。ほどけばもとの野原なりけり」で。假和合の身に執着を起す。今日世間の人に於ても此道理をわきまへず。假りの身に執着していつまでも生きのびんずるやうに思ふは。卽ち身見と云ふものゝ。二に邊見とは。是れに斷常の二邊見があり。人は死すれば斷无と云ふて。跡形もなく灰を散した如くに。四大五蘊離散して。未來も後世もなきものと思ふを。是れを斷無の邊見と云ふ。又人はたとひ死んでも。又餘生を感ずるものには非

らず。生々世々人は人なりとの執着をなす。是れを常有の邊見と云ふ。この有无の二見を邊見と云ふ。三には見取見と云ふは。外道が非想天に生るゝを涅槃と計するたぐひ。劣るを執して勝れりと思ふ。是れも世間に澤山ある。かゝる事に執着を起し。淺劣なる事を最勝と思ひ。浮世の取り留めもなき果敢なひ事を。此上もなき事の樣に思ふて。佛法にも後生とも氣の付かぬ族らが澤山あるが。みな見取見の仲間といはねばならぬ。四には戒禁取見とは。非因を因と思ひ執し。梵王の力らに依て梵天に生ると思ふ。自在天計の外道の類ひ。或ひは恒河に身を沈め。五熱に身をやき。或は雞狗戒などとて。鳥のまね犬のまねをなし。是れが生天の因と計する類ひ。總じて因に非らざることを因とこゝろへあやまるを戒禁取見と云ふ。是れも今日世上に於て。無益なる新願想念をこらし。病ひに醫藥を用ひず。貧者が家業を厭げみもせず。家相方位や吉凶禍福の卜占を執して迷ふは。皆なこの中間入りぢや。五に邪見とは。其餘の一切の邪僻の執着を邪見と云ふなり。次に煩惱濁とは前に示す五鈍使

の貪瞋痴慢疑のさかんなる有様を煩悩濁と云ふ。衆生濁とは劫末五濁の世となりては、衆生の作悪彌々増長盛んにして、身を穢がし生死の苦果を得るを衆生濁となす。後に命濁とは命ちの短縮するをいふ。御和讃に『命濁中夭剎那にて依正二報滅亡す』と示し玉ひて、中夭とは定命まで存へず中途にして死するを云ふ。須彌四州の中では、北州は定壽一千才にして中夭なし。餘の東西南の三州には中夭あり。喩へば油も盡き燈心もなくなりて、火の消へるは定命の如く、油もあり燈心もありながら、風の爲めに吹きけされ、顚倒して消へる等の如きは、中夭なり。剎那とは時節の極めてみじかきを剎那と云ふ。御文章に『たとへばかなきものはこの世の始中終まぼろしの如くなる一期なり』との玉ふ。是れ命濁のありさまなり。されば五濁は、即ち五時なり。此時に生れたる我れらを、五濁惡時の群生海との玉ふ。即ち煩惱深无底とありて、如惱の深きこと大海の如く、迷ひの廣大なること大海の廣きが如く、故に群生海といふ。御和讃に『五濁惡時惡世界、濁惡邪見の衆生には、彌陀の名號あたへてぞ、恒沙の諸佛すゝめたる』五濁惡世の今日に、一切世間の爲めに此難信の法を說く。甚難希有の妙法に遇ひ難くして、今已に遇ひ聞がたくして今すでにきく。喜の中の喜何事かこれにしかん。實とに果報自出度きことにこそ。世間に於て何月何日は何々と、年々かはる暦みに書ひた事さへ信ずるに、三千年もかはりのなひ佛語に虛妄なしとある。如來如實の御教說。時もへだゝり處もかはる天竺王舍城の大會の敎說。居ながら爰に我々は昌す〳〵聞きうる仕合せものと、大切に喜ぶべきことなり。

能發一念喜愛心　不斷煩惱得涅槃

扨この二句は、次上の勸信の如く、確說彌陀の二法を如實に信ずるの利益を明し玉ふなり。此句は源と唐譯の成就の文に『能發一念淨信歡喜愛樂』とある文と、流通の『能生一念喜愛之心』の文とに依りて、一念皈命の大信心發得すれば煩惱を斷ぜずして、大般涅槃の勝益を得することを知らしめたまふ

扨能發とは他力發起の義にして佛智より信心を發得せしめ玉ふことにて自力建立の信心ではなく彌陀如來の御方よりさづけます。他力の大信心なることを明す。即はち御和讃に『若不生者のちかひゆへ信樂まことにときいたり一念慶喜するひとは往生かならずさだまりぬ』と示し玉ふこゝろにして彌陀如來の御一念届けすばれくまひの御念力やりたひあたへたひの親心からじぶとひ根情の我等が胸へ眞心徹到のまことをあらはし玉ふなり仍て能發の能の字は能所對と申して能發はおこして所發はれこされて又阿彌陀如來は能化御座の我れらは所化たのひこゝろも念ずる心も凡夫の性根かられてるのでなひ能發のれこしてがありたればこそ信心發得するのぢや全体この能發所發と申すに就て二通りのあつかひありて如來の方を能發とし行者の方を所發とすればれこされての我れらが方には面倒造作はかゝらねどれこしての彌陀の御手元は並大体な御骨折ではなひ丁度喩へていへば大木が嵐しに倒されたを起すやふなものでれこされる

樹の方には起る力らもなければ動く働らきもなひがれこす方では大骨が折れる或ひは万力の器械でまき上るとか綱をかけて引き起すとか工風もいれば造作もかゝる今日御座の我れ人は曠劫已來光明の嵐しに吹き倒され迷ひの底へ落ちこんで動きもならず働らきもかなはぬ谷底へ倒れ込んだ大樹の如くぢやがおこして下さる彌陀の御手元では五劫の間だの御思案工風兆載永劫の御骨折りで大願強力の巻き上げ今と云ふ今こそは御慈悲のつなにからまれて引き起こされ皈命の一念發得したのが他力の御力ら これを能發一念喜愛心とは仰せられた次に佛の方を所發としわれらの手前を能發とすればれこす方には造作は入らぬが起される方は大骨折ぢや喩へば頑是なひ子供に手柄をさせたひため親の方に何も彼も仕上げて子供に功をゆづるが如く子供の方は親の言付け通りでよいのぢやがさせる親の方では大氣遣ひぢや今も其の如く元とたのませてたのまれたもふ彌陀なればたのむこゝろもわれとれこらずとある如く行者の方に信

心をれてすは彌陀の御はからひぢや。發起する我れらの方には何の造作も入らぬ。唯た如來の勅命を具受けにし仰せのまゝになるばかり。然れば彌陀の方は能發に約しても。所發に約しても大骨折り。我れらが手前は能發に約しても。所發に約しても造作も苦勞もいらぬ。今は能發を他力と知らせ。佛の方よりれてさしむるてゝろなれば。御文章にも仰せらるゝ如く。信するてゝろも念するてゝろも。彌陀如來の御方便よりれてこさしむるものなりとおもふべしで。自力の計ひの入らぬのが能發とある味ひぢや。高祖御本書に「信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起する」と仰せられた。次に一念喜愛心とは。大經成就の御文に「聞其名号信心歡喜乃至一念」と說かせられて。即はち開信の一念なり扱この一念に付て信の一念。行の一念と云ふことがあり、て。信の一念とは本願のいはれをきゝひらき。たすけたまへとたのむ皈命の一念のこと。行の一念とは一念二念三念乃至十念百念と。自然と多念に及ぶ稱名相續のこと。今は信の一念にしてこの一念は二念三念あることなく

臨終まで貫徹する一念一心のこと。これにつひて御開山の御釋に二通りがありて。一には時剋にやくしして。信樂開發の時剋の極促を一念と云ふ改悔文にたのむ一念の時とも。又御和讃に「金剛堅固の信心のさだまるとき」とも。又「信樂まことにときいたり」とも仰せられて自力のすたるとき他力の屆くとき。暗みのはれるとき。彌陀のたのまれたとき勅命のきこへたとき往生のさだまるとき。是れを一念の時と云ふ。依て御文章に「一念を以ては往生治定の時剋とさだめて」等と仰せらるゝ。次に心体に約して信心二心なきがゆへに一念と云ふ。此御釋では一念と一心とを同じことにあらはしたまふなり。少しでも自力のくさみがありては一念とはいはれぬ。露ちりほども疑ふてゝろ。あやぶむ心二の足ふむ心のあるあひだは一念とはいはれぬ。如來眞實の御心を增さず減らさず其儘に御受けの出來た如實の信を一念の淨信と云ふ。夫れにつひて世間に異解者ありて。一念の時とあるに固執して。年月日時の覺知を詮議し凡夫心にたしかなる覺知の有无を沙汰するやからあり。大

ひなる誤りなり。兎も角も他力に任せ奉るうへは。凡夫の計らひは無益なり凡夫の迷心に於ひて覺不覺の沙汰に及ぶべき。唯佛の御はからひを仰ひで信ずるの外なし。年月日時の覺不覺を論せず。往生は佛の方にて治定せしめたまふ上は往生一つに疑ひはれ。御助けありつるかたじけなさ。うれしさの御恩を喜ぶ外はなし。何月何日より春と日時のわかへはなけれども軒場に香ふ梅が枝に囀づる鶯の聲きけば。言はずとしれた春氣色。年月日時の覺知はなくとも。御恩報謝の軒端に香ふ信のにはひのあらはれで。御慈悲の梢へに南无阿彌陀佛〳〵とよろこぶうれしさの聲きけば。往生治定の身の春氣色。うれしさをむかしは袖につゝみけり。こよひは身にもあまりぬる歡喜愛樂の喜愛心。身もよろこび心もよろこび身心悅豫の日暮しが。信の行者の仕合にぞある。

不斷煩惱得涅槃

此句が正しく他力信心の得益にして。先づ自力聖道門の修行で申さば。煩惱を斷せねば涅槃はゑられぬ。依りてこの煩惱を斷盡せんとて。骨を折るのが自力の修行。煩惱無邊誓願斷とて。四弘誓願の一つぢや。處ろがこの煩惱は觀經の上にも。八万四千の煩惱とありて。仲々澤山なことぢや。これを煩惱深無底と釋してある。其上煩惱は家の内の鼠の如く。追ひ拂ふても〳〵とても容易にはなくならぬ。見るにつけ聞くにつけかやにつけ喰ふにつけさはるにつけ起りやすひ物ぢや。其煩惱を滅ぼす爲めに六度萬行をつとめ。先づ布施の行を修しては。貪欲の煩惱を對治し。乃至智惠波羅蜜の行をつとめては。愚痴の煩惱を拂ひ。修行の功をつみ功德善根の元手をこしらへ。三僧祇百大劫の年月を重ね斷惡証理の道を歩むが。自力難行の聖道門ぢやが。其上修行しかけて功をつんでも。一念の煩惱が起れば其修行は悉皆無になる。何んと難儀な事ではなひか。夫れについて昔し永明の智覺禪師が。或る時山中を通行いたされたるに。日没の頃谷間の方に人の泣き聲がする。扨怪しかる事よと能く

が聞き玉へば。扨殘念や口惜しや惡ひ盜賊に出合ふて。年頃日頃たくはへた
る財寶を奪はれしことの悲しやと。泣きさけぶ聲が聞へるゆへ。智覺禪師も
不便に思召され。扨ては山賊に出合ふたさふな氣の毒の事よと。聲を便より
に道をつとふて谷間に御下りなされたるに。年頃七十有餘の老僧が石の上
にて。さめ〳〵と泣ひて居らるゝ故に。其元は盜人にでも合はれたさふなが
扨も氣の毒な事ぢやが。別段身体に怪我でもなさりはせぬかと御尋ねなさ
れたるに彼の老僧答へて云ふには。去れば私しは斷惡証理の法に依りて煩
惱を斷じ菩提を求めんが爲めに浮世を遁れ此山中へ引き籠り。三十年來難
作能作の修行をつとめ。善根功德を積みたるに。悲しい事には只今一念の妄
心が起り。此妄念の盜人のために年頃日ごろ積んだ善根功德の財寶を皆ん
な奪ひ取られ。其口惜しさ悲しさにかくは歎くので御座るを。涙だを流して
物語りたれば。智覺禪師も其々法衣の袖をしぼられたとある爾れば聖道門
自力の修行は誠に六かしい。依て三代目覺如上人の式歎德の御文にも「斷惡

証理愚鈍の身成しがたく。卽成覺位末代の機覩びがたし」と仰せられた丁度
喩へて申せば。一年も二年も乃至五年七年の年月かゝりて拵へた大堂伽藍
も一朝火を付けると。半日の間に燒き亡ぼして仕舞ふ。今も自力の修行は其
如くぢや何んと同行衆此の物語りを聞くに付けても喜こばねばならぬ。他
力本願の有難さは不斷煩惱得涅槃。其の妄念煩惱はいかはぞありとも更に
目を掛けず罪障の重荷は持て居ながら。能發一念彌陀たのむ皈命の一念が
發起すれば捉へた煩惱も持た罪も阿彌陀如來の御手元で殘るところもな
く消滅と亡ぼして下され。我等が方はぬれ手で粟のつかみどり。一毫未斷惡
の其儘で。大般涅槃の御証りをひらかせて下さるのが彌陀超世の御本願他
力攝生の御手柄ぢや。爰の御文章に「無始已來つくりとつくる惡業煩惱を。の
てるところもなく願力の不思議をもて。消滅するいはれあるがゆへに。煩惱
を斷せずして涅槃をうと。いへるはこのこゝろなり」と御意あらせられた。然
れば我れらが方は。唯かゝる機までも助けたまへる御佛けは。三世に一佛恒

沙に一休。彌陀より外にましまさぬと存ぜられたら。助すけ玉へとたのむより外はなひ。更らに機の方の有様に目をかけず。こんな根情ではあんな機ではと。己れが方に氣遣ひやうて。彌陀に任せる一つで。今度はかならず御助けに間違ひはなひ。彼のつるし柿やころ柿などは。愚かに考へると此の容に甘い柿は。木になりてあるときは猶ほ〳〵甘かろうと思へども。左樣ではなひ甘柿をつりぼしにすると。直ぐに腐りて仕舞ふて何の役にも立たぬ。澁柿の中でも至つて澁の強い柿を。皮をむきてつりぼしにして置くと。其澁が日光に照されて。澁が其儘甘い味になる。今阿彌陀如來の御本願も。智者聖人の五所柿みるやうな澁氣のなひ。善人が參るのかと思へば左樣ぢやなひ。本爲凡夫とあるからは。吾らがやうなる煩惱惡業の澁柿を。御教化の小刀で疑心自力の皮むひて。心光常護の御照しにあひ奉れば。罪障功德の体となり。煩惱卽菩提にて轉惡成善の甘味を知らせ玉ふが彌陀の本願。少しも自力の造作は入らぬ。我身のつみのふかきことをばうちすてはとけにまかせまいらせて

一念の信心さだまりなば不斷煩惱の此儘で。大般涅槃を得たてまつるに間違ひはなひ。

凡聖逆謗齊廻入　如衆水入海一味

扨この二句は。彌陀の本願は五乘齊入萬機普益にして。更に相手の機類にれ簡びがなひ。凡夫も聖者も逆謗の罪人も。廻心皈入すれば一味平等に助かる謂はれを知らせたまふの文段なり。先づ凡と云ふは今日御座の我れらがやふなる機類を凡夫と云ふ。聖とは聖者とも聖人とも云ふて。智惠もあり修行戒行も勤まる。善根功德を持て御いでなさる立派な方々のこと。逆謗とは逆は五逆。謗は謗法の大罪のこと。扨この五逆罪につひては。大乘の五逆と小乘の五逆との二通りがありて。先つ小乘の五逆と云ふは。一に父を殺し。二に母を殺し。三に羅漢を殺し。四に和合僧を破り。五には佛身より血を出す。此の五罪を五逆と云ふ。卽はち恩田に背き福田に違するの罪なるゆへに逆惡と云

ふ頭らに頂き背に負ふて孝行すべき。大恩ある父母を殺害し尊重敬恭すべき聖者を殺すは。みんな逆さまごとぢやゆへに逆と云ふ。又大乘の五逆罪と云ふは。一には塔寺を破壞し經藏を焚燒し。及び三寶の財物を盜む二には三乘の法を謗り聖教に非ずとし。障破留難し隱蔽覆藏す。三には一切の出家の人に於て。もし有戒无戒持戒破戒打罵し。詞責して過を說き禁閉し。又は還俗せしめて駈使し斷命す。四には殺父害母出佛身血破和合僧殺羅漢。五には因果を撥无し。長時に十不善の業を行す。是れを大乘五の逆罪とす。如是大小乘のかはりはあれども。皆是れ決定必定して。無間地獄へ墮するの罪業なるゆへに。又は五無間業と云ふ。次に謗法と云ふは三寶を誹謗するの罪にして論註に御示しなさるゝ如く。佛もなく法もなく菩薩もなく菩薩の法もなく凡ての佛法をそしる罪ぢや。是れに付ひても能々心得ねばならぬ。兎角世間に佛法雖聞の身でありながら。他宗他門の誹謗する輩がある。是れは我御開山の殿しい御戒しめぢや。己に中興上人も龍樹菩薩の智度論を引て。自法愛染故毀咎他人法。雖持戒行人不免地獄とて。呉々も御いましめがある。釋迦如來の御在世に提婆達多と云ふ人は。自作の三逆教他の二逆。合して五逆の大罪を造られた。先づ阿闍世太子に教へて父母を殺させ。又新學の比丘を五百人迄で盜んで。象頭山と云ふところへ往き。五種の邪法を弘めたるに。舍利弗目連の神通に依て八正道の正法を說いて。五百人の比丘を佛處に引き戻されたを怒り。如來を殺害せんとて大盤石を投げ付ければ。朱金神と云ふ山神顯はれて。中間に之れを受け玉ひたれば。石は微塵に碎け一つの欠けが佛の御足にあたり。佛足より血が流れた。其やふに佛けを怨敵の如くにせらるゝ故。羅漢の比丘が異見をなされたら。拳しを振り上げて比丘の頭まを打碎きて殺された。如是の五逆罪を造られた故。大地が割れて猛火燃へ上り。生きながら无間地獄へ落られたとある。次に謗法罪は佛の御在世で云へば。愚經といふ御經の中に說かせられし因緣には。昔し佛御在世の時一人の女人ありて。其子に婆羅門ありけるが。或時此婆羅門佛弟子と論をなし大ひに敗

ければ。其母大ひに立腹して。子に教へて佛法及び僧寶を謗らしめたる過にて。母子共に畜生道の苦患を受けたとある。斯の如く五逆謗法の大罪なるに。雖有は彌陀の本願念佛の一法ぢや。凡夫も聖人も五逆も謗法も齊しく廻入すれば。衆水の海に入りて一味なるが如し。善きも惡きも隔てなく地獄に墮ちて苦しむ我れらを。極樂に參らせたのしませるとあるが。只今の御文句ぢや。齊廻入とは。齊は齊等と申してひとしと云ふこゝろ。去れば此世の有樣こそ凡聖逆謗の差別もあり智愚貴賤貧福男女の違ひはあれど。共に廻心皈入して。佛願に乘じ極樂に往生すれば。齊しく諸上善人供會一處一味平等かはりのなひ彌陀同体の御証りを開かせて下さるは。丁度河々の水が大海に流れ込で。一味となるに同じとある。依て御和讃に『彌陀智願の廣海に。他力の信水いりぬれば。眞實報土のならひにて。煩惱菩提一味なり』とも又『名号不思議の海水は。逆謗の屍體もとゞまらず。衆惡の萬川皈しぬれば。功德のうしはに一味なり』とも仰せられた。扨夫れに付て不審なのは。第十八願に唯除五

逆誹謗正法と說て。十方衆生のなかにも。五逆のものと謗法のものとは。本願の除きもの助かることは叶はぬとあるに。御開山樣は如何なる思召で。凡聖逆謗齊廻入。如衆水入海一味と。仰せられたるぞと云ふことを聽聞せねばならぬ。是れは御開山の自身流義で仰せられたのではなひ。近くは善導大師の御判釋に謗法闡提廻心皆往とありて。謗法も闡提も廻心すれば。皆な御淨土參の叶ふと云ふことぢや。源と觀無量壽經に於て。下々品の往生人は。今の五逆十惡具諸不善とある大惡人ぢや。故に御文章には『釋迦韋提調達闡世の五逆をつくりて。かゝる機なれども不思議の本願に皈すれば。必ず安養の往生を遂ぐるものなりと。しらせたまへりと知るべし』と仰せられた。是れが抑止門攝取門の謂れにして。爰を善導大師は。未造業已造業と分けて。大經唯除の抑止は未造業とて。まだこの大罪を造らぬものに對して。造りてはならぬぞと誡しめ玉ふ。觀經に於て五逆十惡具諸不善の惡人が往生を遂ぐるは攝取門已造業に對して。廻心さへすれば助かる謂れを知らせ玉ふ。近ふ喩へて申

せば。大經の抑止は父親の如く。觀經の攝取は母親の如くぢや。古歌に「父はうち母は抱てかなしめば。かはるこころと子や思ふらん」と詠める如く。大觀二經攝抑二門うつと抱くの替りはあれども。親の御慈悲に隔てはなひ。如來水入海一味とは此いはれなり。

攝取心光常照護

扨これよりは心光常護の御利益を御明しなされて。此一句は觀念法門の「彼佛心光常照護是人攝取不捨」の文に依り玉ふ。誠に念佛の行者は現生に於て一念皈命の信心決得すれば。其場から晝夜十二時に。彌陀如來の光明の御照らしにあづかる。故に貪愛瞋憎の雲霧つねに絶へ間はなけれども。御廻向の御信心に障りはなひ。不斷常住に相續して極樂に往生を遂げ奉つることを御念頃に御催促なされたが只今の御言ぢや。御和讃に『金剛堅固の信心のさだまるときをまちにてぞ。彌陀の心光照護して。ながく生死をへだてける』と

仰せられた。然れば他力回向の御信心がたしかに貰はれさへすりや。其場から光明の懷ろに攝め取られ。丁度網に掛りた魚の如くどれはどあがひても。もがひても出る事のならぬやふに。彌陀如來の攝取の光明にれさめとられまいぢせたらん。身はいかに我はからひにて。地獄へ落ちんと思ふとも地獄へは落ちずして。極樂へまいるべき身なるが故なりと。是非〳〵淨土へ往かねばならぬのが。攝取不捨の御利益に預た身の仕合せぢや。愛を證文に「不捨といふは信心のひとを。智慧光佛の御こゝろにれさめまもりて。心光のうちにときとして。すてたまはずとしらしめんとまうす御のりなり」と仰せらる。此の攝取の心光は。晝夜十二時に問斷なく念佛の行者を守りづくめに御照しなさるゝゆへ常照護と云ふ。扨この常の字に。無間常相續常と云ふ義があり。て。御和讃に「煩惱に眼さへられて攝取の光明みざれども。大悲ものうきことなくて。常に我身をてらすなり」とありて。我等が方は煩惱に眼さへられて日夜に御照し下さる光明の御相たを拜まねども。一度不足を仰せられもせ

す。念佛の行者を絶間なく御照し下さるが無間常と云ふもの。次に相續常とは。御和讃に「金剛堅固の信心は。佛の相續よりたる。他力の方便なくしては いかでか決定の心をえん」兎角行者の方は忘れがちになれども。心光常護の御守りで彼方の御慈悲に間斷がなきゆへ。法義相續のよろこびに障りなく目出度往生の素懷を遂げたてまつるなり。一寸喩へて云へば。世間でも子供を留主居に置ひて他行するときは。近所の衆をたのんで。何卒御世話ながら氣を付て下されと頼めば。たのまれたものは常住姿はそばに居らずとも。心に油斷なく氣を付て居る故へ。さあ火事とか盗難とか申す場合には。怪我させぬ樣過ちのなきやう取りさばきをする。是れは人間同士でさへも。たのまれたからは氣を付けるのぢや。今阿彌陀如來の御守りも常照護とありて我等がやうなる頑是のなひ幼子同樣の凡夫を。晝夜不斷に絶へ間なく氣を付け守りて下さるゆへ。淨土參の邪魔物になりさうなる。疑心の火事やら雜行雜修の盗難にも怪我過ちのなひやうに御守護下さるのが。心光常護の御陰

げぢや。昔し南都に一羽僧都と云ふ。大德の僧があられたが。禁裏に於て勤まる維摩講會の導師を照圓と云ふ人に先を越された故。さすがの一羽僧都も何となく面目無く思召。大衆に面を合すに耻つかしく。此上は古郷へ皈へり山奥へでも引き籠り。後世の菩提を營まんと。東の方へ皈へらるゝ途中。尾張國の熱田と云ふ處にて。明神の社殿に一夜を明して御座ると。夜の寅の時とも思ふ時分。ふと目を開けば枕元に衣冠正しき俗人が坐して居らるゝ。故其元は何人なるぞと尋ねさせらるゝと。彼の俗人答へらるゝには。我れは春日明神なり。維摩講師は帝釋天の御定めで。照圓一羽。義宗と順番がある故。照圓が先へ回られた。仍て其元は我れを見捨てゝ東國へ下らるゝが。我れは其方の道心に離れ兼ねて是迄付て來たぞよと仰せられければ。一羽僧都は涙にむせび夫よりまた南都へ立ち皈へり。道心堅固につとめさせられたと云ふ事を。西行の選集鈔の中に書いてあるが。今阿彌陀如來の御慈悲が丁度その通り。一念の御約束で淨土參りの。人數の中に加はりながら。吾等が方では

忘れ勝ち。往生いかゞとあやぶむ氣が起りたり。これではあれではと二の足を踏み兼ねぬ機ゆへに。心光の御照しで喩へ逃げても隱れても。彼尊は此身に離れたまはず。彼此三業不相捨離。御護りづくめの御慈悲を常照護とは申すなり。

已能雖破無明闇　貪愛瞋憎之雲霧　常覆眞實信心天
譬如日光覆雲霧　雲霧之下明无闇

扨此五句は伏難を通ずると申して。念佛の行者心光に攝取せられ。常に照護したまふと雖も。元來煩惱具足の身の上ぢや故。娑婆逗留の其間は貪愛瞋憎と。だしやはしやにくやかわいやの煩惱の雲霧がれこりて。眞實信心の天を覆ひかくす故。若しや是れではとあやぶむ心の起りはせぬか。又は光明に常に照護せらるゝがまことなら。煩惱の起る筈はなさそうなものなどゝ氣遣ふこゝろの起るをば。決して案ずるに及ばぬぞよ。三毒の煩惱にしばくれこれとも。眞との信心はかれらにもさへられず。とあれば雲にも霧にも覆はれながら。信心には疵のつかぬ金剛不壞の手丈夫なところを。御念頃に御催促なさるゝが今の文句ぢや。然れば我らが胸の內は今の御教化の如く。貪愛瞋憎の雲霧しばらくも絕間なくはしいがやめばれしいがをこり。可愛がやめば憎いが起る。親にも子にもいはれぬ濕間敷い根情ぢや。爰に難有ひはかゝる煩惱の雲霧に覆はれながらも。御廻向の御信心には疵もつかず。此一念臨終まで貫徹して。此息き一つの切れた時。絕息閉眼の夕べには。大般涅槃の御証りを開くに露ちりはども疑ひのなひは。念佛行者の身の上である。扨已にとは。未だと云ふに簡ぶの言で。御信心の得られぬ者に對して。已でに得られた行者のことを顯はしたまふ。能くとは光明の御力ちで。能く无明を照破し玉ふことを能くと云ふ。然れば彌陀の御光明が少しでも不能なる事がありては。能とはいはれぬ世間の上でも未熟なる藝を。能とはいはれぬ道理ぢや。御和讃に『無明の闇を破ずるゆへ智惠光佛と名つけたりと』仰せられた。雖

の字は縦奪の詞と云ふて。俗に云ふけれども。貪愛瞋憎の雲霧は覆ふけれども。今く无明の闇をやぶらせられたけれども。貪愛瞋憎の雲霧は覆ふけれども。今の御信心には障りはなひゆへ。是れを下の句に日光の御譬を以て御知せなさるゝ。古歌に『彌陀たのむ人は雨夜の月なれや。雲晴れずとも西へこそゆく』十五夜の滿月が村雲に隠れながらも。次第〳〵に西へ近づく如く。貪愛瞋憎の村雲に覆はれながらも。眞實信心の滿月は一日暮ぜば一日だけ。一夜あかせは一夜だけ。淨土參りが近づく斗り。一寸でも娑婆の迷へ。跡戻りはせぬ。水の低を流るゝ如く息き切れ次第には。眞實報土へ落ち込むに極まりて居る。爰を善導大師は二河白道の御譬を以て。弘願の信心を御守護くださる。次に无明の闇とは。吾等が胸の内は智惠の明りが少しもなく。眞黑闇の有様を千歳の闇室と御喩へなされ。又御開山は略書の偈に。无明大夜闇と仰せられ。御和讃には无明長夜と知らしめたまふ。扨この无明の事は中々八ケ間敷ことで。大小乘の處談一樣ならず。或ひは根本枝末に約し。或は界内界外に別て種

々の解釋がある。今御當流の上でも古來疑惑を体として。无明を談ずる說と愚痴を体として无明を談ずる說とがある。何れにもせよ疑ひは愚痴に依りて起る。佛智を疑惑するは已れが愚痴にして。智明なきが故に疑ひが起る。然れば疑惑と愚痴とは不離なるもの。火なるが故にあつい。熱いは火の用なり今も愚痴は疑ひの体となり。疑惑は愚痴の故に生ず。疑惑のうたがひは愚痴の用きとなるゆへに。佛智に向ふて邪魔をなす。然るに无碍光如來の名号は能く衆生の无明を破す。又御開山は『無碍の光明は。无明の闇を破する惠日なり』と仰せられ。疑ひも愚痴も阿彌陀如來の光明名号の御力ちで。悉く破られ信ずる立處皈命の一念に。阿彌陀如來の御智惠が滿入する故に。智惠明達して大利を得と說き玉ふ。喩へば日出でゝ法界の闇頓に晴るゝが如く。又は明燈の闇室に入るが如く。明來闇去明來で。闇の晴ると明るくなるとは同時ぢや。又信心得るも疑ひはるゝも一時にして。歸命の一念に佛智圓滿の智慧を得たてまつるなり。

其二

次に貪愛とは。貪は貪欲愛は愛着で。染着を性となし順境に於て起る煩惱なり。瞋憎とは憎悪を性と爲し。逆境に於て起る。然れば已れが心にかなひ順ふものは。愛着執心して染まる。卽はちいとしやかわひやはしやおしやの煩惱を貪愛と云ひ。已れの心にさからふものは。瞋恚憎疾してにくみきらふ心の起る煩惱を瞋憎と云ふ。扨この无明貪瞋の煩惱は。我れらが胸の内に絶へまはなひ。元朝五更のあかつきから。節分除夜の大晦日に至るまで。一年三百六十五日昨日も地獄の種ね拵へ今日も無間の下繕ひ。目に見ては執着を起し。身に觸れては貪愛を催し。舌に味ひ耳に聞き鼻に香ぎ心に思ふ。身口意の三業にすることなすこと。惡因に非ずと云ふことなし。紙一枚霧一つに至るまで。執念の淺間敷ひは今日の我れ人。若しも此根性が往生の邪魔になるとありたら。一人も佛けになるものはなひ然るに他力の本願は煩惱具足と信知して本願力に乘ずれば障り多きに徳多し罪障功

徳の体となり。不斷煩惱得涅槃罪も障りも。我れらが方には其儘で。阿彌陀如來に任せたてまつり。信ずる一つで間違ひなく。卽はち穢身すてはてゝ。法性常樂の淨刹に往生遂げたてまつるは。ひとへに願力の不思議に極まる極惡最下の機のために。極善最上の法を說く。貪愛瞋憎の雲霧が常に。眞實信心を覆ひ隱すかと思へば。如來の攝取の心光が常に照護したまひ。煩惱が起るは光明も常に御照らし下さるゝと。信機信法を底に含めて。御念願なる御能促ちや。眞實信心とは如來御回向の信心。凡夫のわろきこゝろにてはたすからず。如來のよき御心が衆生貪瞋の心中へ。徹到して下されたを眞實信心と仰せらるゝ。此他力より御回向の大信心は。煩惱を止めて清淨な心になりてから頂く信心ではなく。如來の作願をたづぬれば。苦惱の有情が大悲の御目的惡人凡夫が彌陀の正客欲が起り腹が立ち有るは無ひはと。起る煩惱を其儘だいて。此機の儘の御助けは無我に御慈悲を信ずるより外はなひ。依て善導大師の二種深信の御教化からいたゞけば。我身の現にこれ罪惡生死の凡夫

曠劫已來常沒流轉出離之緣の盡た身の上取りねのなひあかぬ機と見限りかゝるものを御助けと仰ひで本願を信ずれば定めて往生を得ると知らせたもふ然れば衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心この機のありて彌陀たのめ罪ふかく如來をたのむ身になれば法のちからに西へこそゆけ喩へば樵兵衛と八右衛門との家は隣り同士で垣一重が境ひぢや日々たまる塵芥を裏の捨場へ積んで置く或日樵兵衛が裏の芥捨場へ往て見れば塵芥の中から大きなる南瓜が生へて居るゆへ扨ては不思議なことぢや此芥捨場へ蒔いた覺へはなし どうした譯かとさぐりて見れば此方に覺へが無ひも道理隣りの八右衛門の裏畠から垣根をくゞりて生へてれる南瓜であつた 今も其如く我れらが胸の中は朝から晩まで貪瞋煩惱の起るありさまは丸で塵捨場も同じこと 其煩惱の芥捨場の中へ清淨眞實の信心の南瓜が生へて居るは自身で起した覺へはなし 如何なる事ぞと御法義の蔓を引いて見れば發願廻向の垣根をくゞり阿彌陀如來の御慈悲の畠から傳ふて生へて下さ

れた 他力の大信心と云ふことは今こそ明らかに知られたり

扨眞實信心を和訓してよめば まことのこゝろと云ふこと 眞と云ふに二色はなひ 然るに今この偈文の一句に眞實信心とまことゝ云ふ字を三字迄重ねて知らせ玉ふたは 一字々々に相對するところがある 先づ眞の字は僞に對する字でいつはりならぬ似せものでなひのが眞の字の意 ろ同行の手前で云へば 或ひは名聞或ひは人並み 表面ばかり眞とのやうに見せかけて 眞の喜びの無ひことぢや 夫れでは淨土祭りは叶はぬ 眞の小人は國に害なく僞りの君子は國に害あり と古語にも云ふ如く たとひ善ひ事でも僞りの善は好しからず 御法義の上でも似せ同行 僞りの信者は大なる障りとなる 故に御開山は嚴しく御戒めなされてある 牛盜人といはるとも 佛法者後生者と見ゆる振舞ひをするなと示し置かれた 能々つゝしまねばならぬ 次に實の字は虛に對する字で 虛と云ふは內に品物のなひこと 俗にからつぽと云ふことぢや 喩へば瓢簞のやふな物で 外は堅く見へても內はからつぽぢや

とつひ破れやすい今實の字は外も内も實の一杯充滿してある意ろ丁度其如く外から見たところでは肩には肩絹手には珠數殊勝な相だで堅さに見へても御信心の賞はれて居らぬ心の内の空虛な人なら瓢箪同行と云はねばならぬ如何程難有さうに稱名は唱へても實のない稱名なら空鐵砲と同じこと彼の後藤又兵衛と云ふ人は鐵砲の名人であつたが或日泉の三郎の家に於て酒に醉ひ倒れ前後不覺に寐て仕舞ふたれば泉三郎鐵砲引き下げ隣り座敷でどーんと一發其響きに又兵衛眼をさまし飛つくと起き音の響き工合で扨ては今のは空鐵砲ぢやと知たとある是れ通常の人ではわからぬが鐵砲の名人と云はれる又兵衛ゆへ丸のあるなしを音で聞き分けた今も其如く佛祖の御前にひざまづき殊勝な相だで異口同音に聲高々と唱へて居る時は難有ひ同行の樣ではあるが凡夫同士は夫れでも濟むが阿彌陀如來は能く御存じ如來樣を欺くことはならぬ野原村里に咲いた梅の花でも眞實の花なら必らず香ひが具はる。わづか一輪か二輪杖の先へ開ひた

のでも香ひのあるのは本の梅ぢや。如何に數々花を付け枝振をこしらへ美麗に見へても造り花には香ひがなひ問はれてもいはれぬ香ひの備はるのは本物の花ぢやが香ひはと問はれ困まる作り花賀のなひ同行不實なる喜びては往生は叶はぬ。三に信の字は疑に對するの言法然上人は『生死の家には疑を以て所止とす』と仰せられ御開山は御和讃に『流轉輪廻のきはなきは疑惑のさはりにしくぞなき』と仰せられた前々から申す如く疑ひは无始已來生死輪廻の根になるはどに疑ひなく御助け一定往生治定の領解に基けよとの御催促ぢや此世一世は似せもので通りもするがまこと出かける未來は似せものでは通られぬ次に天と云ふは持地論に清淨を天とすとあり先づ此天と云ふは今の眞實信心を御喩へなされたので天には三義がある清淨の義と白然の義と眞實の義とがある文類の偈には清淨信心天とある是れは清淨の義卽ち信は澄清の義と云ふて濁り氣のない清淨无垢なるを信と云ふ故に龍祖は『信心清淨者花開卽見佛』と仰せられ善導大

師は『清浄願往生心』と述べたまふ。次に自然の義とは天然自然の道理なぞと申して更らに凡夫の計らひを用ひず、佛力の稱らしひるを自然と云ふ。信は願より生ずれば、念佛成佛自然なり、自然はすなはち報土なり。証大涅槃うたがはず」の道理なり。三に真實の義とは、虚偽りのなひことを顕はす。即はち真實信心天の譬れなり。已下の二句は此御信心が貪愛の雲霧に覆はれながらも少しも障礙なく相續することを、日光に照へさせられての御教化なり。喩へば一念帰命の所が永の迷ひの夜の明け塊ずなはち日輪が出させられた故に夜が明ける。今も他力真實の信心の日輪が衆生貪瞋无明の胸の内へ出させられたゆへ、无明長夜の疑ひの闇みが晴れる。然るに夜が明けても雨天なれば雲霧に覆はれて日輪は拝めぬ。日輪は拝めねども黒白を辨ずる如くぢや。故に御開山は銘文に『日月のくもりにはれども、やみはれてくもりのしたあかきがごとく、貪愛瞋憎のくもりに信心はおほはるれども往生にさはりあるべからずとなり』と仰せらる。我れらが胸の内は貪愛瞋憎の雨天なれども往生極楽の道に迷はず明らかにして間みなく貫徹するは、一重に攝取心光の御守りに絶へ間がなき故ぢやと知らせ玉ふ。是れが心光常護の御利益と云ふもので、衆生の方は忘れても彌陀は忘れ玉はず。我が方にわするゝ隙のわほけれども、ちかひて彌陀の身をば離れず。光明てらしてたへざれば、不断光佛となづけたり。聞光力のゆへなれば、心不断にて往生すたのむ一念の立處に光明の懷ろに抱き込まれ、攝取の蒲團に大悲の手枕、弘誓の衣服あたゝかに、心光常護の御利益に預かり、何日何時露の命ちは消ゆるとも、一息閉眼の夕べには易々と、極楽浄土の花の蕚に往生遂るに疑ひのなひは、信心決定の身の上にてある。

獲信見敬大慶喜　即横超截五悪趣

扨ての二句は念佛の行者一念帰命の立處に、横截五悪趣の大利益をうることを明したまふ。初句は經の「聞法能不忘見敬得大慶」の文に依り、后の句は「横

截五惡趣惡趣自然閉」の文に依て、信心の利益の廣大なることを明し玉ふなり。先づ獲信とは具さには信心獲得と云ふこと。扨この獲得の字に付て因果を分けての御化導もあり、又獲得と熟してたゞうると云ふことに御化導下さる處もある。仍て因果と分けて申せば、御開山の御釋の通り、因位の時うるを獲と云ひ、果時にうるを得と云ふ。故に過獲信心と云ひ、得大涅槃と云ふ。又分けずに「信心獲得すと云ふは、第十八の願をこゝろうるなり」と仰せられた處もあり。左りながら因果不二の南无阿彌陀佛なれば、必ず別々なるものには非ず。御廻向の南无阿彌陀佛は、開けば卽はち敎行信証の四法となる。然れば一念帰命の立處に、因果滿足の謂はれなるべし。次に見敬得大慶の文に就ては、古來二解ありて一に相續に約し、二に初起に約す。相續に約する義では、念佛の行者佛を拜し崇重し奉るを見敬と云ふ。卽はち他力の信をいてみれば、昨日まで尊からざる佛像も、今日は尊重恭敬の思ひに住するを見敬と云ひ、苦になりし後生に手が放れ案じられた未來を安堵して、うるところを慶び往生治定の思ひに住して、行住坐臥によろこぶを大慶喜と云。又次に初起に約せば、見敬とは心見恭敬の義にして、淨土論に願見彌陀佛とある意ろなり。恭敬とは邪見憍慢に反して、信機信法の深信の相を云ふ。卽はち恭敬の心に執持してとある意ろ。故に名義集には、南無を義翻して恭敬とあり。又信卷御引用の花嚴經賢首品の文には「信は垢濁の心なく清淨にして憍慢を滅除す恭敬の本なり」とある。此時は大慶喜と云ふも、高祖の廣大難思の慶心とのたまふこゝろにして、成就文の信心歡喜のことなり。今は後の句に横截五惡趣の卽益を明し玉ふよりみれば、初起の一念なるべし。扨卽と云ふはすなはちと云ふこと。其場をさらず立處と云ふ意ろ。次に横超とは高祖愚禿鈔に於て、二雙四重の妙判を立てさせられ、聖淨二門自力他力の上に就て横竪の區別を立て、先づ聖道門の中に於て、花天密禪の四家大乘を竪超とし、法相等の歷劫迂回の法門を竪出とし、次に淨土門の中要門定散三福九品の敎を横出とし、眞實弘願の一法を横超の直道と判じ玉ふ。喩へて申せば一本の竹の中

に。根元に一匹の虫が居て外へ出んとするに。竪には數多の節々がある。是れを五十二段の階位とすれば。歴劫の修行は一節喰ひ破りては登り。又一節一々の節を喰ひ破りて出る如く。又卽身成佛卽身是佛と談ずる大乘は。數多の節を一時に拔き。其穴を自身が出る如くぢや。又淨土の要門三福九品の定散の機は。竪に出るに非ずして。横の一重を喰ひ破りて出る如く。眞實弘願の一法は。横の一重を他より破りてある如く。自身が骨折りもせず造作も入らぬ少しも自力の計ひを用ひず。丸々他力の御仕立が。横超の直道と申す謂はれなり。然れば彌陀をたのむ一念の時。卽時に願力の不思議を以て。よこさまに六趣四生の因果を滅亡し直ちに正定聚不退轉の位ひに住することを。卽の字と横超の謂れを以て顯はし玉ふなり。

其二

大無量壽經に「横截五惡趣惡趣自然閉」とある文を偈文につゞめて。御敎化下さるゝのが今の偈文ぢや。一念皈命の信心發得のとき。願力の不思議として

迷ひの根をたちきり。地獄餓鬼畜生と云ふやふなる。五道六道の惡趣門は閉ぢ塞ひで下さる故。いやでもれゝでも極樂淨土へ。往生する身の上に仕立てらるゝを。卽横超絶五惡趣とのたまふ。依て卽の字は今日たのんで明日利益があるとか。今生にたのんで後世でなくば利益がなひとかたのむ利益との間に隙がありては卽とは云はれぬ。次に横超とは御開山の御自釋に「横とは如來の他力を申すなり。超とは生死の大海を易すく超へて。无上涅槃の都に入るなり」と仰せられた。然れば此生死の大海を横に超へると云ふことは。他力の本願彌陀弘誓の。不思議力でなければ叶はぬ。依て御和讃に「生死の大海きはもなし。ひさしくしづめるわれらをば。彌陀弘誓の船のみぞ乘せて必ず渡しける」と示し玉ふ。三世に敎法はありとても。十方に諸佛はましますとも惡人凡夫が生死を横飛びにすることの出來るは彌陀弘誓の一法に極はまる絶とは斷絶と申してたちきると云ふこと。世間でも絶交と云へば交際せぬこと。謝絶と云へばきつぱりことはることと。今は五惡趣とはづきあひをせ

ぬ。迷ひの故郷へは斷然きつぱりとはなれして。是でも非でも極樂へ參るべき身に。仕立てらるゝを横超絶と云ふ。爰を蓮師は御文章に『されば五道六道といへる惡趣に。已でに趣くべきみちを。彌陀如來の願力の不思議として。これをふさぎたまふなりてのいはれをまた經には。横截五惡趣々々自然閉と說かれたり。故に如來の誓願を信じて。一念の疑心なきときは。いかに地獄へ落ちんとおもふとも。彌陀如來の攝取の光明にてさめとられまいらせたら ん身は。我がはからひにて地獄へも落ちずして。極樂に參るべき身なるが故なり』と仰せられた。扨五惡趣とは地獄。餓鬼。畜生。人間。天上のこと。是れを五趣と云ふは。趣はれもむくと云ふ字で到なりと云ふ。今の御文章の御言にもおもむくべきみちと仰せられたのが。趣と云ひ道と云ふ意ろなり。此中に修羅を合してある若し是れを開けば六趣となる。此五惡趣のことは具さには横川の源信僧都の往生要集に述べさせられてある今は略す。扨かゝる惡道にいやでも落ちねばならぬが。我れらが根情機の有樣若し彌陀の本願が無かつたなら。臨終捨命のダベには。黑鬼赤鬼の獄卒に引き立てられ。泣々出掛ける其時は右も左も鋼の山。前も後も刀の林し。八寒地獄の鉄城には紅蓮の氷凍々と凍り。阿鼻地獄の石門には。焦熱の炎煌々と燃へ。無量永劫大苦惱を受けねばならぬ筈なるに。此度は如何なる不思議の御手廻はしがありしやら万劫の初事に弘誓の本願にあひたてまつり。他力信心を獲たてまつれば。即時に五惡趣を絶ち截りて。往生安養國の大果報を得たてまつるが。信心の行者。扨も不思議の願力ぞと仰信すべきものなり。

一切善惡凡夫人　聞信如來弘誓願　佛言廣大勝解者
是人名芬陀利花

扨此四句は初の二句に得益の人を擧げ。後の二句に正しく諸佛稱讚の利益を明す。卽はち他力御廻向の信心を得れば。其信德として諸佛如來の御讚嘆にあずかることを御示しなされたが今の偈文ぢや。先つ一切とあるは。普及

の辭と云ふて彌陀の本願の御相手は。智愚貴賤善惡男女の隔てなく。弘く衆るゆへに一切と云ふ。善惡の凡夫人とは九品の機類にして。十方の衆生を差した言なり。其中に於て智者と愚者とを對すれば。智者は善凡夫愚者は惡凡夫なり。又在家と出家と對すれば。出家は五欲の家を捨て離れたる故に善凡夫なり。在家の身は五欲に染着して離れざるゆへに惡凡夫なり。持戒と破戒と對するは持戒は善。破戒は惡かくのごとく。智愚善惡の凡夫は多けれども夫れを總じて一切善惡の凡夫人と仰せられた。發句に「れもしろやなにを積みても雪の舟」と云ふ如く。荷を積む舟で善いも惡いも米も積めば藁も積む何や角や取りまぜて積み込むけれども。其上に雪が降たら眞白に見へて隔てはなひ。今も其如く定散諸機各別の善と惡とは分れども御慈悲の雪がつもりてみれば。同一念佛四海兄弟唯一の念佛行者で更に異りはなひ善人も惡人も一心にたのみさへすれば御濟しはなひ。故に誇法闡提廻心皆往逆惡もらさぬ誓願なれば。一心皈命のものを一人も取り落しの無ひのが。阿彌陀如來の御慈悲ぢや。其如來の弘誓願を聞信すれば。佛は廣大勝解の人と讃め玉ふ。然れば其の弘誓願を如何やうに聞信するぞと云ふに。此聞信の聞れが御當流の肝要なる處で。先づ本願成就の御文には「聞其名号信心歡喜」と說かせられて。聞卽信の謂れなれば大切に聽聞せねばならぬ。仍て御開山の御釋には「聞と云ふは衆生佛願の生起本末を聞て疑心あることなしこれを聞と云ふ」と御示しなされて。阿彌陀如來の本願の始終を聽聞して。いよ〳〵かゝる淺間敷きいたづらものを。本と救ひたまふ超世の本願。たのむ一念信ずる一つで。必ず助け玉ふに間違ひなひと。疑ひなく慮りなく彼の願力に乘托するを聞信とは仰せられた。如何程耳に聞かしても。信せられねば所詮がなひ依て蓮師は「聞と云ふはたゞ耳やふにきくにあらず。善知識にあひて南无阿彌陀佛の六の字のいはれをよくきゝひらきぬれば。報土に往生すべき他力信心の道理なりと。こゝろにられたり」と仰せられ。六字のいはれを聞きひらき。他力信心の御道理が篤と知られねば聞信にはならぬ。心〳〵にあらざれ

ば見れども見へず聽けども聽へず讃文に無眼人無耳人と名けられた。強盜に肴を燒く料理人便處へ行く其間た下女にたのみ。其燒き肴を見て居て呉れと申し置き。下女心得たりと。扨料理人立ち歸り見れば。燒肴の形ちなし。下女に如何したと尋ぬれば。去れば向ひの熊猫が其小窓より入り來り。火鉢の上に乘りかゝり肴を串のまゝ横に喰へて。其樣先より隣家の屋根に往き肴を喰ひましたと。皆まで云はせず阿房よ馬鹿よと呵りたるに。下女口答へして其方が驕き肴を見て居て呉れと申したゆへに。念を入れて猫の來るより往き先まで。能く見屆けたと理屈を申したと云ふ話しがある。是れが見れども聞けども。无眼人无耳人のわれ仲間。扨同行の中にも聰聞々々とて。きゝ歩き參り歩きして御法座參りを。仕事に致して居る人は多けれども。無眼人無耳人たまゝ得手聞勝手聞を信心に紛らし。れはへた言を當て力らに。聞信も無疑も屆かぬときは所詮なひ。今れはよその人の聞振りを見るに。先づ助り度ひで持ちかけて聞く願求心。地獄怖さに聞く憶病心願行なしに唯助かる

を宛てにして聞く強欲心。惡人正機の本願故に罪ありながら極樂參りと頼りて聞く憍慢心。寸即十生我も人もと仲間で聞く寄合心。信心なしに意得顔で聞く名聞心。聞かせることと知て聞くてとしらぬ坊主心。序でにもう少し擧ぐれば。病氣となりて急いで聞く狼狽心。死ぬるを苦にして聞く無常心。跡は野となれ山となれ。極樂參りを急いで聞く脫走心。年寄の死ぬることを聞く虛忘心。若き人の泣き事云ふて聞く化相心。後家の操立てに聞く自慢心。客僧に附き歩き聞く所望心。急いで聞くが飛脚心。酒の氣限で聞く醉狂心。金持ち顔で聞く天狗心。物知り顔で聞く高慢心等なり。御開山の御言に聞と云ふは本願をきゝて疑ふてゝろなきを聞と云ふ。是れは無疑の信心を以て聞の聞れを知らせ玉ふなり。又次に聞と云ふは信心を顯はす御法なりとあれば。聞へたまゝが信即はち无疑の一念を聞きひらくとも。聞うるとも是れが聞信のいはれなり。

佛言廣大勝解者　是人妙芬陀利花

この二句が正しく稱讃の利益にて。念佛の行者信德に依りて。廣大勝解の人とはゆられ。芬陀利花に喩へらる。廣大とは御廻回の信が。廣大無礙の信なるゆへに。心もひろく身もゆたかになる。御和讃に威德廣大の信を心てと述べ玉ふ。佛智滿入の故に廣大なり。信心の智慧を得るゆへに勝解なり。是人とは獲信の行者卽はち。如來の佛誓願を聞信したるものをさすなり。芬陀利花とは梵語にて爰に白蓮花と翻ず。觀無量壽經に『若念佛者當知此人是人中芬陀利花』と說き玉ふ。善導大師散善義の中に。若し能く相續して念佛する者は。此人は甚だ希有なりとす。更に物として以て之れにたとへぶべきなきがゆへに。芬陀利を引て喩へとす。芬陀利とは人中の好花と名く。亦は希有花と名く亦は人中の上々花と名く。亦は人中の妙好花と名く。此花相傳て蔡花と名く是なり。若し念佛する者は卽はち是れ人中の好人。人中の妙好人。人中の上上人。

人中の希有人。人中の最勝人なりと。是如念佛の行者をはめたまう今蓮花に就て三德を擧げて辨ずれば。一には淤泥不染の德。二には花果同時の德。三には成熟清淨の德。初めに淤泥不染とは。蓮花は泥中に生ずれども淤泥に染まず。清淨无垢の花を開く如く。念佛の行者妄念妄執貪瞋煩惱の泥中にありながら。其煩惱の淤泥に染まずして。清淨眞實の信心の花を開く。故に善導は「衆生貪瞋煩惱中。能生清淨願往生心」と仰せられ。高祖二門偈には「高原の陸地には蓮を生せず。卑濕の淤泥に蓮花を生ず。此れは凡夫煩惱泥中に在て。佛正覺花を生ずるに喩ふ」と御示しなされた。二に花果同時の德。これはすべて草木の實を生ずるは。花落ちて後に菓を結ぶ然るに此蓮花ばかりは花と菓と同時なり。花が開けばもはや其中に菓を生じて居るあり。今念佛の行者も其如く。信心の花と往生の菓と隔歷はなひ。信ずる一念に早や佛の方より往生は治定せしめ玉ふ道理なるが故に。龍祖は「信心淸淨者花開卽見佛」とのたまひ又論には『如來淨花衆正覺花化生』とある。是れを高祖は御和讃に「如來淨華の

聖衆は。正覺の花より化生して。衆生の願樂てと〳〵。すみやかにどく滿足す」と仰せられた。三には成熟淸淨の德とは。蓮花成熟すれば。眼に其色を見鼻に其香をかぐ。諸根淸淨にして身心さわやかなり。念佛の行者信心決定すれば三業五念淸淨にして身心悅豫するとあり。身には禮拜口には讚嘆意に作願觀察の。彼此三業不相捨離。芬陀利花とは此いはれなり。扨箇樣に稱讚を蒙るは。我れかしこくて吾れが利功ではめらるゝのでは更々なひ。一重に御廻向の信德である。實に我が機の手前は淺間敷いたづらもの。十惡五逆とにくみすてられ。心想羸劣と耻かしめられ。重障非器とはねだされ。俺未千万なる根情なれども。他力御信心の得られた德で。妙好人の上上人の希有人の最勝人と。ほめたてられ芬陀利花と花に喩へて。蓮花のやうな同行ぞと仰せらるゝ。御和讚に『他力の信心うるひとをうやまひはきによろこべば。則はち我親友ぞ。敎主世尊はほめたまふ』とありて。釋迦如來樣はしたしひ友達ぞと仰せられ。又觀經の上では。觀世音大勢至の二菩薩が爲其勝友と。すぐれた

友達とするぞよと說き玉ふ。今が今迄鬼の友達大蛇の連れと云はれた身が諸佛菩薩にほめられて希有最勝の手柄者。上々妙好の仕合者といはるゝ身の上に仕立てられたが阿彌陀如來の御慈悲なり。

彌陀佛本願念佛　邪見憍慢惡衆生　信樂受持甚以難
難中之難無過斯

此四句は信受の甚難なることを明して勸信し玉ふ。卽はち經に『憍慢弊懈怠難三以信二此法一』と說かせられ。又『如來興世難レ値難レ見乃至難中之難无レ過二斯難一』とある經文の意をつゞめて御敎化下さるゝ偈文ぢや。扨彌陀佛の本願念佛とは。餘佛の念佛に簡んだ御言なり。諸佛にも念佛はあるが。今は諸佛觀想の念佛を云ふのではなひ。南無阿彌陀佛の名号のことで。他力本願の念佛ぢや故に法然聖人一牧起請の御文には「もろこし我朝にもろ〳〵の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず。また學問をして念のこゝろをさとりて

申す念佛にもあらず」と仰せられて。彌陀佛の本願念佛は唯往生極樂のために南無阿彌陀佛と申して疑ひなく往生ずるぞとおもひとりて申すほかに別の子細候はずとありて是れを選擇本願の念佛とも知らせ玉ふ。即はち餘行を傍ひ南无阿彌陀佛の一法を選擇攝取したまひて。機法一体に成就したまひたる。六字を彌陀本願の念佛と云ふ。次に邪見憍慢惡衆生とは五濁惡時の下にて五利使のことを弁じたる如く。よこしまにしてたゞしからざる見込を邪見と云ふ。憍慢とは自擧を憍と云ひ。他を凌ぐを慢と云。即ち我れを高振るを憍と云ひ。人をあなどるを慢と云。扨この憍慢に就ひて俱舍論に七慢を明す。一に慢心これは他の劣れるに於て己れ勝れたりと計し。他の等しきに於ひて。己れ等しと思ふ。二に過慢心これは他の等しきに於て。己れ勝れたりと思ひ他の勝れたるに於て己れ等しと計す。三に慢過慢心これは他の勝れたるに於ひて。己れ勝れたりと計す。四に我慢心これは自らの最勝五蘊の依身に於て我々所を計す。五には增上慢心これは少分を得て全分を得たりと計す。六に卑慢心他の多分勝れたるに於て。己れ少し劣れりと思ふ。七に邪慢心是れは全く勝德なけれども。己れ德ありと計する。如是憍慢のこゝろに住して人我を募る。佛法の器に非ざるが故に惡衆生と云ふ。御當流では機法二種の深信に知らせ玉ふ如く。我身は無有出離之緣のいたづらものと。機の方を見限りつめて。ひたすら本願に乘托するの外はなひ。信樂受持とは本願を信ずること。然る佛法には種々の難がありて。先づ御和讃に「如來の興世にあひがたく。諸佛の經道きゝがたし。菩薩の勝法きくことも无量劫にもまれらなり」で。如來の興世とは佛の御出世を云ふ。此佛の出世に遇ふと云ふことは中々難しいことである。今一例を示さば。昔し惡多太子御誕生の時。御父淨飯大王阿私陀仙人を召され。太子の御人相を見せしめ玉ふに。仙人太子を見たてまつると。御足を取て押しいたゞきさめざめと涙をこぼして打恭れたる顏色ゆへ。父王大ひに心配あらせられ太子に不吉の相ありやと尋ね玉へば仙人對へて申し上るには。決して左樣なることにあらず。太子の御人相

吉祥圓滿にして。目出度き事此上なし。禹乘の御位ひに卽き玉はゞ。後に轉輪聖王となり玉ふべし。左りながら多分は御出家あらせられ。三界の獨尊とならせ玉ふべし。然るに私し壽命今より三年に縮まりたればたま〳〵佛けの御出世に遇ひ奉りながら。命短くして御化導に値ひ奉ること叶はぬゆへ。夫れが悲しさに思はず。落涙つかまつりたと申し上げたとある遇ま佛の御出世に生れ合せたれども。肝心なる壽命がなければ。御濟度にあづからぬ。御濟度にあづからねば値ひ奉らぬも同じこと。亦たとひ佛世に生を受けても。御緣がなければ舍衛國の三億の如く。値ひ奉らざると同前なり。然れば假令如來は御入滅なされて此世に在ましずとも。其御敎へを傳ふる人師ありて。念頃に說いて敎へるとき如說に信受すれば。佛に値ひ奉たと同じおやとある依て次の御和讃には「善知識にあふことも。敎ふることもまたかたし。能くきくこともかたければ。信ずることもなほかたし」と仰せられて。たとひ佛敎がありても。其道理を解說して敎へてくれる人がなければ。夫れこそ眞の闇み

で无佛の時と云はねばならぬ。然るに在座の我れ人は。釋迦彌陀二尊の喚遣により。三國七祖の傳燈をうけ。近くは御開山聖人御出世の御恩次第相承の善知識。且暮不欠の御化導により。如來興世の本意なる弘願眞宗の敎法をきゝ。無量億劫難値難見とある。彌陀の本願にあひ奉りしは。親り釋迦彌陀二尊に値ひ奉りたと同じこと。三千年に一度咲く優曇花の花盛りを待ち受けたは。今日御座の面々の仕合せと喜こばねはならぬ。

信樂受持甚以難　難中之難无過斯

御和讃に「一代諸敎の信よりも。弘願の信樂なほかたし。難中之難とゝきたまひ。无過斯難とのべたまふ」とありて。聖道通途の信心でさへ容易ならざる其上に。一代の諸敎。八万四千の敎法より。弘願の信樂なほかたしと仰せられたこれは御開山樣の勝手な御言かと云ふに。決して左樣ではなひ。源と大無量壽經に「佛語二彌勒一如來興世難レ値難レ見乃至信樂受持難中之難無レ過二斯難一」と說か

せられて。釋迦如來が彌勒菩薩に向ふて。彌陀超世の本願他力不思議の妙法は實に甚難希有の法ぢやと告げさせられた。亦阿彌陀經の上では「一切世間難信之法」と仰せられた。成程花嚴の頓大法華の妙法。般若の皆空涅槃の佛性何れも勝れた教法なれば。たやすい筈はなけれども。大信心海甚以難入。自願力一發起故とありて聖道門の如く自力で發される信心なら。發し易ひ道理もあるが他力の信心は凡夫の力らでは發されぬ。如來の願力でなければ得られぬ。然るに機樣は邪見憍慢の惡衆生とありて。迚も佛法の器でなひのが。我等が根性ゆへての念佛の法を信ずること甚だ以て難しとある。是れ法は元來本爲凡夫惡機爲本なれば。易行易修なれども。底下薄地の淺間しい凡夫が超過一代の法門。別願不共の彌陀法を信受することは。宿善の開發によるなり若し无宿善の機にいたりては。力られよばず。宿善開發して善知識にあひぬれば。何の難きことかあらん。皈するところ今の甚以難とあるは。難は疑情の機にあるなり。邪見憍慢にして廻心も。深信も療治叶はずは極難信なり。喩へば高山の頂には水を留むることが如く。邪見憍慢の高峯岳山の頂きには信樂の水留まり難し。是れを難中の難斯れに過ぎたるはなしと仰せられた。

正信偈講話上 終

018111-001-6

特30-277

正信偈講話

本多 賞道／著

上

M28. 5

ABF-1196